

福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集

MORO OKA  
諸岡遺跡

—第14・17次調査報告—



1984

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集

MORO OKA  
諸岡遺跡

—第14・17次調査報告—

8224-175  
8224-142

1984

福岡市教育委員会

第 108 集 正 誤 表

頁	行	誤	正
掲図目次	Fig.54	(2 : )	(2 : 3)
"	Fig.57	B - 126 地点	B - 125 地点
図版目次	PL.10	地下式墳群	地下式土墳群
5	Tab.1-17	中世居址	中世居館址
6	21 行	ナイフ型石器	ナイフ形石器
12	7 行	3. 6 cm	3. 6 m
"	"	4. 2 cm	4. 2 m
18	15 行	SSO 36	SKO 36
21	9 行	攪乱	擾乱
"	28 行	季朝陶磁	李朝陶磁
"	30 行	季朝沙器	李朝沙器
21	4,5 行	高台疊付け	高台疊付け
26	5 行	高台疊付	高台疊付
31	14 行	磨齒は	磨齒は
37	24 行	~ 1 cm	~ 1 m
"	31 行	基部幅 2. 5 m	基部幅 2. 5 cm
38	21 行	鐘があり	鐘があり
51	Fig.48	ブロック 1	ブロック 2
61	13 行	警察学校	警察学校
62	Tab.3 No.7	ツ	メ
122	Tab.3 No.122	ナ	石工

## 序

緑と自然に恵まれた福岡市は、近代都市であると同時に、古来より豊かな歴史にはぐくまれた伝統都市でもあります。市内各所に、こうした歴史を今に語る数多くの文化財が伝えられています。

年々進行する都市化の波は、われわれが20年前に見た農村風景を住居地という新たな歴史景観に変えています。地中に保存されてきた埋蔵文化財も、その波を避けることはできません。

本書に収めた諸岡遺跡は、国指定史跡の板付遺跡に近接し、はやくからその重要性が知られていました。このたび都市公園を設置するにあたり、やむを得ず遺跡地内的一部を破壊することになり、緊急発掘したものです。本書には調査で得られた考古学的資料が数多く報告されています。本書が学術研究の場で、また市民各位の文化財保護・普及のために活用されますようお願いいたします。

最後に、調査実施にあたっていろいろご指導いただいた諸先生、関係各位に厚くお礼申しあげます。

昭和59年3月10日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

## 例 言

1. 本書は、諸岡北公園建設に伴い、福岡市教育委員会が昭和57年度に行った諸岡遺跡群第17次調査の報告書である。なお55年度に実施した第14次調査も併せて報告する。
2. 当調査地点採集の板碑については、解説を福岡市教育委員会博物館準備室 渡辺雄二氏にまた弥生土器について、まとめを九州大学大学院 藤尾慎一郎氏にお願いした。記して感謝申しあげる。
3. 本書の執筆分担は次のとおりである。

I、II、III、IV、VII 3・4、……………柳沢 一男  
III (参考資料・板碑) ………………渡辺 雄二  
V、VI、VII 1・2-2) ………………杉山 富雄  
VII 2-1) ………………藤尾慎一郎

4. 本書に掲載した遺物実測図の作成、トレースは、担当者のはかにつぎの諸氏の協力を得た。  
郭錦苗(釜山大学卒)、藤尾慎一郎(九州大学大学院)、南秀雄(京都大学大学院)、宮井善朗(九州大学生)、鈴木克彦(京都大学)
5. 本書に掲載した写真は、遺構撮影を柳沢が、遺物撮影を杉山が行った。
6. 本書の編集は、柳沢・杉山が担当した。

## 凡 例

1. 本書に使用する基準方位は磁北である。真北との偏差は、西偏 $6^{\circ}40'$ である。
2. 遺構の記号は以下の通りである。

S A……土壘・柵  
S B……建物 (獨立柱建物)  
S D……溝  
S K……土塙  
S X……以上以外の遺構
3. 諸岡館址出土の土器は多種にわたるため、種別によって断面表示を変えた。

白ヌキ……土師器、土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、弥生土器  
黒 滕……須恵器  
漬 网……陶器、沙器  
淡 网……磁器
4. 本調査地点を表わす記号にはMS-17を用いた。但し一部、旧記号MYS-Bを用いているものもある。また、第14次調査には、旧記号MYS-Aを用いている。  
なお、今回報告分から、諸岡遺跡の各調査地点については、従来のアルファベット表示をやめ、調査次数による表示に変更した。その新旧表示の対照は、第1章に示している。新たな調査区表示は今後に期したい。

## 本文目次

第Ⅰ章 はじめに.....	1
第Ⅱ章 位置と環境.....	3
第Ⅲ章 諸岡館址の遺構と遺物.....	8
第Ⅳ章 古墳時代の遺構と遺物.....	33
第Ⅴ章 弥生時代の遺構と遺物.....	39
第Ⅵ章 先土器時代の遺物とその分布.....	49
第Ⅶ章 総括.....	65
1. 先土器時代.....	65
2. 弥生時代.....	67
1) (弥生土器).....	67
2) 遺構.....	68
3. 古墳時代.....	71
4. 諸岡館址.....	72

## 挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1 : 50,000).....	2
Fig. 2 諸岡遺跡全体図 (1 : 3,000).....	4
Fig. 3 諸査区周辺測量図 (1 : 600).....	7
Fig. 4 諸岡館址遺構配置図 (1 : 400).....	8
Fig. 5 土里 S A 001断面図 (1 : 100).....	9
Fig. 6 捶立柱建物配置図 (1 : 120).....	11
Fig. 7 上墳実測図 (1 : 40).....	16
Fig. 8 S K 039実測図 (1 : 80).....	17
Fig. 9 S K 035実測図 (1 : 80).....	17
Fig. 10 S K 036・038実測図 (1 : 80).....	18
Fig. 11 S K 037・045実測図 (1 : 80).....	19
Fig. 12 S X 043実測図 (1 : 20).....	19
Fig. 13 S X 040実測図 (1 : 40).....	20
Fig. 14 S A 001出土遺物実測図 (1 : 3).....	22

Fig. 15 各土壤出土土器実測図 (1 : 3).....	23
Fig. 16 地下式土壤陥没坑出土遺物実測図 I (1 : 3).....	25
Fig. 17 地下式土壤陥没坑出土土器実測図 II (1 : 3).....	26
Fig. 18 S X043出土土器実測図 (1 : 5) .....	27
Fig. 19 柱穴・表土出土土器実測図 (1 : 3) .....	28
Fig. 20 石塔・石臼複合実測図 (1 : 6).....	30
Fig. 21 銅錢拓影図 (2 : 3).....	31
Fig. 22 板碑実測図 (1 : 6).....	32
Fig. 23 古墳時代遺構配置図 (1 : 400) .....	33
Fig. 24 S X042実測図 (1 : 30).....	34
Fig. 25 S X044実測図 (1 : 30).....	34
Fig. 26 S X043実測図 (1 : 40).....	35
Fig. 27 S X046実測図 (1 : 40).....	36
Fig. 28 S K026実測図 (1 : 40).....	37
Fig. 29 出土遺物実測図 (1 : 3).....	38
Fig. 30 弥生時代遺構配置図 (1 : 400).....	39
Fig. 31 S X010・011実測図 (1 : 40).....	40
Fig. 32 S K010出土遺物実測図 (1 : 8).....	40
Fig. 33 S K013実測図 (1 : 40).....	41
Fig. 34 S K013出土遺物実測図 (1 : 4).....	41
Fig. 35 S K014実測図 (1 : 40).....	42
Fig. 36 S K014出土遺物実測図 (1 : 4).....	42
Fig. 37 S K015実測図 (1 : 40).....	43
Fig. 38 S K015出土遺物実測図 (1 : 4).....	44
Fig. 39 S K016実測図 (1 : 4).....	46
Fig. 40 S K016出土遺物実測図 (1 : 4).....	46
Fig. 41 S K017実測図 (1 : 40).....	47
Fig. 42 S K017出土遺物実測図 (1 : 4).....	47
Fig. 43 S K017出土遺物実測図 (2 : 3).....	47
Fig. 44 S K024 (1 : 40).....	48
Fig. 45 先土器時代調査区 (1 : 400) .....	49
Fig. 46 土層 (F 16・17区西壁) 実測図 (1 : 40) .....	50
Fig. 47 遺物分布図 ブロック 1 (1 : 100) .....	50
Fig. 48 遺物分布図 ブロック 1 (1 : 100) .....	51
Fig. 49 I類の石器実測図 (2 : 3) .....	53
Fig. 50 II類の石器実測図 (2 : 3) .....	55

Fig. 51	III類の石器実測図 (2 : 3).....	56
Fig. 52	IV - IX類の石器実測図 (2 : 3).....	57
Fig. 53	X類の石器実測図 (2 : 3).....	59
Fig. 54	XI・難類の石器実測図 (2 : ) .....	59
Fig. 55	石核実測図 (2 : 3).....	60
Fig. 56	諸岡・板付遺跡における先土器時代遺物分布図 (1 : 25,000) .....	61
Fig. 57	板付B-126地点出土遺物実測図 (2 : 3) .....	61
Fig. 58	諸岡遺跡のナイフ形石器実測図——第2・4次、17次地点遺跡 — 1 : 2) .....	66
Fig. 59	福岡平野弥生時代前期七器編年図 (1 : 12) .....	69
Fig. 60	諸岡館址復原図 (1 : 1,000) .....	74
Fig. 61	館内建物配置図 (1 : 600) .....	75

## 表 目 次

Tab. 1	既往調査一覧表 .....	5
Tab. 2	掘立柱建物一覧表 .....	14
Tab. 3	先土器時代遺物計測表 1 .....	62
Tab. 4	先土器時代遺物計測表 2 .....	63
Tab. 5	先土器時代遺物計測表 3 .....	64

## 図版目次

PL. 1	諸岡遺跡周辺空中写真 (1 : 8,000)
PL. 2	(1)第14・17次調査地点遠景 (東から) (2)第14次調査地点調査前全景 (東から)
PL. 3	(1)第14次調査地点調査前全景 (東から) (2)第17次調査地点調査前全景 (北から)
PL. 4	(1)第14次調査地点調査終了時全景 (西から) (2)第14次調査地点諸岡館址館内全景 (西から)
PL. 5	(1)土塁SA001南辺部 (西から) (2)土塁SA001断面 (西から)
PL. 6	(1)土塁SA001 (南から) (2)溝SD003断面 (南から) (3)溝SD002断面 (南から)
PL. 7	(1)第17次調査区・土塁SA001西辺と館内 (地から) (2)土塁SA001西辺と土塁下の遺構 (北から)
PL. 8	(1)館内掘立柱建物群 (北から) (2)館内掘立柱建物群 (南から)

- PL. 9 土壌SK008・027・018
- PL. 10 (1)地下式壙群  
(2)地下式土壌SK039（東から）
- PL. 11 (1)地下式土壙SK035（東から）  
(2)地下式土壙SK036（東から）
- PL. 12 (1)地下式土壙に設けられた横穴（SK036からSK038を見る）  
(2)地下式土壙SK038（東から）
- PL. 13 (1)地下式土壙SK037（東から）  
(2)地下式土壙SK045（東北から）
- PL. 14 (1)一字一石経塚SX040（北から）  
(2)SX040断面（南から）
- PL. 15 (1)一字一石経塚SX040土壙（北から）  
(2)土壙墓SX043（東から）
- PL. 16 (1)古墳時代の遺構（土塁SA001盛土下・北から）  
(2)扇形石棺墓SX042（西から）
- PL. 17 (1)石蓋土壙墓SX044（北から）  
(2)SX044墓壙（北から）  
(3)堅穴式石室墓SX043（南から）
- PL. 18 (1)堅穴式石室墓SX043（蓋石除去後北から）  
(2)SX043石室内（西から）  
(3)SX043腰石の状況（西から）
- PL. 19 (1)横穴式石室墓SX046（西から）  
(2)SX046入口部（西から）
- PL. 20 (1)弥生時代の遺構（第17次調査、北から）  
(2)弥生時代の遺構（第14次調査、西から）
- PL. 21 (1)袋状堅穴SK010（西から）  
(2)土壙SK013（北から）
- PL. 22 (1)袋状堅穴SK014（西から）  
(2)袋状堅穴SK015（東から）
- PL. 23 (1)土壙SK016（西から）  
(2)袋状堅穴SK017（東から）
- PL. 24 (1)袋状堅穴SK024（東から）  
(2)E16-17区上層（北から）
- PL. 25 (1)先土器時代の調査（ブロック1東から）  
(2)先土器時代の調査（ブロック2南から）
- PL. 26 諸岡館址の遺物I
- PL. 27 諸岡館址の遺物II
- PL. 28 諸岡館址の遺物III
- PL. 29 (1)諸岡館址の遺物IV  
(2)古墳時代の遺物
- PL. 30 (1)弥生時代の遺物SK010・014～016  
(2)先土器時代の遺物 I類の石器・II類の石器
- PL. 31 先土器時代の遺物、III類の石器・IV～VI類の石器・X類の石器・XI・難類の石器・石核

# 第Ⅰ章 はじめに

## 調査にいたる経過

諸岡遺跡は、福岡市博多区諸岡に所在し、後期III石器時代以降の各時期にわたる遺構が重複した遺跡である。

福岡市教育委員会は、近接する国史跡板付遺跡との関連を明らかにする目的で、1973年度から諸岡遺跡の調査をすすめている。しかし、計画的な調査ではなく宅地開発等にともなう緊急的な処置であるため、必ずしも遺跡の全体を復原するうえで充分といえるものでない。

本書に報告する中世居館の諸岡館址は、諸岡遺跡でも北端に位置する。調査時点ですでに館址の多くは宅地化により破壊されていたが、以下の章でみるように多くの成果を得た。発掘調査は、その要因となった開発事業が二種でかつ年度を越えていたため、館址を南北にわけて二次にわたって実施した。まず南半部は、隣接する西寺守納骨堂建設にかかる緊急調査（第14次調査）として1980年度に、北半部は福岡市公園建設課が原局となった諸岡北公園建設にかかる調査（第17次調査）として1982年度に行なった。

## 調査組織

### 第14次調査（1980年11月18日～12月12日）

調査主体	福岡市教育委員会
調査統括	文化課長 甲能貞行（前任）
	埋蔵文化財第2係長 柳田純孝（前任）
調査庶務	埋蔵文化財第1係 古藤国雄
調査担当	埋蔵文化財第2係 柳沢一男・二宮忠司
調査補助	渡辺和子・小林義彦

### 第17次調査（1982年7月26日～10月23日）

調査主体	福岡市教育委員会
調査統括	文化課長 生田征生
	埋蔵文化財第1係長 柳田純孝
調査庶務	埋蔵文化財第2係長 折尾 学
調査担当	埋蔵文化財第1係 古藤国雄
	埋蔵文化財第2係 柳沢一男・杉山富雄

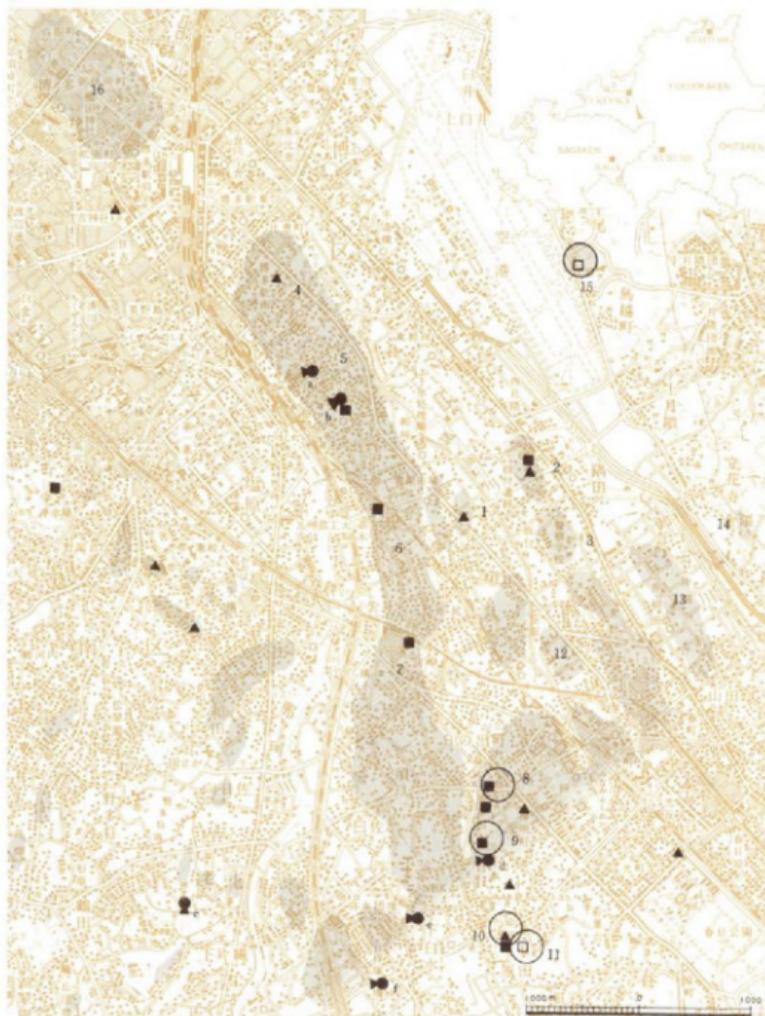


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)

- |                 |         |           |          |           |          |
|-----------------|---------|-----------|----------|-----------|----------|
| □ 銅鐸発見出土地       | 1 諸岡遺跡  | 5 郡河遺跡群   | 9 小赤井手遺跡 | 13 伸鳥遺跡   | a 銅鐸     |
| ■ 青銅器浴缶出土地      | 2 版付道路  | 6 五十川遺跡群  | 10 大雨遺跡  | 14 金張遺跡   | b 銅鏡八幡古墳 |
| ▲ 青銅武器・武具形祭器出土地 | 3 高畠道路  | 7 井尻遺跡群   | 11 大谷遺跡  | 15 木地ヶ瀬遺跡 | c 古墳     |
| ● 前方後円墳         | 4 北忠道跡群 | 8 須久・岡本遺跡 | 12 三筑遺跡  | 16 博多道路群  | d 竹ヶ本大塚  |

## 第II章 遺跡の位置と既往の調査

玄界灘に面する福岡平野部は、博多湾に流入する数本の中小河川と、<sup>三郡</sup>～<sup>背振山系</sup>から派生した低丘陵が入り込んで形成された小平野が東西につらなる。北から柏屋、福岡、早良平野と呼んでいる。

なかでも福岡平野は、主に那珂・御笠の二河川の沖積作用によって形成され、博多湾に向って逆三角形状に開く地形をなす。平野部の東西は、それぞれ標高50～80mの低丘陵によって柏屋、早良平野と区される。最深部<sup>田二市</sup>筑後部から分水嶺をへて筑後平野に至る。福岡平野はもっとも広い東西幅で約7km、南北長約10kmをはかり、総面積約40km<sup>2</sup>である。

さて、平野周囲は花崗岩と第三紀層からなる低丘陵がせまり、御笠・那珂川にはさまれた地域一帯に段丘面が形成されている。中流域には春日丘陵と呼ぶ高位段丘面が拡がるが、さほど広い範囲に及んでいない。下流域では那珂川西岸域一帯と、御笠・那珂川にはさまれた地域に<sup>2)</sup>中位段丘I・II面が北に向って長くのびている。段丘面は、北端部で標高5～6mまで低くなり、その端部が沖積層下に埋没し境が不明瞭となっている。

この御笠・那珂川にはさまれ南北にのびる中位段丘II面をわれわれは那珂台地と呼んでいるが、この台地とその周辺に島状に残存する段丘、またそれをとりかこむ沖積地こそ、後に奴国を形成するにいたる弥生文化展開の基盤であり、主要な遺跡が分布するのである。春日丘陵から那珂台地南端にかけて須久・岡本遺跡、大原遺跡、大谷遺跡、赤井手遺跡などが、那珂台地中央部には井尻、五丁川遺跡群、北端部には那珂、比恵遺跡群が拡がる。とくに台地中央部から北端部にかけての東西幅0.5～0.9km南北長6kmの間は、遺跡面の断絶がない。いわば主要地名をとて遺跡を区分しているにすぎず、那珂台地遺跡群と統称すべき内容を包含している。規模・継続期間からみて、九州はおろか列島有数の弥生時代遺跡といえよう。未だ調査はすんでいないが、福岡平野の弥生時代推移を解明するキーとなる遺跡である。

さて本書に報告する諸岡遺跡は、叙上の那珂台地遺跡群中央部縦から東側沖積地に600mほど入った独立台地上に分布する。現在の地籍は博多区諸岡1～4丁目に属する。台地は基盤花崗岩上に砂砾、青灰色粘土、八女粘土、鳥栖ローム層が堆積した中位段丘II面であり、東西幅150m、南北長約600mをはかる。史跡板付遺跡の南西700mに位置し、国土地理院刊行の5万分1地形図「福岡」の図幅上端から24cm、右端から9.4cmが諸岡遺跡にあたる。

### 既往の調査

諸岡遺跡の調査は、昭和48年度以降、宅地開発に伴う事前調査として実施し、これまで17次におよんでいる。調査面積は約8,400m<sup>2</sup>、遺跡全城の9%にすぎず、未だ遺跡の全体像を知るには未調査部が多い。なお、これまでの調査区名には、諸岡…区、あるいは板付…地点の二種があり混乱を招いている。また遺構表示名、番号についても一致していない。将来この点に關

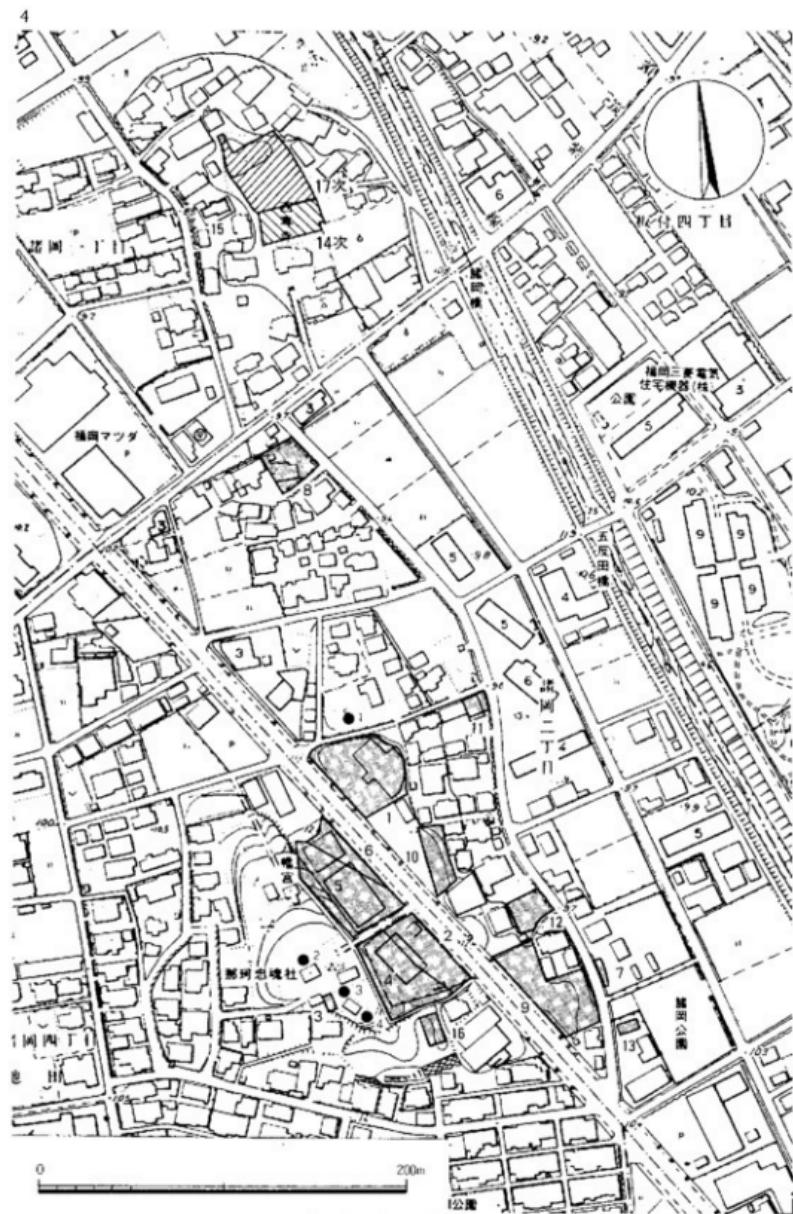


Fig. 2 諸岡遺跡全体図 (1 : 3,000)

Tab. 1 諸岡遺跡既往調査一覧

調査地点 (区称)	地番等	調査対象面積 (調査面積) m <sup>2</sup>	調査年月	調査の内容	報告
1 諸岡 H	諸岡2丁目		1972	・中世 地下式土壙2、他	本
2 諸岡 A	諸岡ノ前 453 454-3	— (1150)	1973	・先史時代包含層(ナイフ形石器、古形石器) ・弥生時代 猿轍墓地 (前期末～後期初頭54基) ・中世 土壙・ビット	周辺1
3 諸岡 B	諸岡4丁目3	— (20)	1974	・弥生時代兼腰塗(9基 ゴホウラ製貝輪の出土)	周辺2
4 諸岡 C			1974	・先史時代 包含層(ナイフ形石器)	
5 諸岡 D	諸岡ノ前 439・453	1847 (1800)	1974	・縄文時代 拝型文土器 ・弥生時代 土壙群(無文土器の出土、 20基) ・中世 地下式土壙6、土壙	周辺3
6 諸岡 E	諸岡ノ前 454-3	— 550(500)	1975	・中世 清4、土壙3	周辺3
7 諸岡 F	諸岡2丁目10-7	567(38)	1975	・縄文時代 夜日式土器包含層(古地東縁 部段落)、清1	周辺3
8 板付 I-11	諸岡2丁目	375(80m)	1977	・中世? 倒立柱建物1	周辺5
9 諸岡 G	諸岡2丁目9-15 9-19	1185(1100)	1979	・先史時代包含層(鐵石器) ・縄文時代晚期穿穴作層址1、土壙1 ・弥生時代 前期窓戸穴1 ・中世 倒立柱建物3、井戸2、土壙墓1 ・溝3	周辺6
10 諸岡 I	諸岡2丁目9-25	382(375)	1980	・中世 地下式土壙3、土壙2	周辺7
11 諸岡 J	諸岡2丁目9-1	215(172)	1980	・中世～近世 溝・井戸・土壙	周辺7
12 諸岡 K	諸岡2丁目9-11	373(285)	1980	・平安時代 清1、井戸1 ・中世 倒立柱建物12、窓4、清2、井戸 2、土壙	周辺7
13	諸岡2丁目12	28m <sup>2</sup>	1980	・古地名包含層	本
14 諸岡郷社 A	諸岡1丁目17-31	330(330)	1980	・弥生時代前期 窓戸穴 ・中世 居館址	本
15 板付J-10a	諸岡1丁目25-48	245(162)	1981	・近世 井戸・溝	周辺8
16 諸岡 A-2	諸岡1丁目	232(90)	1982	・弥生時代 猿轍墓地(14基、中期～後期)	周辺9
17 諸岡郷社 B	諸岡1丁目17-31	1150(1306)	1982	・先史時代 包含層(ナイフ形石器) ・弥生時代初期 窓戸穴6 ・古墳時代前期～中期 墳墓群(5+a) ・中世居址	本

しては統一された遺構表示と通し番号化を計りたいが、とりあえず本書では調査区表示を調査順に配列し、1~17次調査に変更した。旧調査区名との対照はTab. 1にしめし、あわせて調査内容の一覧を付した。参照されたい。

本書では既往調査の内容、これまでの成果について詳細を記す余裕がない。各報告書を参考にしていただければ幸いである。

#### 14・17次調査の概要

本書に報告する14次・17次調査は、1980年度と1982年度に実施された。調査区の位置は、諸岡台地でも北端部に近く、台地面が船状に高まつた（標高11~12m）地域である。

この一帯は、宅地化の進行に伴つて台地縁が削平されているが、中央部にわずかに旧地形をとどめる部分が残されていた。その西端と南辺に低平に削平された土壘がめぐり、中世居館址の存在が推測された。調査にあたつては、西辺土壘に平行する南北軸（N 6°32' W）を設定し、3mメッシュのグリッドを設けた。

14次調査は、旧地形遺存部の南半部を発掘（330m<sup>2</sup>）した。西辺土壘南端から隅角を経て南辺土壘ならびに外周の溝を検出した。さらに館内整地面から弥生前期窓藏穴2基が検出されたが、この段階では土壘盛土の一部を除去したのみで、土壘下全面の調査を行っていない。予断が先行したことを反省する。

17次調査は北半部（1206m<sup>2</sup>）を発掘し、遺存する西辺土壘全体と館内整地面、さらに北方高まりを検出した。西辺土壘の外周は宅地化による地下げにより破壊されている。全体の3分の2程度と思われる館内からは、掘立柱建物・土壙・地下式土壙などのほか、整地面下から弥生前期窓藏穴群が検出された。また上壘盛土を全面除去した結果、古墳時代前期~中期の墳墓群、さらには鳥柄ローブ層上部からナイフ型石器を中心とした先土器時代石器群の包含層を検出し、調査を行った。中世居館址下に弥生時代遺構の存在することは、これまでの諸岡遺跡の調査結果から一定程度推測したが、それ以外については予想外であった。

以下、章を改めて年代別に報告する。

#### 注

- 1) 藤田英夫「福岡市付近の平坦山の地史学的研究」（九大教養研報No8）1962
- 2) 1)文獻
- 3) 春日市教育委員会『須久・岡本遺跡』（春日市文化財調査報告書第7集）1980
- 4) 春日市教育委員会『大南道路調査概報』（春日市文化財調査報告書第4集）1976
- 5) 春日市教育委員会『大谷遺跡』（春日市文化財調査報告書第5集）1979
- 6) 春日市教育委員会『赤井手遺跡』（春日市文化財調査報告書第6集）1980
- 7) 福岡市教育委員会『福岡市中部地区遺跡調査報告書I』1984
- 8) 1979年度以降、大形開発に伴い緊急調査を実施している。その結果、台地先端部の二ヶ所に夜泊~板付I式期の窓藏穴群が検出され、以降全面にわたって弥生時代遺構の分布がみとめられる。



Fig. 3 調査区周辺測量図 (1 : 600)

### 第三章 諸岡館址の遺構と遺物



#### 概要

諸岡館址は、諸岡丘陵から北東にのびる洪積台地先端部に位置する。この台地は北東に向って次第に高さを減じるが、先端部にいたってわずかな高まりをなし、その頂部に館が造営されている。館内の標高は約11.5m、周囲の沖積地面からは約3mほどの比高差がある。

館址は、南・西辺に溝・土塁をめぐらさせていたと思われるが、宅地化の進行とともに周辺の地形は大きく変化している。調査時点では、館址は東辺から中央部、さらに北辺が削平を受けて消滅しており、残されていた西辺部（館址全体の3/4程度と思われる）を調査したにすぎない。したがって、館の性格、機能を検討するうえで基本的要件ともいるべき館の規模、館内建物群の構成などについて知りえない部分が多い。

さて館内をみると、館造営にあたって、まず土塁内を0.3~0.4mほど下げしていることが知られた。しかしその範囲は土塁内全域ではなく、北より部分は旧地形を生かしている。つまり館の北辺部は一段高いテラス状をなす。

館内で検出された遺構は、掘立柱建物24棟、土壙7基、地下式土壙6基である。その他に、土塁上で一字一石絆

Fig. 4 諸岡館址遺構配置図 (1:400)

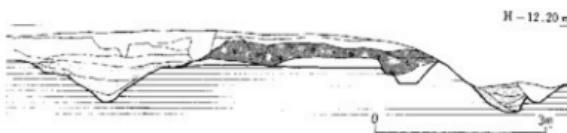
塚が検出されたが、これは館址に接して現存する淨土宗寺院(江戸時代前半期の創建と伝える)に関連すると思われる。

### 検出遺構

#### 土壘 (Fig. 4-6, PL. 5-7)

SA001 調査時に遺存していた南・西辺のうち、西辺北端部を除く総長46mを検出した。土壘上面はすでに削平を受け低平となっている。そのために、上皇土に設置したと予想される権列などについては検出しえなかった。

土壘は、外周と内周南半部に溝がめぐっていたらしい。外周の溝 SD002は、西南コーナー一部付近で確認した。内周の溝 SD003は、西南コーナーから北に14mほどの位置にはじまるが、東南部が倒平されているために不明。土壘幅は、両側にめぐる溝の芯で測って6.8~7.2mであるが多少の出入りがある。土壘の高さは、上述したように低平となっており、旧地表上に0.2~0.6mほどの盛土を確認したにとどまる。盛土に版築手法は用いられておらず、地山(ローム)小粒を含む黒色土で盛っている。



遺存の土壘線は、西・南辺のいずれも直線とはいがたい。とくに西辺線はゆるく S 字形に蛇行し、北辺に近づくにしたがって西に拡がる。南辺線は西南コーナーから東に直線的にのびるが、内周の溝 SD003 が北側にカーブするように見られる。全体が遺存していないため上界線の復原ができないが、かりに方形のプランであったとしても、各辺が直線であったかどうか疑わしい。

#### 柵 (Fig. 4, 6)

SA055 調査区南寄り東端部に検出された。後述する建物A群の東に位置し、南北方向の5間である。南・北端が東に折り返して建物になる可能性もあるが、建物の配列状況からは権列とみなしたほうがよいと思われる。総長9m、1間の長さは1.8m(6尺)の等間、柱穴幅方は径30cm前後の円形、深さ30~50cmをはかる。

#### 溝 (Fig. 4, PL. 4-6)

SD002 土壘 SA001 外周の溝。旧地表面からの掘削幅は2.5m、深さ0.8mである。断面V字形、埋土は黒褐色~茶褐色土の自然堆積である。検出面積がせまいため、出土遺物は少ない。いずれも小片のため年代を知りうるものはない。

SD003 土壘 SA001 内周の溝。旧地表面からの掘削幅1.9~2.3m、深さ1.0~1.2mをはかり SD002 よりもわずかに深い。断面V字形、埋土は SD002 と等しい。埋土上層から18世紀後半以

降、現代に至る陶器が多量に出土したが、これは隣接する寺院のゴミ捨場となっていたことによる。下層からの出土遺物は土師器、瓦質土器、陶磁器の小片が出土したが年代を知りうるものはない。

**SD004** 土壘内の館域に検出された。土堀線に沿っているため、館内を画するように思われたが、裡上が新しく近代遺物が多々出土しており館とは直接関連しない近代構と判断した。

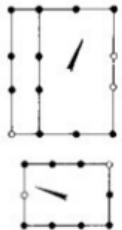
**SD005** 土壘下に検出された。土壘南辺から西辺の南部にかけてL字形にめぐるが、西南コーナーから北13m付近で消滅する。幅0.8~1.1m、深さ0.2~0.4mの浅皿形の断面をなし、埋土は黒色土である。出土遺物は土師器細片があるが年代を決定しうる資料はない。ただし土師器皿の外底は糸切りで12世紀前半以降とはいえる。

#### 掘立柱建物 (Fig.4・6)

調査区内に約350個の柱穴が検出され、数多くの掘立柱建物の存在が想定された。とくに、調査区中央部の東寄りとその南側には柱穴掘方が重複して集中し、度重なる建替のあったことが予想された。調査中に確認した掘立柱建物は20棟弱であったが、後の検討によって24棟が復原された。しかしながら、浮いた柱穴も少なくない。復原の不充分さと過ちの結果を恥じる次第であるが、浮いた柱穴の多い理由は二つある。一つは、当該期（14~16世紀）掘立柱建物のはあい、内部間仕切りが複雑さと床束の不規則性が予想されるが、これだけ柱穴が重複していると、それらを見いだすことが難かしいため、側柱を主に復原したことにある。いま一つは、建物柱穴群の東側がすでに削平、消滅しているため、建物の全体を復原しえないばかり、確実性の高い建物のみを復原し、他については復原を見あわせたことによる。

さて、復原した掘立柱建物は、配置状況がおおまかに三群に分たれる。いまそれをA・B・Cの三群とすれば、A群は館内西南部にあって4棟の建物が重複する。B群は、A群の北方に位置し10棟の建物が重複する。C群は、B群と一部重複するがその北東部にあって10棟の建物がある。A・Bの二群が南北棟建物を主体としているのにたいして、C群は東西棟と予想される建物の多い点が特徴的である。以下A群から詳細をみてみよう。なお、建物相互の重複関係、建物と土壤との重複関係等はTab.2にしめす。

#### (A群)



**SB051** 3×3間の南北棟。2×3間の上舎の西側に下舎がとりつく。桁行は全長7.8m、柱間寸法は2.85m・2.1m・2.85mと中央が狭い。梁間は全長5.1m、上舎柱間は1.95mの等間、下舎の出は1.2mである。柱穴掘り方は径30~60cmの円形、深さ30~40cm、底面に小穂の礎石を置くものが多い。3本の柱穴が攪乱と弥生時代貯蔵穴と重複しているため未検出。

**SB052** 3×2間の東西棟。桁行全長6.3m、柱間は2.1mの等間である。梁間は全長4.8m、柱間は2.4mの等間である。柱穴掘り方は径25~35cmの円

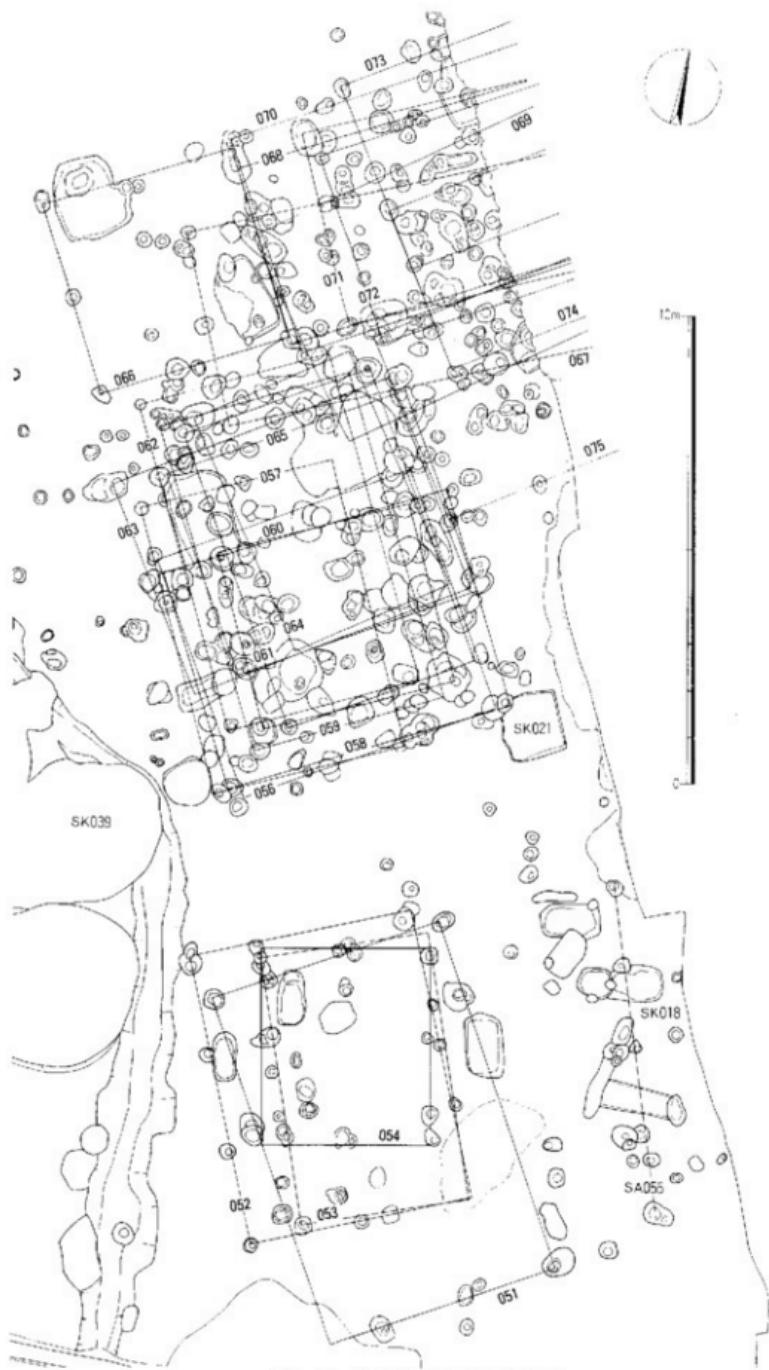
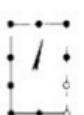


Fig. 6 埋立柱建物配置図 (1:120)

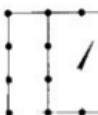
形、深さ30~45cmをはかる。柱痕跡は不明。東側柱南端と北の妻柱は、それぞれ弥生時代貯蔵穴と重複していたため柱穴を検出できなかった。



SB053 3×2間の南北棟。桁行は全長6m、柱間は2mの等間である。梁間は全長3.6m、柱間1.8mの等間である。柱穴掘り方は径30cm前後の不整円形、深さ30~40cmをはかる。東側柱の2本が搅乱と弥生時代貯蔵穴と重複しているため、未検出。

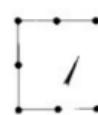
SB054 2×2間建物。東西長3.6cm、柱間は1.8mの等間である。南北長4.2cm、柱間は2.1mの等間である。柱穴掘り方は35~50cm、強さ40~50cmをはかる。

#### (B群)



SB056 3×3間の南北棟。3×2間の上舎の西側に下舎を付す。桁行全長5.4m、柱間寸法は1.8mの等間。梁間全長5.7m、下舎の出は2.1m、上舎は1.8mの等間である。柱穴掘り方は径30~50cmの不整円形、深さは40~70cmとバラツキがある。柱痕跡は不明だが底面に柱圧痕を残すものがある。

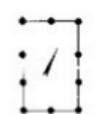
SB057 3×2間の南北棟。桁行は全長6.3m、柱間寸法2.1m等間、梁間は全長4.2m、柱間寸法2.1mの等間である。柱穴掘り方は径40~50cmの不整円形、深さ45~60cmである。柱痕跡不明。



SB058 3×2間の東西棟・桁行全長6.3m、柱間は2.1mの等間である。梁間全長4.8m、柱間は2.4m等間である。柱穴掘り方は径30~50cmの不整円形、深さ40~70cmをはかる。西妻柱は重複する柱穴が多いため明確に確認しえなかつた。

SB059 4×2間の南北棟。桁行全長7.2m、柱間寸法1.8mの等間である。梁間は全長4.2m、柱間寸法2.1m等間。柱穴掘り方は径30~40cmの円形、深さ40~90cmとバラツキがあるが、90cmの1本を除いて40~50cmに集中する。

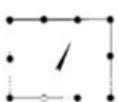
SB060 2×2間建物。東西長4.2m、柱間は2.1mの等間、南北長は3.9mで柱間は1.95mの等間である。柱穴掘り方は径50~65cmの不整円形、深さは70~90cmと深い。柱痕跡は3本の柱穴で確認され、径15~20cmであった。



SB061 3×2間の南北棟。桁行全長6.6m、柱間寸法は北から2.1m・2.1m・2.4mとなる。梁間は全長4.2m、柱間は2.1mの等間である。柱穴掘り方は径35~55cmの不整円形、深さ30~60cmをはかる。柱痕跡の検出されたもの、底面に圧痕を残すものがある。

SB062 4×2間の南北棟。北妻柱は未検出である。桁行は全長7.2m、柱間寸法1.8mの等間、梁間は全長4.2m、柱間寸法2.1mの等間である。柱穴掘り方は径30~50cmの円形、深さ40~60cm、底面に柱圧痕を残すものがある。

SB063 3×2間の東西棟。東妻柱は未検出。桁行は全長6.3m、柱間寸法2.1m等間である。梁間は全長4.8m、柱間寸法2.4m等間である。柱穴掘り方は径35~50cmの不整円形、深さ60~90cmをはかる。

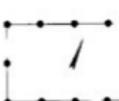


SB064 3×2間の東西棟。東妻柱と、南妻柱の1本は未検出。桁行は全長5.4m、柱間寸法1.8m等間、梁間は全長4.2m、柱間寸法2.1mの等間である。柱穴掘り方は径30~40cmの不整円形、深さ40~70cmをはかる。柱痕跡は不明だが底面に柱圧痕を残すものがある。

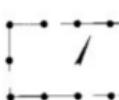
SB065 3×2間の南北棟建物。南妻柱は未検出。桁行全長5.4m、梁間全長3.6m、柱間寸法は桁行・梁間ともに1.8m等間である。柱穴掘り方は径30cm前後の不整円形、深さ40~70cmをはかる。

#### (C群)

SB066 2×2間建物。桁行、梁間とともに全長4.2m、柱間寸法も2.1mの等間である。柱穴掘り方は径25~35cmと小形の不整円形、深さは35~60cmをはかる。柱痕跡は不明。



SB067 2×3間以上の東西棟建物。桁行全長は東端が削平部にのびるため不明。3間分の桁行長は5.2m、柱間寸法は1.8mの等間である。梁間は全長4.2m、柱間2.1mの等間。柱穴掘り方は35~45cmの不整円形、深さ60~70cmをはかる。底面に柱圧痕を残すものがある。



SB068 2×3間以上の東西棟。桁行東端が削平部にかかるため全体規模は不明。3間分の桁行長は5.2m、その柱間は1.8mの等間である。梁間は全長3.9m、柱間寸法1.95mの等間である。柱穴掘り方は径40~60cmの不整円形、深さ70~90cmをはかる。

SB069 2×3間もしくは2×3間以上の東西棟。桁行は3間分で5.2m、柱間寸法1.8m等間である。梁間は全長4.8m、柱間寸法2.4mの等間である。柱穴掘り方は径30~50cmの円形、深さは40~70cmと差異があるが50cm前後のものが多い。

SB070 2×2間以上の東西棟。桁行東端が削平部にかかるため、全体規模は不明。桁行は2間分で4.2m、柱間寸法は2.1m等間、梁行は全長4.8m、柱間寸法は2.4m等間である。柱穴掘り方は径35~55cmの不整円形、深さ45~70cmをはかる。



SB071 2×2間、もしくは桁行2間以上の東西棟建物である。桁行東端が削平されているため全体規模を知ることができない。桁行は2間分で3.6m、柱間寸法1.8m等間、梁間は全長4.2m、柱間2.1mの等間である。柱穴掘り方は径30~50cmの不整円形、深さ50~70cm、柱痕跡は不明だが底面に柱圧痕を残すものがある。

SB072 2×1間以上の建物。東端が削平部にのびるため全体規模をることはできないが、

東西棟になる可能性がつよい。東西棟とすれば、桁行柱間は2.1m、梁間も2.1mの等間となる。柱穴掘り方は30~50cm、深さ40~60cm、床面に柱圧痕を残すものがある。

SB073 2×1間以上の建物。桁行東端が削平部にのびるため全体規模を知りえない。桁行長は1間分で2.1m、梁間は全長4.2m、柱間寸法2.1mの等間である。柱穴掘り方は径30~55cmの円形、深さ60~80cmをはかる。

SB074 2×1間分が検出された。東端が削平部にのびるため全体規模は知りえないが、東西棟になる可能性がつよい。東西1間分の長さ1.8m、南北長3.6mをはかる。東西棟とすれば梁・桁とも柱間は1.8m等間となる。柱穴掘り方は径35~50cmの不整円形、深さ50~60cmをはかる。

SB075 C群の南寄りに検出された2×1間以上の建物。南北2間だが東西方向は東側の削平部にのびるため全体規模を知りえない。南北を梁間とすれば、梁間全長4.2m、柱間寸法2.1mの等間、桁行の柱間も同一である。柱穴掘り方は径30~40cm、深さ50~60cm、床面に柱圧痕を残すものがある。

Tab. 2 拠立性建物一覧

No.	規 模	方 向	桁 行		梁 間		方 位	備 考
			全 長	柱間寸法	全 長	柱間寸法		
051	3×3	NS	7.8(26)	9.5~9.5	5.1(17)	4.6~5.5	N25°W	053~054より古
052	3×2	NS	6.3(21)	7.7~7	4.8(16)	8~8	N19°W	
053	3×2	NS	5.7(19)	6~6~7	3.6(12)	6~6	N15°W	051~054より新
054	2×2		4.2(14)	7~7	3.6(12)	6~6	N4°W	051より新、053より古
055	3×3	NS	5.4(18)	6~6~6	5.7(19)	7~6~6	N26°W	057より古、SK021より新
057	3×2	NS	6.3(21)	7~7~7	4.2(14)	7~7	N23°W	SK022より古、058より新
058	3×2	EW	6.3(21)	7~7~7	4.8(16)	8~8	N25°W	057より古、SK021より新
059	4×2	NS	7.2(24)	6~6~6~6	4.2(14)	7~7	N25°W	060より古、SK022より古
060	2×2		4.2(14)	7~7	3.9(13)	6.5~6.5	N20°W	059より新、SK022より新
061	3×2	NS	6.6(22)	7~7~8	4.2(14)	7~7	N26°W	060より新、SK022より新
062	4×2	NS	7.2(24)	6~6~6~6	4.2(14)	7~7	N22°W	058より新、SK022より古
063	3×2	EW	6.3(21)	7~7~7	4.8(16)	8~8	N26°W	058より新、066より古
064	3×2	EW	5.4(18)	6~6~6	4.2(14)	7~7	N26°W	SK022より新
065	3×2	NS	5.4(18)	6~6~6	3.6(12)	6~6	N28°W	061より古、060より新、SK022より新
066	2×2		4.2(14)	7~7	4.2(14)	7~7	N23°W	068より古
067	3以 上×2	EW	5.2+α	6~6~6	4.2(14)	7~7	N22°W	
068	3以 上×2	EW	5.2+α	6~6~6	3.9(13)	6.5~6.5	N25°W	066~067~070~071より新

069	3以上×2	EW	5.21 $\alpha$	6・6・6	4.8(16)	8・8	N30°W	070より新
070	2以上×2	EW	4.2+ $\alpha$	7・7	4.8(16)	8・8	N26°W	068より古、069より古
071	2以上×2	EW	3.6+ $\alpha$	6・6	4.2(14)	7・7	N20°W	068より古
072	2×1以上	EW	2.1+ $\alpha$	7	4.2(14)	7・7	N25°W	
073	1以上×2	EW	2.1+ $\alpha$	7	4.2(14)	7・7	N28°W	
074	1以上×2	EW	1.8+ $\alpha$	6	3.6(12)	6・6	N27°W	
075	1以上×2	EW	2.1+ $\alpha$	7	4.2(14)	7・7	N28°W	

\* 指行、梁間全長半径はm、( )内は1尺を30cmとしたばあいの数値。

方位は指行、梁窓にかかわりなく南北からの偏差を示す。

#### 土壤 (Fig.7, PL.9)

館内域に点々と検出され、とくにまとまった分布をしめしていない。形状は長方形～方形のものが多く、おおむね建物群と方向を揃えている。

SK008 建物A群の南に検出された。上端で長辺1.7m、短辺0.9~1.1mの隅丸長方形を呈し、深さ0.3mあまりである。底面はほぼ水平な面をなす。埋土は淡黒褐色土、自然埋没と思われる。

SK018 建物A群の東部に検出された。楕円形の土壙2基が連続した形態をなす。Aは上端径0.7×0.8m、底面に上端面をほぼ水平に揃えた5個の石を配列している。うち1点は板碑片である。Bは上端0.8×1.1mの楕円形、Aと同様に底面上に5個の石を置き、その上面を水平に揃える。そのうち2点は石臼片、1点は板碑片である。土壤の深さは0.22mと浅い。A・Bともに同様な配石がみられ、底面レヴェル、配石上端レヴェルが等しいことから、二個一組みで使用されたある種の台座の根石と思われる。

SK020 建物A群の東側に検出された。上端の長辺1.3m、短辺0.75mの隅丸長方形で、長軸は東西である。深さ0.25m、埋土は黒褐色土、自然埋没と思われる。

SK022 建物B群のなかに、柱穴掘方と重複して検出された。上端の長辺2.3m、短辺1.5mの隅丸長方形、長軸を南北にとる。深さ0.5mあまりで、底面はほぼ水平である。埋土はローム小ブロックを含む黒褐色土で埋め戻された可能性がある。

SK023 建物A群のなかに検出された。上端で長辺1.7m、短辺1mの隅丸長方形、長軸は若干西に振れる。深さは0.2mと浅く底面に多少の凹凸がある。埋土は淡黒褐色土で自然埋没と思われる。

SK027 建物A群の北側、館内でも一段高いテラス上に検出された。上端長辺1.2m、短辺0.5~0.7mの隅丸長方形で、長軸を南北にとる。深さ0.3m、底面はほぼ水平、西壁の中央に沿って須恵器の片口鉢が出土した。埋土は黒褐色土。

#### 地下式土壤 (Fig.4, 8~11, PL.10~13)

西辺土塁の中央部から北部にかけて6基検出された。いずれも土塁内縁に豊坑の入口部を穿

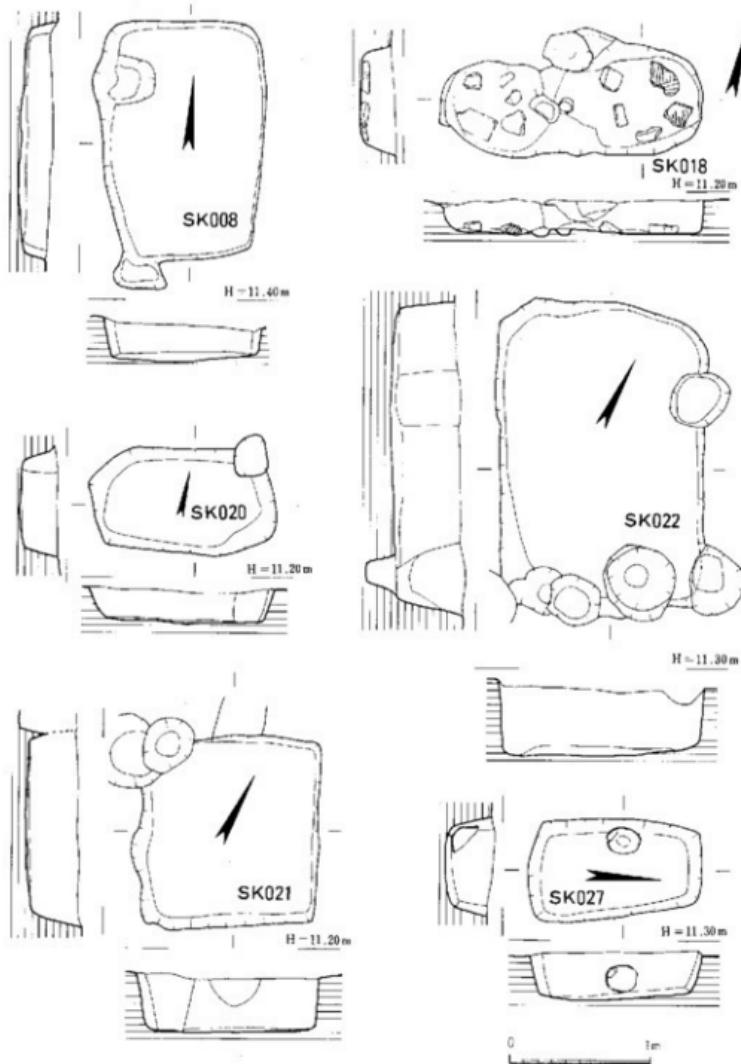


Fig. 7 土壤実測図 (1 : 40)

ち、土壁に直交する方向に壙室を設ける。壙室天井部はいずれも陥没している。

SK039 壇坑から壙室に至る天井の一部が遺存する唯一の例である。壙底面の全長4.20m、壙幕は $2.6 \times 2.9$ mの横円形を呈し、底面から0.2~0.5mの壁面上天井部が崩落している。壙室底面はほぼ水平、崩落天井部とのあいだに2~3cmの黒色土の堆積がある。壇坑は上端径1m、深さ1.9m、ほぼ垂直に掘り下げている。壙室内からの出土遺物はない。

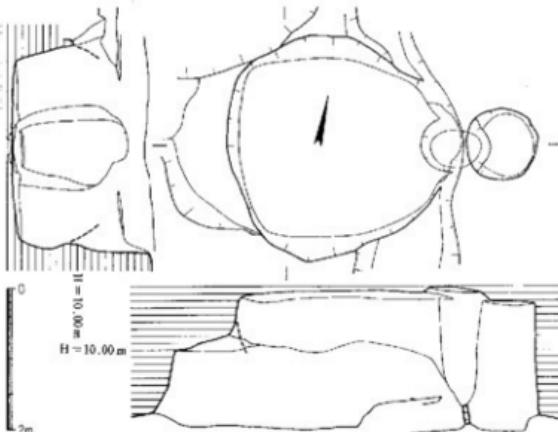


Fig. 8 SK039実測図 (1:80)

SK035 天井部がすべて崩落している。底面全長4.05m、壙室は $1.8 \times 3.1$ mの横円形をなし、底面中央がやや低くなっている。壇坑は上端径1.1m、下端径0.9m、深さ1.1mをかる。壙室底面と天井崩落土とのあいだに数センチの黒色土の堆積がみとめられたが、出土遺物はない。

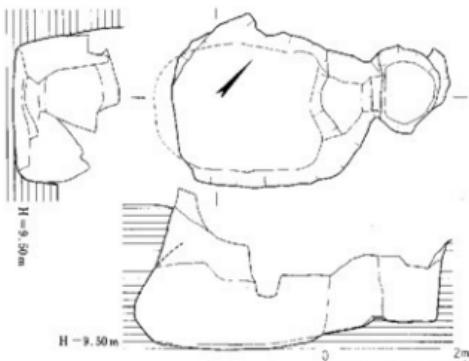


Fig. 9 SK035実測図 (1:80)

SK036 壙室天井部はすべて崩落している。底面全長4.45m、壙幕は $2.8 \times 3.3$ mの横に長い横円形プランである。底面は天井崩落土との境が不鮮明であったため10~20cmほど掘り過た部分がある。壇坑は上端径1.1m、下端径0.9m、深さ0.9mをかる。なお、この地下式土壙で注目すべきは、壙室北壁の壇坑に近い部分に、北側に接して構築された地下式土壙SK038と連結する横穴（通路）が掘削されていることである。こうした事例は他にない。この横穴は幅1m、高さ1mあまりでアーチ状をなす。その底面はSK038に向ってゆるく下降し、SK038の壙室底面

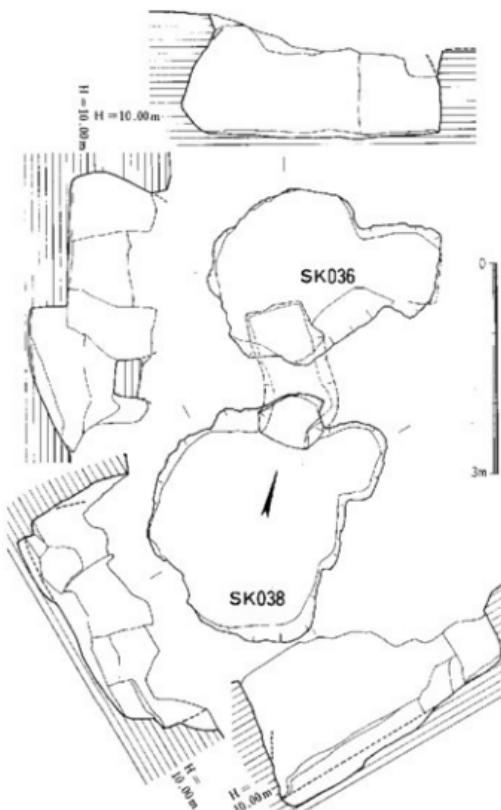


Fig. 10 SK036・038実測図 (1:80)

中央近くに達している。

**SX038** 上述のように、南に平行して構築されたSX036とは壁に穿たれた横穴で連結する。底面の全長3.30m、壇室は $2.2 \times 2.3$ mのはば円形プランである。底面から1.1mほどの高さまで周壁を残し、その上部天井は崩落している。底面はほぼ水平で天井崩落上とのあいだに数cmの黒色土が挟まっている。底面からの出土遺物はない。堅坑は上端径1.3m、下端径1m、深さ1.2mをはかる。SK036との連結横穴は底面中央近くにまで達し、ほぼ垂直に立ちあがる。この形態からみると、二つの壇室を結ぶ横穴はまずSK036側から掘削し、後にSK038側から形態を整えたという作業工程が想定される。なおSK038のばい、壇室天井崩落によって生じた陥没坑は粘土と黒色土で人为的に埋め戻されている。

**SK037** 叙上の4基から8mほど北側に位置する。底面で全長3.14m、壇室は $3 \times 3.5$ mの梢円形プランである。底面はほぼ水平で、天井崩落上とのあいだに数cmの黒色土が挟まっている。底面からの出土遺物はない。堅坑は上端径1mあまりで、ほぼ垂直に掘り下げ、深さは1.2mである。

**SK045** SK037の北2mにあって、検出された地下式土壤6基の北端に位置する。他の地下式土壤の堅坑が東に面しているのにたいして、この一基のみ堅坑が北に向く。底面全長3.71m、壇室プランは径2.5mのはば円形である。底面はほぼ水平に整えられているが堅坑側が若干下っ

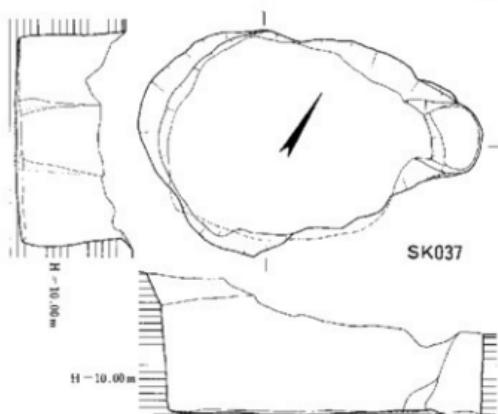


Fig. 11 SK037・045実測図 (1 : 80)

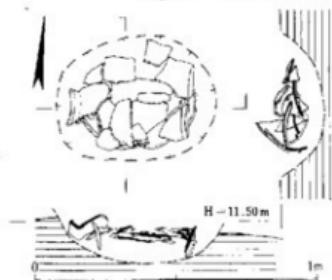


Fig. 12 SX043実測図 (1 : 20)

ている。底面から1mあまりの高さの周壁を残して天井部が崩落している。底面と崩落土とのあいだに、わずかな黒色土の堆積がみられた。底面から遺物は出土していない。堅坑は上端径1.2m、下端径0.75mのはば円形プランで、深さは1.7mである。

#### 土壙墓

SX043 (Fig. 12, PL.15)

土壙西辺中央のやや南寄りに検出された土壙墓である。土壙盛土上からの掘り込みと思われるが、検出時は底面をわずかに残す程度の遺存状況であった。土壙埋土が土壙の盛土と近似していたため、その差異を見きわめられなかつた。そのため土壙の規模は不明だが、蓋に使用した半裁の備前壺をさほど上まるる規模でないと想定される。おおまかに50×70cm程度の幅円形プランであろう。備前壺下からは乳児の頭骨が出土した。他

の部位はなかつた。

SX028 (Fig. 6, 付図) 上壙西辺のはば中央部に検出された。土壙盛土上からの掘り込みと思われるが、盛土除去後に確認した。上端径60cmの不整円形を呈し、深さ35cmをはかる。底面付近から幼児の耳骨と歯が検出された。埋土は黒色土。

SX049 (Fig. 6, 付図) SX028から東に2mほど

にある。土壌盛土下面での検出であるが、盛土上からの掘り込みの可能性がつよい。確認面での規模は長辺1.1m、短辺0.6mの隅丸長方形で、深さは0.45mである。埋土は黒褐色土、人骨は遺存していないが、形状から土壙墓とみられる。出土遺物はない。

### 近世の遺構

#### 一字一石經塚

SX040(Fig. 13, Pl. 14-15)

西辺土壙上のはば中央

部に検出された。土壙盛土上面から掘り込んだ土壤に一字一石經を埋納したものである。検出時は一边約1.8mほどの隅丸方形に、中央部が盛り上った状態であった。土壙上端は1.6×1.7mの隅丸長方形を呈し、深さ0.7m、下端は一边1.2mの隅丸長方形である。一字一石經は土壙内に空隙なく充填されており、土壙内に桶、木棒など設けた痕跡はない。

経石の多くは径3~5cmの河原石であるが、弥生土器・土師器・須恵器などに経文を書いたものもある。土壙内に埋納された経石の数は約67,500個あまりである。この一字一石經は、経文内容からみて法華経を転写したとみられる。埋経年代に関するデータは中世居館以降としかいえないが、多くの事例にみられるように近世のものと思われる。<sup>11)</sup>

#### 近世墓

SX050 上星西南コーナーから外周の溝SD002にかけて検出された近世墓群(6基)がある。いずれも径1~1.5m、深さ1.2~1.5mの円形の土壙に桶を納めたものである。各墓に人骨の遺存がみとめられたが保存状態はよくなかった。出土遺物は、3号墓から寛永通宝、4号墓から寛永通宝6、漆器片、6号墓から土師器Ⅲ4が出土した。

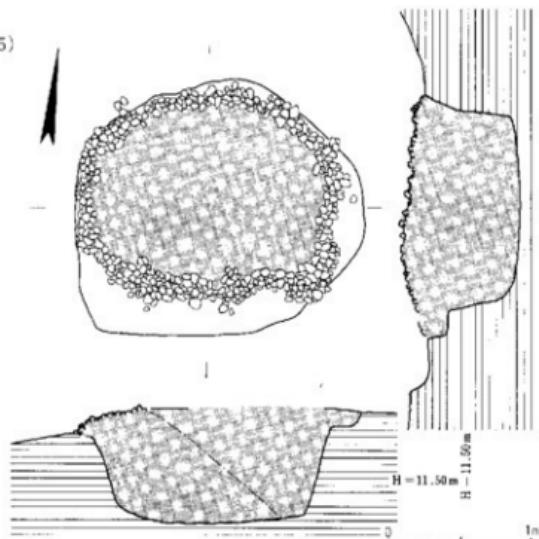


Fig. 13 SX040実測図 (1:40)

## 出土遺物

土壘盛上、溝、土壤、地下式土壤天井部陥没坑、柱穴などから、土師器、土師質土器、須恵土器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶器、石製品など各種の遺物が出土した。しかし、中世居館址の調査がそうであるように、出土遺物の全体量は少なく（コンテナ8箱）、また細片が多い。したがって、器種、器形や編年的位置を押えうるものは少ない。以下遺構ごとに出土遺物を報告する。

### SA001 盛土出土遺物 (Fig.14. PL.26)

盛土からの出土遺物は、本来ならば土壘構築時以前のものであるが、本館址のはあい黒色上で盛土しているため後の掘り込みや攪乱などを識別しえず、したがって土壘構築以降と推測される各時期の遺物が混入した状態で検出された（コンテナ2箱）。

**土師器杯 (1~4)** 3タイプに分類する。aは前代からの通有なタイプである(2)。口径12.2cm、器高2.3cmをはかる。bは口径に比して器高の高いもの(1・3)、口径11.5cm~12.8cm、器高3.3~3.6cmをはかる。cは口径に比して底径が著しく小さく口縁部が大きく開くもの(4)。口径10cm、器高2.3cm。このタイプは暗茶褐色を呈し、焼成も硬質であり他のタイプと容易に識別しうるが数は少ない。a~cは内底の仕上げナデがないか、あっても小範囲をかるく行っている程度である。したがって外底は糸切りのまま板目圧痕がつかない。

**土師器皿 (5~6)** 皿aとする。口径7.4~7.9cm、器高1.4~1.7cm。内底の仕上ナデはない、外底は糸切り、板目圧痕がない。

**土師質鍋 (15)** 口径32.8cmに復原される。口縁部と体部の境が屈折し、口縁部は内彎ぎみに外上方に開く。口端は面をなし、中央部がわずかに凹む。体部内外面は粗いナデ調整、口縁部はヨコナデ調整である。胎土は砂粒を含み粗い。暗茶褐色を呈し、硬質の焼成。

**土師質鉢 (16)** 19.2cmに口径が復原される。口端は斜めの面をなす。外面はタテハケの上をナデ、内面はヨコナデ調整。胎土に小砂粒をまじえる。暗褐色を呈し、硬質である。

**灰釉陶小碗 (7)** 口径10.4cm、器高2.5cm。外底は基底底をなす。釉は全面に薄めにかけられ、内底見込みはカキ取る。黄緑褐色を呈し細かい質入を伴う。内底に4ヶ所の目跡、外底に全周する焼古痕がめぐる。胎土は灰色、2~3mmの砂粒を含む。15世紀末から16世紀前半頃の美濃製品と思われる。

**季朝陶器碗 (8)** 口径12.1cmに復原される。薄めに全面に施釉され、内底見込みと高台量付けの釉をカキ取る。暗褐色を呈し、細かい質入を伴う。外面に焼きむらがある。

**季朝沙器瓶 (10)** 体部上位の破片、図示したプロポーションは推定である。胎土は暗灰褐色、2~3mmの砂粒を含む。外面に四線をめぐらし、ナマコ釉のうえに白濁釉をかける。

**白磁鐵輪碗 (9)** 口縁部の小破片。暗灰色の胎土に厚めに施釉する。青味をおびた灰白色

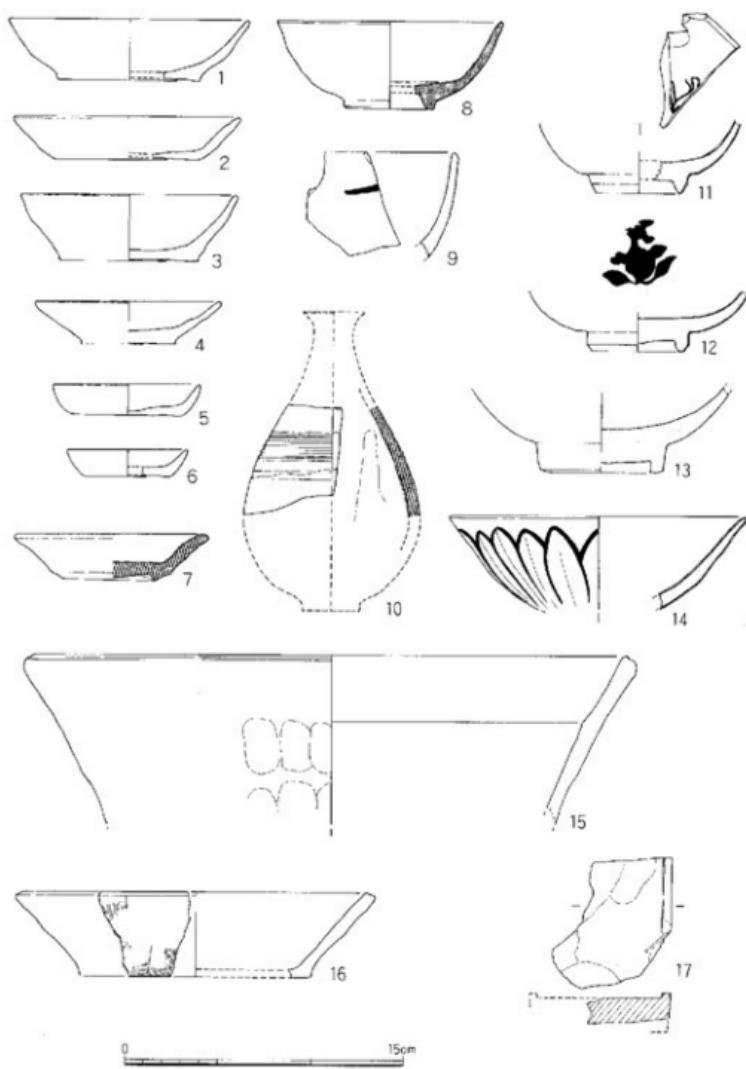


Fig. 14 SA001出土遺物実測図 (1 : 3)

を呈し、内面に細かい貫入を伴う。外面の一部に鉄絵がみられるが小破片のため文様構成はわからない。

**青磁碗（11～14）** 11・12は内底見込みに草花文のスタンプを付したもの。ともに外底は露胎、高台量付けの袖をカキ取る。12の内底見込みは袖をカキ取っている。11は灰緑色、12は青灰色を呈し、細かい貫入を伴う。13は緑茶褐色を呈し、全面に細かい貫入を伴う。外底は露胎、高台量付に目跡がある。14は体部外面に鋸蓮弁を削りだすもの（I-5-b）。灰色の胎土に青緑色の袖をかける。

**碗（17）** 輝緑凝灰岩製。陸部の破片。裏面も剥落している。縁は3mmほど上方に突出し、上・側面は丁寧に研磨されている。破片部位は陸部から海に移る部分と思われ、上面は中央が摩耗している。暗赤褐色。

#### SD002 出土土器

土師器杯・皿の細片が数点したが図示しうるものはない。いずれも外底は糸切りである。

#### SD003 出土土器

埋上層から18C後半以降の伊万里染付や施釉陶器片がコンテナ1箱分ほど出土したが、これらは隣接する寺院から投棄されたものと思われる。館址に関連する遺物ではないので省略する。下層からは土師器杯・皿、土師質鍋・擂鉢、瓦質擂鉢・火鉢、白磁碗などが出土したが、いずれも細片で図化しない。

#### SK008 出土土器

土師器杯・皿、無釉陶器の小片があるが図示しえない。土師器の外底は糸切りである。

#### SK018 出土土器

埋上から土師器皿の細片が数点出土した。底面に敷いた石材のなかに板碑片と石臼片がある。石塔・石臼の項参照

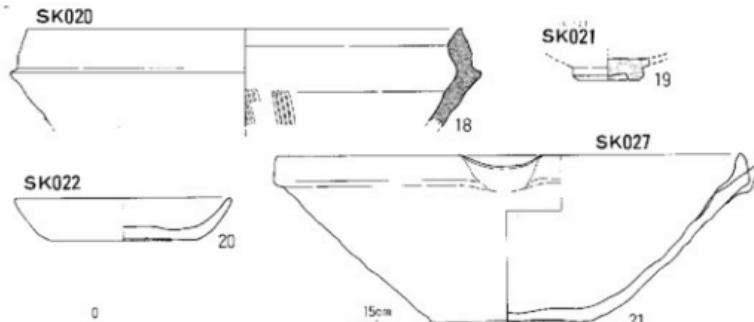


Fig. 15 各土壤出土土器実測図 (1 : 3)

**SK020 出土土器 (Fig. 15, PL. 27)**

土師器杯片、白磁片、備前播鉢がある。

**備前播鉢 (18)** 口径23.2cmに復原されるが、片口部は不明である。体部内面に4本一組の条線を入れる。胎土は暗灰褐色で粗い。暗茶褐色を呈し、硬質の焼成である。

**SK021 出土土器 (Fig. 15, PL. 27)**

白磁小碗、土師器杯・皿の細片が出土した。

**白磁小碗 (19)** 高台径3.8cm。施釉は体部下半まで高台に及ばない。胎土は褐色をおびた乳白色、釉色も同じで細かい貫入を伴う。

**SK022 出土土器 (Fig. 15, PL. 27)**

土師器杯と皿の小片が出土した。

**土師器杯 (20)** 杯 a。口径11.6cm、器高2.2cm。内底の仕上ナテは不明。外底は糸切り。

**SK023 出土土器 (Fig. 15, PL. 27)**

土師器杯の細片が4点出土した。図示できない。外底は糸切り、板目圧痕はない。

**SK027 出土土器**

**須恵質捏鉢 (21)** 東播魚住窯製である。口径24.8cm、底径8.8cm、器高8.9cm。体部内面の下半以下は摩滅している。外底は糸切り、胎土に1~2mmの砂粒を含む、灰褐色を呈し、魚住窯製品としては焼成はよくない。

**SK039 暗窓坑出土土器 (Fig. 16, PL. 27)**

暗窓からの出土遺物はない。すべて天井部暗窓坑埋土から出土した。土師器杯・皿、土師質播鉢・鍋、瓦質火鉢、黒釉陶碗、白磁碗などがある。総30点あまりである。他に板碑片がある。石塔・石臼の項参照

**土師器杯 (22)** 杯 aか。口縁部を欠く。底径7.5cm。外底は糸切り、板目圧痕がある。

**須恵器杯 (23)** 館址調査に伴って奈良時代須恵器が数点出土したが、その一つである。高台径11.1cmに復原される。青灰色を呈し、硬質の焼成。

**土師質鍋 (24)** 口径24.2cmに復原される。体部から口縁部はスムーズに外傾する。外面はナテ、内面はナナメ・ヨコハケメ調整。口縁下に径6mmの焼成後穿孔がある。明茶褐色。硬質。

**土師質播鉢 (25)** 口径28.6cm、底径14.6cm、器高12.0cm。口縁部と体部の境がわずかに屈折し、口縁部は肥厚する。体部外面はハケメのうえをナテ、底部周囲にユビ押え痕が残る。外底は粗いハケメ調整。体部内面はナナメ・ヨコハケメのうえに1本単位の刻目を入れる。下半部は使用により摩滅している。胎土は粗い。暗茶褐を呈し、やや軟質である。

**土師質釜 (27)** 復原口径14.8mm。取れているが、肩に2個の耳をもつ。外面の体部上半まで媒が付着し、ツバの付かないタイプである。胎土は粗い。淡褐色を呈し、やや軟質である。

**瓦質釜 (28)** 体部最大径27.1cm。最大径からわずかに下った位置にツバをめぐらす。体部

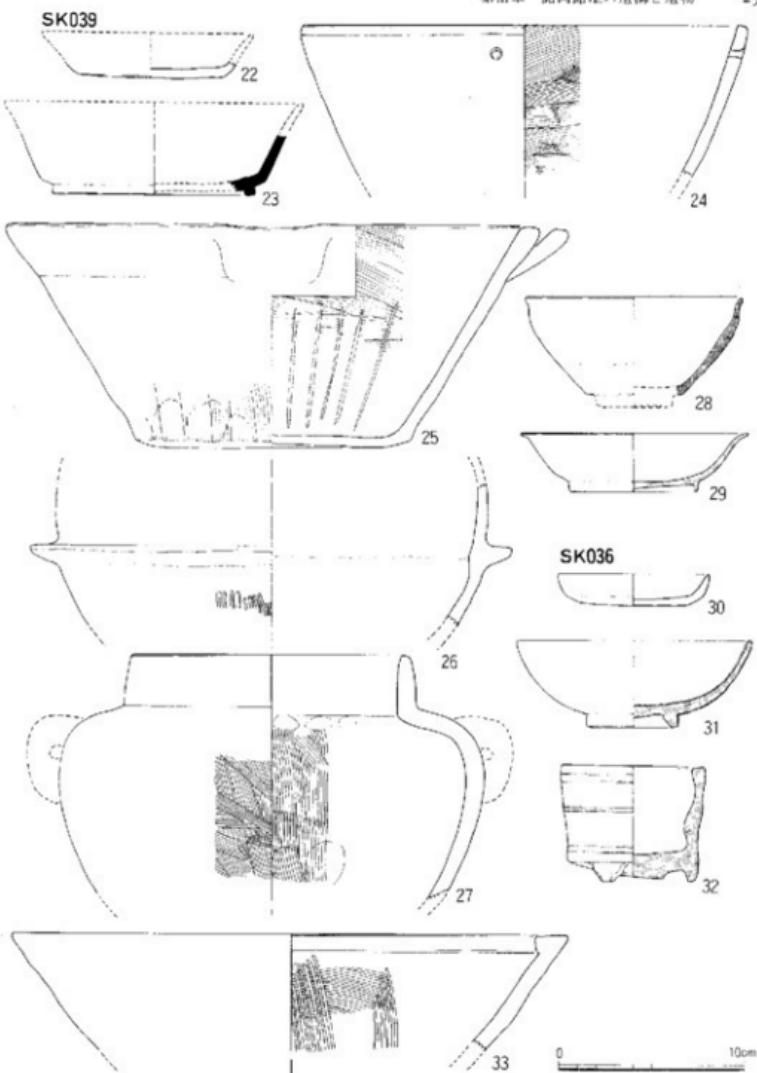


Fig. 16 地下式土壤陥没坑出土遺物実測図 I (1 : 3)

外面は平行線叩きのうえをナデ、内面はナデ、ヨコナデ調整。暗灰色を呈し、硬質である。

**黒釉陶碗（28）** 口径11.8cmに復原される小碗。胎土は茶味をおびた灰色で緻密である。釉は口縁部付近は薄く濁茶色だが、下るにしたがって厚くなり黒褐色となる。

**白磁碗（29）** 口径12.4cm、器高3.2cm。外底端につく高台は細いつくりである。口縁部は外反し鏡くおさめる。胎土は灰白色、乳白色の釉が全面に施釉され、高台墨付の釉をカキ取る。

#### SK036 陥没坑出土土器 (Fig. 16. PL.27)

墳室からの出土遺物はない。陥没坑埋土からは、土師器皿、土師質鍋・擂鉢、白磁碗・香炉、瓦質火鉢が出土した。細片が多く図示しうるものは次の三個体である。

**土師器皿（30）** 直aである。口径8.2cm、器高1.7cm。外底は糸切り、板目压痕はない。

**白磁碗（31）** 口径12.8cm、器高4.7cm。茶味をおびた灰白色の胎土に、薄めの釉がかけられる。体部外面の下半以下は露胎である。釉は淡緑白色を呈し、粗い貫入を伴う。

**白磁香炉（32）** 口径7.7cm、器高6.2cmの三足の香炉である。体部外面を上・中・下の三段に凸帯状に削りだし、各2本の凹線をめぐらす。足部は逆山字形である。釉は突出した底部を除いて全面に施釉される。内面は淡青白色、口縁部内面から外面は淡緑白色を呈する。

#### SK037 陥没坑出土土器 (Fig. 17. PL.27)

墳室内からの出土遺物はない。陥没坑埋土から、土師器杯・皿、須恵器杯（第I型式）などが出土したがいずれも細片である。なお石製品として、石臼・宝鏡印塔の破片が出土した。石塔、石臼の項参照。

**土師器杯（34）** 杯a。口径13.0cm、器高2.2cm。内底のナデは小範囲で弱い。外底は糸切り板目压痕はない。

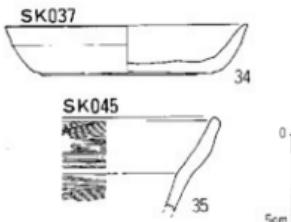
#### SK038 陥没坑出土土器

墳室からの出土遺物はない。また陥没坑は人為的に埋め戻されており、土師器皿の細片が出土したが、詳細は不明である。

#### SK045 陥没坑出土土器 (Fig. 17)

墳室内の出土遺物はない。陥没坑埋土から土師器杯、土師質鍋・擂鉢、鉄滓、さらに第I型式の須恵器が出土した。古墳時代須恵器についての後述する。

**土師質鍋（35）** 口縁と体部の境は屈折し、口縁部がわずかに肥厚して内側に開く。内面はヨコハケ、外面はナデ調整。明茶褐色を呈し、焼成は硬質である。



SX043出土土器(Fig. 18. PL.28) Fig. 17 地下式土壙陥没坑出土土器実測図 II (1 : 3)

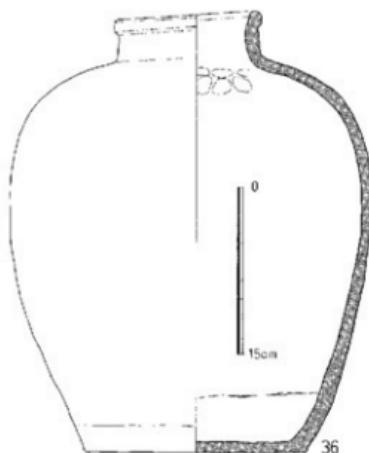


Fig. 18 SX043出土土器実測図 (1:5)

土師器杯・皿の細片が多く、年代を限定しうる資料は少ないが、岡化しうるものを取りあげる。もちろんそれらは、掘立柱建物の上部をしめすにすぎない。

#### SB052 柱穴出土土器

土師器皿 (41) 皿 a。口径7.2cm、器高1.5cm。内底の仕上ナデはない。外底は糸切り、板目圧痕はみられない。

#### SB054 柱穴出土土器

土師器杯 (39) 杯 b。口径11.5mm、底径6.5cm、器高3.3cm。口縁部内外面はヨコナデ、内底全面にナデ調整を加える。外底は糸切り、板目圧痕はない。全体に丁寧なつくりで器面全体に漆を塗った痕があり、底～体部外面の一部に漆が残る。暗茶～赤褐色を呈し、やや軟質である。

#### SB056 柱穴出土土器

染付碗 (55) 口径12.2cmに復原される。口縁部の内外面に界線をもち、外面界線下には草花文が描かれる。胎土は白色、呉須は暗青色である。混入か。

#### SB060 柱穴出土遺物

土師器皿 (44) 皿 b。口径6.5cm、器高2.1cm、口径に比して器高の高い形態である。外底は糸切りのみ、内底のナデ調整はない。口縁部外面に煤が付着している。焼火器として使用されている。

備前壺 (36) 土壙底面を覆う蓋に使用されたもの。口径13.3cm、器高39.8cm。口縁部は小さく折りたたみた玉縁をなす。頭部は短かく、大きくなつた肩に接続する。体部外面はナデ調整だが、部分的に平行線凹目が残存する。底部周囲は横方向のヘラ削りを加える。体部内面はロクロミズビキのうえに部分的なナデを加える。底面は内・外側とも粗いナデ調整。胎土は3～4mmの砂粒を含んで粗い。体部内面は暗灰色、外側中位以下は茶褐色で下るにしたがって暗茶褐色に変化する。口縁部、体部外面上位、ならびに内底は緑灰色の自然釉がふきだしている。

#### 柱穴出土土器 (Fig. 19. PL.28)

柱穴掘り方とみとめられるピット350個のうち151個から遺物が出土した。柱穴出土土器は

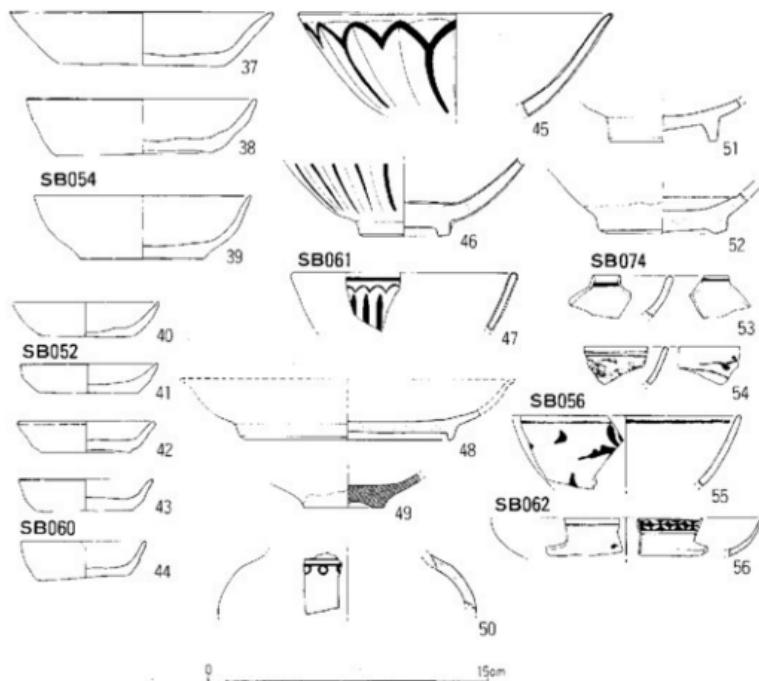


Fig. 19 柱穴・表土出土土器実測図 (1 : 3)

**SB061 柱穴出土土器**

青磁碗（47）小破片のため図示した口径は疑問である。口縁部外面に幅広い沈線をめぐらす。その下に継ぎの沈線と一本単位の山形文を加える。胎上は灰褐色で粗い。釉は濁緑褐色を呈し、細かい貫入を伴う。

**SB062 柱穴出土土器**

染付皿（56）復原口径14.4cm。外面は口縁部に界線があり、体部に草花文の一部がみえる。内面は白抜きの木葉文風の文様をめぐらし、その下に界線を描く。

**SB074 柱穴出土土器**

染付碗（53）口縁部の小破片。口縁部の内外面に幅広の界線を描く。他は不明。

**ピット・表土出土土器**

土師器杯（37・38）37はb、38はaである。35は口径14.1cm、内底は仕上げナデ、外底は

系切りに板目圧痕がある。P001出土。36は口径12.3cm、外底は系切りのみである。P100出土。

**土師器皿** (40・42・43) いずれもa。口径7.2~7.9cm、器高1.7~1.9cm。内底の仕上げナデはなく、外底は系切り、板目圧痕はない。40はP001、42はP028、43はP073の出土。

**青磁碗** (45・46) ともに体部外面に鐵連弁を削りだす。45は内面無文(I-5-b)、釉は厚く緑茶色である。46は内底見込みにスタンプ文様があるが不鮮明である(I-5-c)。青白色を呈し細かい貫入を伴う。43は表土、44はP050出土。

**高麗青磁** (50) 瓶の体部上位の破片。図示した法量は疑問である。2条の界線とその下に連珠円文を白土象嵌している。胎土は灰褐色、厚めの釉は暗灰緑色を呈し、貫入を伴う。

P096出土。

**白磁碗** (48・51・52) 48は高台径11.4cmに復原される。細身の外反口縁をなす形態である。胎土は白色、薄めに全面施釉され白味のつよい乳灰色を呈し、器面が滑かである。表土出土。51は灰白色の胎土に緑味をおびた釉を薄めに施す。体部下半は露胎である(V類)。SX046擾乱出土。52は灰白色の胎土に、明灰白色の釉を薄めに施釉する。体部下半は露胎である。表土出土。

**染付碗** (54) 口縁部の小破片。外面に草花文と蔓草の一部が見える。内面は2条の界線の下に草花文らしき文様が見えるが構成は判然としない。P018出土。

**陶器碗** (49) 淡灰褐色の粗い胎土に、灰白色の釉を薄めにかける。外底は露胎、内底見込みに3ヶ所の目跡がある。唐津系陶器であろう。擾乱土から出土。近世のものと思われる。

**石塔・石臼類** (Fig. 20, Pl. 29)

**板碑** (1~3) すべて砂岩製である。3は幅17.2cm、厚さ7.9cm、遺存高17.5cm、板碑頭部から碑身にかけての破片である。頭部は山形に成形し、その下に幅1cmあまりの横線を2条彫り込む。碑身との境に横線もしくは段がつくと思われるが、そこで折れている。頭部中央に浅いV字形断面の縦方向の刻線がある。表面および側面は研磨、裏面は尖頭工具による荒成形でおわる。碑身折面を砥面として再利用している。SK039出土。1・2は板碑の身の破片と思われる。2は身幅16.2cm、遺存高17.5cm、遺存の厚さ7.1cm、身全体が火を受け赤変している。身表面は剥落し旧状を保っていない。側面はノミ状工具によって丁寧に成形される。裏面は尖頭状工具による荒成形である。図上部の折面は尖頭状工具による繊かな調整痕がみられ、中央の一部を砥面に再利用している。SK018-B出土。1は身幅15.7cm、厚さ7~8.5cm、遺存高29.7cmをはかる。全面に火を受け、前面から側面が黒変、裏面は赤変している。前面の上位3%は細かな調整具で仕上げた平坦面をなすが、下位は尖頭状工具による荒成形でおわる。側面も繊かい調整で平坦面をなすが、図下部の逆山形の側面に風蝕面が残り、また火を受けて生じた黒変がまわっていることから板碑基部と思われる。SK018-A出土。

**宝篋印塔** (4・5) 2点ともSK037天井部陥没坑埋土からの出土。相輪の宝珠と花台部分

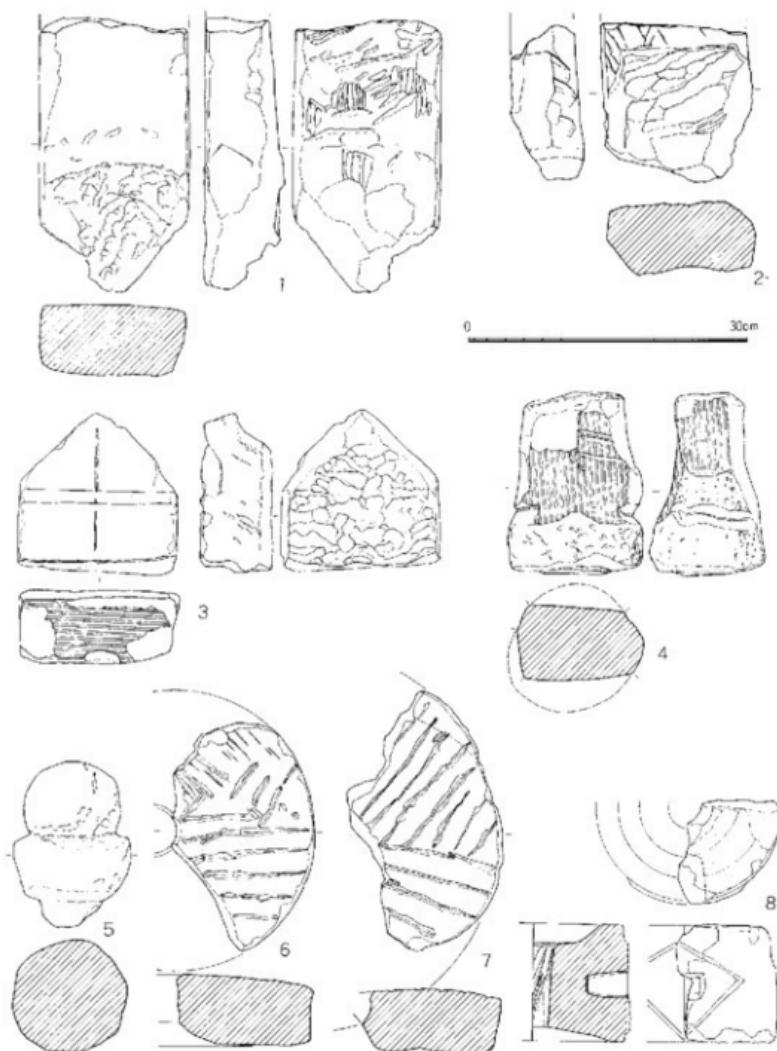


Fig. 20 石塔・石臼類実測図 (1:6)

である。5は多孔質の凝灰岩製で非常に軟いため、表面が風化剥落し花台部は旧状をとどめられない。現状で宝珠径10.4cm、高さ17.7cmをはかる。4は凹状をほとんど残さないほど砥石として再利用されている。花台部と宝珠との境がかろうじて残存し、それとわかる程度である。現高19.6cm。主に宝珠部に4面の底面を成形している。

石臼（6～8）8は製茶用の茶臼といわれる上臼片である。砂岩製。復原径20.1cm、器高12.7cmである。中央孔は上端径3.8cm、下端径2.4cmで投入孔と回転軸受け孔を兼ねる。底面は中央が高く周縁が低い。歯齒は削減して痕跡が残っていない。上面の周縁堤は幅4.5cm、高さ2.6cm、側縁の把手仕口孔は周縁を菱形に削り出す。その仕口孔は上下2.9cm、奥行き2.3cmである。SK037陥没孔出土。

6は径34.1cmに復原される下臼である。多孔質の阿蘇溶岩製。研磨面高が5.5～6.3cm、摩歯は部分的に摩耗して消滅するほど使用されている。裏面は着地部が摩減している。灰色を呈する。SK018-B出土。

5は径25.1cmに復原される下臼である。多孔質の阿蘇溶岩製。回転軸を受ける中央孔は高さ5.2cm、径4.6cmに復原される。研磨面高は6.5～7.3cm、摩歯はかろうじて残存するほどよく摩りへっている。側面はほぼ垂直、部分的に幅1cm前後の加工工具が上下方向にみとめられる。裏面の着地面もよく摩耗している。SB051柱穴の礎石に転用されていた。

#### 銅鏡（Fig. 21, Pl. 23）

3点出土した。1は元豐通宝、径2.31cm、SK021出土。2は径2.33cm、器面が荒れており鏡種はわからない。表土出土。もう一点はSB060柱穴掘方から出土したが細片化しているため鏡種不明である。

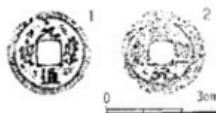


Fig. 21 銅鏡拓影図 (2:3)

#### 参考資料

##### 板碑

本板碑は、館址に隣接する西寺寺墓地の一角に置かれていたものである。したがってその出来は明らかでないが、他所から持ち込まれたと考えるよりも、館址周辺で採集された可能性が大きい。

板碑は全形をとどめ、最大幅41.2cm、高さ63.2cm、もっとも厚い部分で8cmあまりの片岩製である。前面上位に3種の種子を置き、中央種子から下に垂直線を刻む。そのむかって左邊に銘文を配する。種子は中央にキリ・ク（森、阿弥陀如来など）、むかって右にサク（寺、勢至菩薩など）、左にサ（丸、觀音菩薩）の三字を配し、阿弥陀如来、勢至菩薩、觀音菩薩の阿弥陀三尊をあらわす。通例はむかって左に勢至、右に觀音の各菩薩を配置するが、本板碑はその反対である（こうした例もある）。種子の下左邊の銘文は、器表の剥落により一部が残っているにすぎない。銘文は二行、左に「永正三〇〇」の紀年を、右には由縁をしめす銘文が予想されるが

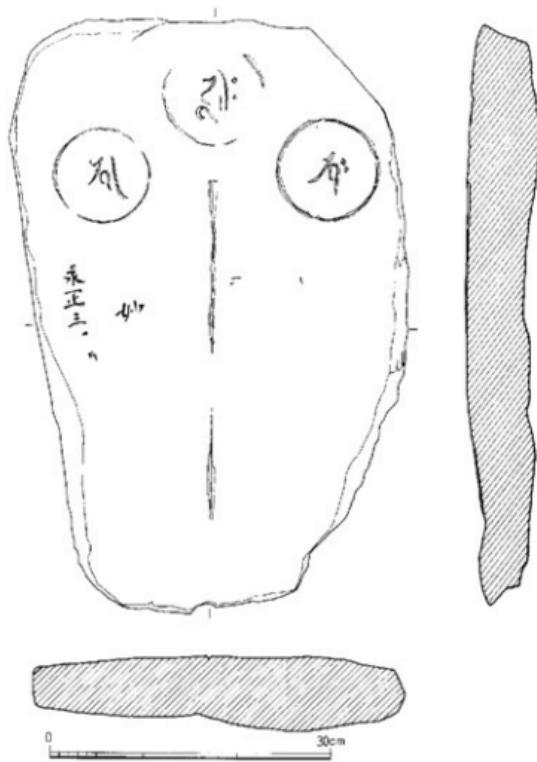


Fig. 22 板碑実測図 (1 : 6)

「妙」の一字しか見えない。したがって本板碑は、永正三年（1506）に供養もしくは墓誌として製作されたと解されるが、この年代は出土遺物から想定される諸岡館址の使用期間のうちに含まれるものである。

注

- 1) 以下、青・白磁の分類は次の文献による。横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」（『九州歴史資料館研究論集』4）1978
- 2) 渡辺雄二氏の教示による。

## 第Ⅳ章 古墳時代の遺構と遺物



### 概要

調査区内で検出された古墳時代の遺構は、中世居館造営にともなう削平を受けているため、土塁SA001下と削平を受けていない北部に分布する。検出遺構は、土塁下から石棺墓、石蓋土塙墓、堅穴式石室墓各1基、北部から横穴式石室墳1、土塙墓の可能性のあるもの各1基の計5基がある。こうした分布状況からみると、土塁内城部にも小形墳墓が存在していた可能性がつよい。この一帯が諸岡丘陵から北方に延びる台地端であると同時に、わずかな高まりをなしていたことからすれば、4~5世紀の段階に小形墳墓を中心とした墓域として使用されたことが推測される。

### 検出遺構

**箱形石棺墓 SX042 (Fig. 25, PL16)**  
調査区は中央西よりの土塁SA001下に検出された。石棺の西端は土塁構築時に切断され、東端も擾乱を受けている。石棺は大半の石材がすでに取り除かれ、東小口壁の一石が遺存しているにすぎない。  
石棺の長軸はほぼ東西である。石棺は、地山をわずかに掘り下げた長さ1.9m、幅1.1mの隅丸長方形の掘り方に構築されている。周壁を構えるために

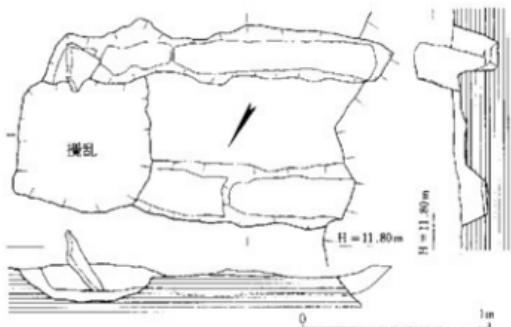


Fig. 24 SX042実測図 (1:30)

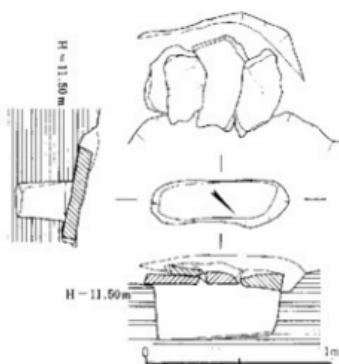


Fig. 25 SX044実測図 (1:30)

掘り方内をさらに一段掘り込んだ溝状の凹みから推測すると、格内法は幅0.4~0.5m、長さ1.6mあまりに復原される。東小口壁に遺存した腰石は玄武岩削石で内面に赤色顔料が塗布されている。床面は地山上にうすく砂を敷く、一部に赤色顔料がみとめられた。出土遺物はない。

#### 石蓋土壙墓 SX044 (Fig. 25, PL. 17)

調査区はほぼ中央部西よりの土壙SA001下に検出された。地下式土壙SK036の天井崩落部に接し、かろうじて遺存していた。

掘り方は二段、墓壙を覆う蓋石は花崗岩1、片岩2、片麻岩1の4石からなる。墓壙は不整な隅丸長方形を呈し、上端で長さ0.74m、幅0.23~0.25m、深さ0.3mあまりである。長軸はほぼ南北である。底面は平坦だが北側がやや高くなる。出土遺物は検出されなかった。

#### 竪穴式石室墓 SX043 (Fig. 26, PL. 17-18)

調査区はやや北よりの土壙SA001下に検出された。石室は長さ3m、幅2.25m、深さ0.8mあまりの

隅丸長方形の掘り方のなかに構築され、長軸をほぼ東西にとる。石室内法は長さ2.0m、幅0.7~0.85m、高さ0.7mである。周壁は最下部に腰石を立て並べ、その上2~3段に小口積みの壁石を積みあげる。いわゆる石棺系石室である。石室内面は赤色顔料が塗布されている。使用石材は砂岩、花崗岩を混用し、その比率はほぼ半々、使用部位による使い分けはみとめられない。割石、転石の比率も半々ぐらいである。既掘を受け、天井部は東端一石を欠く。

周壁の構成手法で留意すべきは、西小口部の構造である。東小口部が腰石上に2段の壁石を積みあげているのにたいして、西小口部は腰石の外側にさらに一石を立て、その上に壁石を置く。また西小口部の掘り方は、東のそれにくらべて緩かな傾斜となり、こうした手法はある種の竪穴系横口式石室の入口部を模した形態といえる。しかし、西小口部は開閉装置として機能

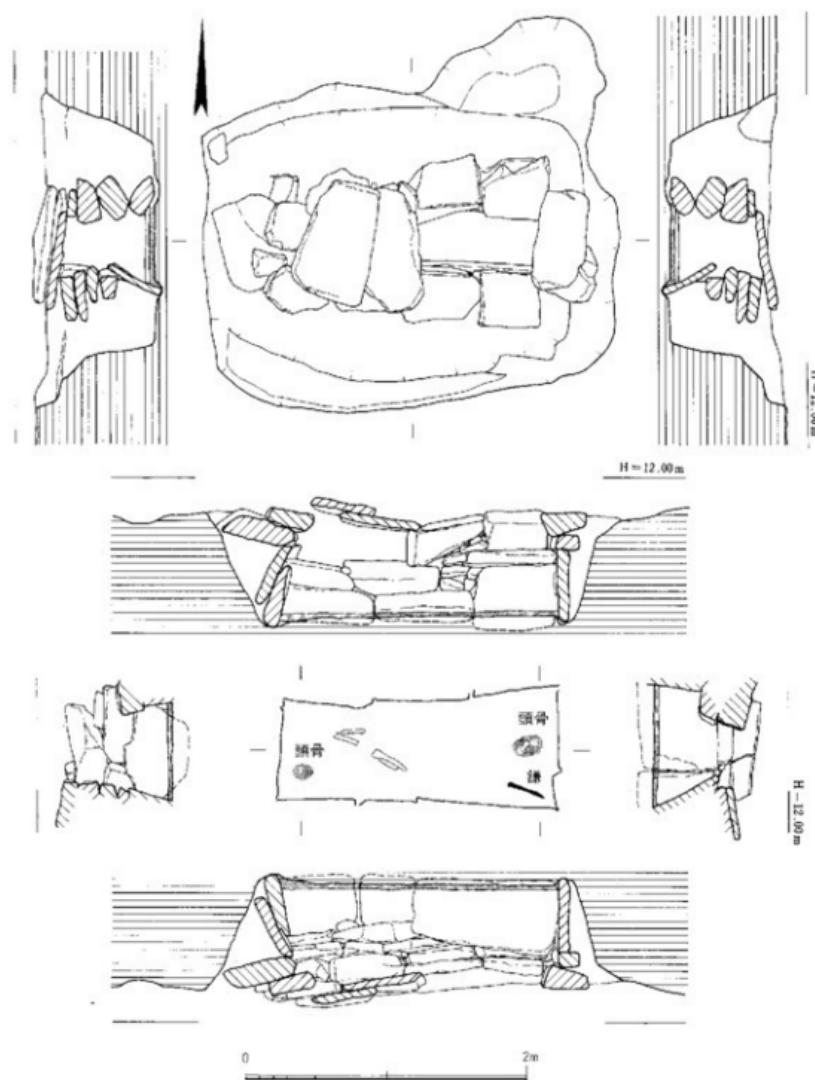


Fig. 26 SX043実測図 (1:40)

しうる構造ではない。

床面は掘り方底面上にうすく砂利を敷き、部分的に赤色顔料がみとめられた。床面上に遺存状況は良くなかったが二体の人骨片が検出された。一体は西小口部に、いま一体は東小口部に頭部を向けた差し違え埋葬である。遺存状態は悪いため、追葬か同時埋葬か判断しえなかった。副葬遺物は南側壁沿いの東小口部よりに鍵が検出された。また掘り方埋土内から滑石製紡錘車が出土した。

#### 横穴式石室墳 SX046 (Fig. 27. PL. 19)

調査区北よりに検出された。墳丘盛土は現存しないが、石室規模から推して盛土による墳丘構築が行われたと思われる。周構も検出されなかつたが、石室周囲は他よりも若干の高まりとなっており、墳丘とともにいた可能性はつよい。

石室は長さ3m、幅2.1m、深さ0.4mの隅丸長方形の掘り方内に構築されている。長軸を東西にとり西に開口する横穴式石室である。検出時の遺存状況は、左側壁最下部の腰石の一部と入口部腰石を残すのみで、他の壁材は取り除かれていた。石室は長方形の玄室と前駆中央に設けられた入口（横口部）部で構成され、竪穴系横口式石室の範疇に属する。遺存する腰石と、床面に残る腰石配置のための溝状掘り込みから、玄室の内法は幅1.2m、長さ2.25m、横口部幅0.6~0.7mに復原される。横口部は左右に板石を立てて袖部を構成する手法とみられる。

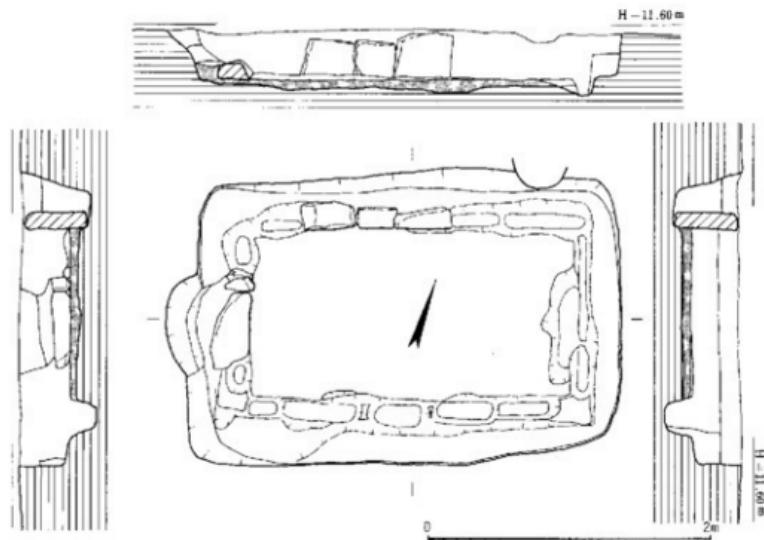


Fig. 27 SX046実測図 (1:40)

横口部前面に、石室掘方からわずかに外方に突出する小さな墓道がある。幅0.7m、長さ0.2mで斜めに下るものである。床面は掘り方底面上に6~7cmの埋土（暗黄褐色土）を行った上に砂をうすく置く。部分的に赤色顔料がみとめられた。なお遺存する石室壁石は花崗岩転石を使用し、内面に赤色顔料を塗布している。

石室内から原位置をとどめる遺物は出土しなかった。中世の土師器、輸入陶磁器にまじって、鉢1点、刀子3点が検出された。

#### 土壤 SK026 (Fig. 28)

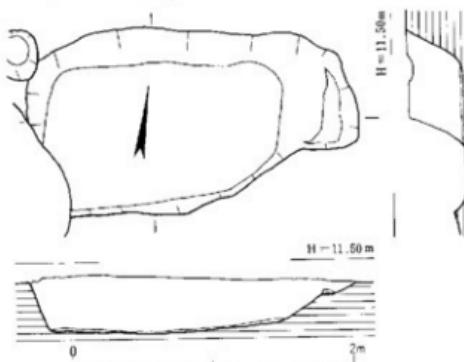


Fig. 28 SK026実測図 (1:40)

調査区北よりの切り通し部に検出された土壤である。周辺遺構の性格から、この土壤も墓として使用された可能性がつよい。平面形は隅丸長方形を呈し、上端で長さ2.1m、幅1.2m、底面で長さ1.6m幅0.9m、深さ0.4mである。長軸はほぼ東西に向く。底面は平坦で東側がわずかに高くなる。埋土はローム小塊まじりの黒色土である。埋土内から須恵器高杯が出土した。

またSK026の一部にかかっている

中世の地下式土壤SK045の崩落坑埋土から同一個体と思われる高杯の脚部と、甕口縁部が出土した。

#### 方形周溝遺構 SX047 (Fig. 23. 付図)

箱形石棺墓SX042南側の土塚下に検出された。平面形は不整な隅丸方形である。溝は幅0.5~1cm、深さ0.2~0.4mをはかる。溝の断面形は浅皿状、埋土は黑色土である。溝は区画された内部は、東西6m、南北7mあまりで、方形周溝墓の可能性があるため精査したが埋葬施設を検出することはできなかった。溝内からの出土遺物がなく、遺構の年代を推定することはできないが、方形周溝墓としての可能性を考慮してここで報告した。

#### 出土遺物

##### SX041 (Fig. 29. Pl. 29)

鎌（1） 石室内副葬品、大形の曲刃鎌で刃先端を欠く。現全長24.2cm、刃部は細身でゆるくS字形に蛇行する。基部幅2.5cm、刃部中央幅2.1cm、先端に向って次第に細くなる。

滑石製紡錘車（2） 挖り方埋土上出土。2つほどの破片。上端径2.6cm、下端径5.6cm、高さ

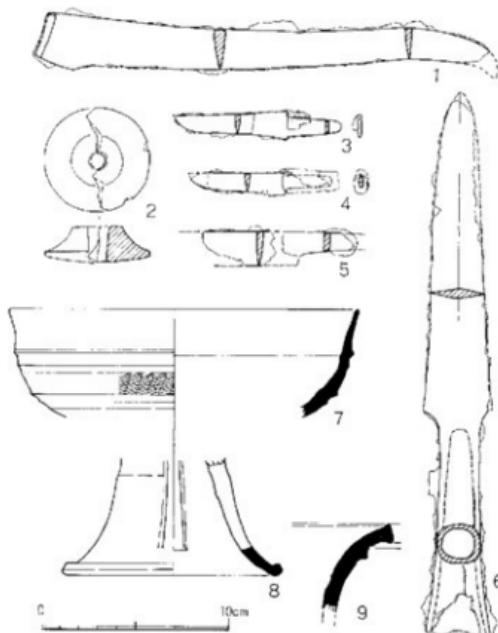


Fig. 29 出土遺物遺物実測図 (1:3)

1.9cm、孔径は0.9~1.1cm。下端面は中央が彫みをもつ。側面はゆるい内反りである。

#### SX046 (Fig. 29, PL. 29)

刀子 (3~5) 3・4は鹿角製。3は全長9cm、刃部長6.9cm、両面である。茎に鹿角製柄が着装されているが、ごく一部が直存するにすぎない。4は刃部先端を欠く。遺存長7.9cm。関は両面と思われる。茎に着装された鹿角は3.1cmの長さである。器表が剥落しており装飾の有無は不明。5は大形刀子の茎と刃部の破片。接合しないが同一個体とみられる。

鉾 (6) 刃部端を欠く。遺存長29.1cm。袋部は長さ12.2cm、下端径3.4cm。関近くまで中空である。合せ口は不明瞭。刃部は鍔があり、断面形は菱形をなす。

#### SK026 (Fig. 29, PL. 29)

須恵器 高杯 (7) 杯部はどの破片。復原口径18.7cm、体部下半に幅広い凹線を二本めぐらし、その間に精緻な波状文を描く。把手は不明。杯下部は回転ヘラ削り、口縁部内外面はヨコナナデ調整。胎土は砂粒を含む。淡青灰色、焼成は良い。

#### SX045 (Fig. 29, PL. 29)

遺構は中世の地下式土壤であるが、大井部崩落に伴って土壤SK026の一部が落ち込んでいる。その埋土から2点の須恵器が出土しているので記述する。

高杯 (8) SK026出土の高杯と同一個体の脚部である。另はどの破片。脚端径11.8cm、端部は外方に肥厚する。透し孔は4方にある。胎土・焼成は7に等しい。

甕 (9) 口縁部の小破片。口端は内傾する面をなす。口端面下に鋭い一条の凸帯がめぐる。暗青灰色。胎土は砂粒を含み、焼成はよい。

## 第V章 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、七星の東、館内部の平坦地の中央部分に集中、分布する。遺物も、これら遺構以外の出土は極くわずかであった。

遺構検出面は、表土の腐植土直下、鳥栖ローム粘土化部で、標高12.8m前後を測る。現状は、後世の館建設などで、大きく削平、変更された結果であろう。実際、袋状堅穴には、天井部まで削平を受けているものがある。ただ、土壘部の地山面からすれば、東への傾斜がみられる。遺構の覆土は、各々後述するように、黒色土を主とするが、それは、上塙盛土下に保存される、旧表土である黒色土と同一のものと思える。これらのことから、第14・17次調査地点には、諸岡川の氾濫原に向かい緩く傾斜する黒色土の斜面を、弥生時代の景観と考えよう。この景観のなかに、知る限りでは8基の遺構が、構築されていったのであろう。

以下、これら遺構について、調査番号順に記述する。

### SK010 (Fig. 31, Pl. 21)

L. 6区に位置する袋状堅穴である。開口部の原状を良く留めているものと思われる。開口部は、1辺0.4mの不整な方形を成し、0.5mの深さを測る。それより下は急に広がり天井部となり、床面で平面形が最大となる。そこで径2.0mを測る不整な円形となる。天井部はドーム状となり、よって断面形は半円形を呈す。開口部は、東壁に沿って



Fig. 30 弥生時代遺構配置図 (1 : 400)

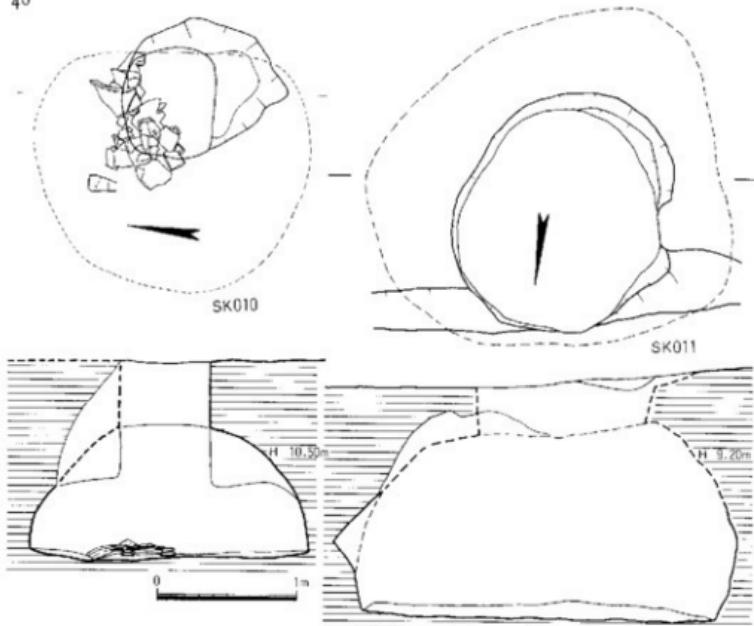


Fig. 31 SX010・011実測図 (1:40)

設けられている。覆土は黒色土で、ロームブロックを混じえる。

遺物は、覆土中より上器細片が出土した他に開口部直下の床面で、大型壺が倒れた状態で検出された。

SK010出土遺物 (Fig. 32, PL. 30) ほぼ完形の壺である。平底の底部から、卵形の胸部が立ち上り、体部中位で最大径53.2cmを測る。これに一条の浅い沈線で境し、頸部が続く。口縁部は、粘土帶を貼付肥厚させる。口縁端部は、外上方に向く1面を成す。胎土には粗砂粒を多量に含み、外面淡黄褐色、内面黄褐色を呈す。外面と頸部上半部以上の内面に研磨が、それ以外の内面には、指押し後、撫調整が施されている。

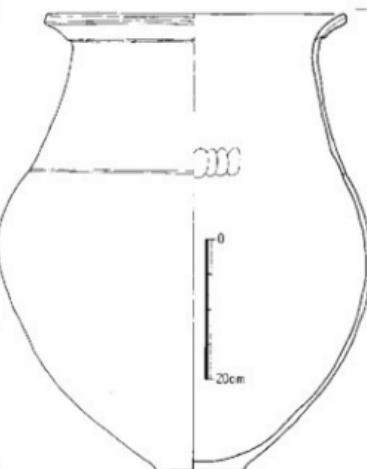


Fig. 32 SK010出土遺物実測図 (1:8)

器高65.0cm、口径53.2cm、底径12.2cmを測る。

#### SK011 (Fig. 31. PL. 20)

K 6区に位置する。SK010と、同様の形状の袋状堅穴であったと思われるが、開口部が大きく崩落、変形している。北半を近世の遺構で削除される。確認面から天井部まで0.5m、床面まで1.8mを測る。平面形は床面で最大となる。径2.5mを測る不整の円形である。断面形は半円形を呈す。開口部下の床面に小穴がある。覆土は黒色土である。遺物は、呈示し得るもの皆無である。

#### SK013 (Fig. 33. PL. 21)

M 7区に位置し、SK014と接している。平面形は不整な長方形を、断面形は方形を呈す、土壤である。長さ1.6m、幅1.1m。最深部の深さ1.1mを測る。中央東西方向の覆土の状況をみると、下半部は地山ロームブロック・ローム混り灰褐色土が東壁際から西へ傾斜をもって堆積、上半部にローム粒混り黒色土が堆積する。握りあげた地山土を用いて、東から埋め立てられた結果であろうか。

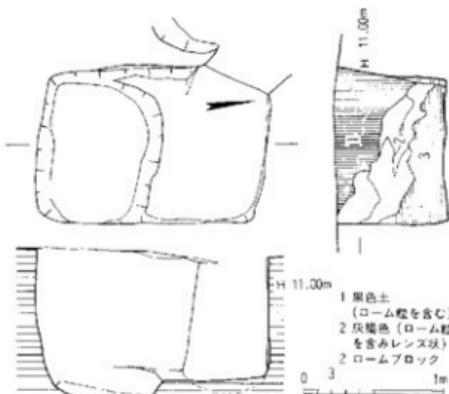


Fig. 33 SK013実測図 (1:40)

SK013出土遺物 (Fig. 34. PL. 30) 同一個体とみられる壺破片と、甕細片が出土した。壺は、底部以外の破片がみられるが、接合せず、図上にて復原し示す。体部中位よりやや下った位置に最大径をもち、14.9cmを測る。器表の剥落が著しいが、胎土は精良で、外面黄褐色、内面淡黄褐色を呈し、頸部以下の内面に撫調整を行なう他は、全面に横方向の研磨を行なう。復原高は底部を欠いて13.7cm、同口径9.2cmを測る。

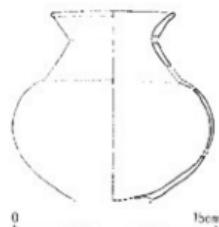


Fig. 34 SK013出土遺物実測図 (1:4)

#### SK014 (Fig. 35. PL. 22)

L 7区に位置する袋状堅穴である。開口部、天井部は大きく崩落、変形している。底面付近で、平面形が最大となる。不整な長方形で、長さ2.7m、幅1.4mを測る。断面形は半円形状で、

確認面からの深さ1.2mを割るが、これがほぼ、天井部の高さとなろう。床面南端部に楕円形の小穴を検出、それと反対側の床面からは壺の出土をみた。覆土は、他の弥生時代の遺構と同じく、ロームブロックを混じえる黒色土である。

SK014出土遺物 (Fig. 36, PL. 30)  
遺物として示すのは、床面検出の壺のみで他ではない。壺は完形で出土した。上げ底気味の底部に球形の胴部が続き、3条の浅い沈線を境に、なめらかに頸部に移る。最大径は体部中位よりやや下方の胴部にあり、21.4cmを測る。口縁部は大きく外反、肥厚する。胎土に粗砂粒を多量に含み、器表は、暗黄褐色を呈す。外面の一部に黒斑がある。口縁部以下の内面に指押し後撫調整を、外面には研磨を施す。器表が一部剥落する。口径14.8cm、底径6.4cm、高さ23.1cmを測る。

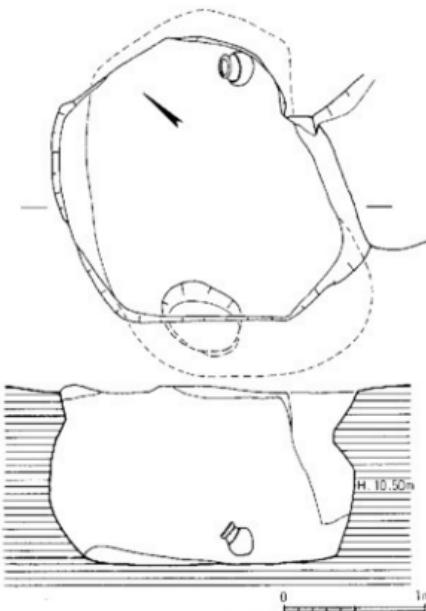


Fig. 35 SK014実測図 (1:40)

#### SK015 (Fig. 37, PL. 22)

L 8区に位置する。他とは形状、規模の異なる袋状堅穴である。確認面で、天井頂部が削除されてしまっている。平面形が最大になるのは、床面付近においてでありその形状は不整な隅丸方形を呈し、長さ3.5m、幅1.5mを測る。確認面から床面までの深さ1.2mを測る。覆土の状況を長軸方向上でみると、床面から0.1m余りは暗褐色粘質土が堆積する他は、ロームブロック層を挟んだ黒色土が、柱際から遺構中央部に向かって、高く堆積している。これは、中央部から流入、堆積する黒色土とそれに沿い流入或いは、天井部から落下、堆積する地山ロームのあったことを示しており、この袋状堅穴の開口部が、中央に位置した、小さなものであったことを示す。

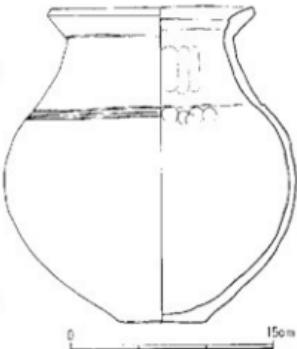


Fig. 36 SK014出土遺物実測図 (1:4)

遺物は床面直上の3箇所から、完形かそれに近い状態の土器の出土があつた他に、覆土中から散漫に土器片の出土をみている。

SK015出土遺物 (Fig. 38, PL. 30) 1・10・13は壺である。1は床面直上の検出で、底部及び頸部、胴部下半の一部を欠く。胴部上半で最大径18.8cmを測る。頸部は、胴部と極く浅い凹線で区され、口縁部で外方に屈曲、肥厚する。胎土は精良で、器表は淡黄褐色を呈す。口縁部以下の内面には、指押しの後撫調整を、他の全面に横方向の研磨を行なっている。胴上半部、沈線までの位置に、黒色顔料で文様を描く。高さは、現存高16.7cm、口径12.7cmを測る。10は大形壺の底部破片で、復原底径8.6cmを測る。胎土は砂粒を含み、器表は明褐色を呈す。外面には全面に研磨が行なわれる。13は小形壺の底部破片であり、復原底径4.6cmを測る。やや上げ底気味である。

2-5・11・12は甕である。2は床面直上の出土で、ほぼ完形となる。やや上げ底気味の底部から、胴部がわずかな膨みをもって立ち上り、外方に屈曲、口縁部となる。口縁端面の下縁には、割み目を施す。胎土には砂粒を含み、外面暗褐色、内面茶褐色を呈す。外面は撫調整が行なわれているようである。口縁部直下に、浅い沈線が横走する、内面は指押しの後、撫調整が行なわれる。高さ26.2cm、口径22.9cm、底径8.4cmを測る。3は口縁部周辺の破片で、復原口径21.4cmを測る。膨らみながら立ち上る胴部に、反り氣味に外方に屈曲する短い口縁がつく。口縁

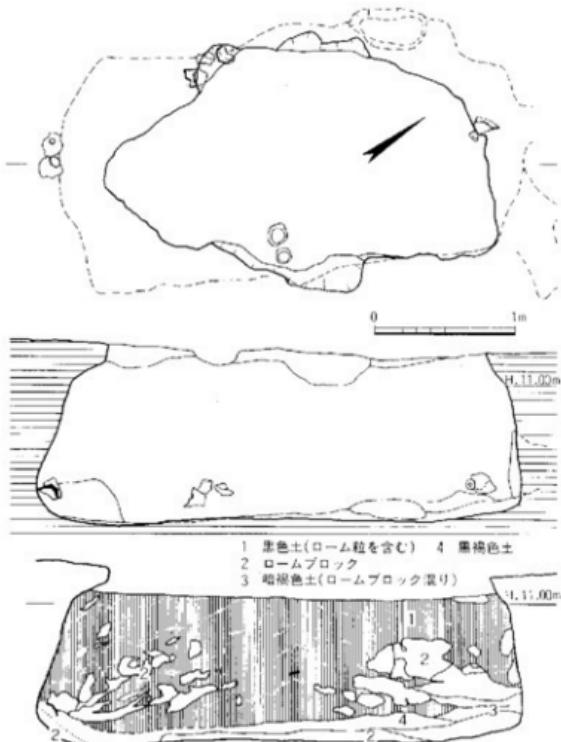
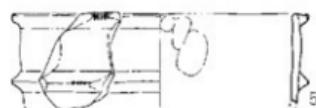
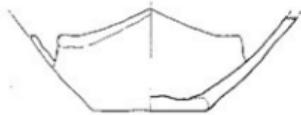
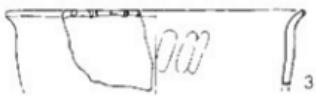
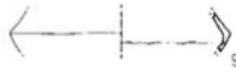
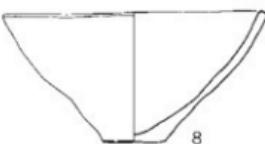
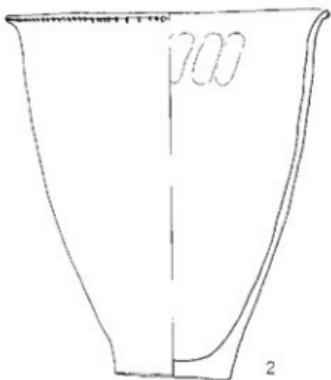
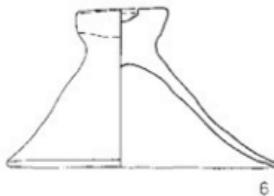
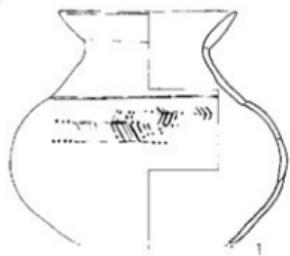


Fig. 37 SK015実測図 (1:40)

44



0 150m

Fig. 38 SK015出土遺物実測図 (1 : 4)

端部には、刻み目が不規則に施されている。胎土には砂粒を多量に含み、外面暗褐色、内面暗茶褐色を呈す。外面には横方向の撫調整、内面には指押しの後、撫調整が加えられる。4は口縁部の破片である。復原口径20.7cmを測る。膨らみ気味に立ち上る胴部に、大きく外方に屈曲する短い口縁がつく。口縁端は丸く取まり、刻み目が施される。5は、口縁部周辺の破片である。復原口径21.1cmを測る。胎土には細砂粒を含み、内外面ともに暗褐色を呈す。胴部からそのまま立ち上がり、端部をやや内傾気味にして口縁となる。口縁端外面には、山形の突帯を貼り付け、口縁上端面を形成する。更にこれの下方、胴部にも同様の突帯を貼り付ける。突帯には、縦かい刻み目を施す。外面に横方向の撫調整、内面には指押しを行なう。復原口径21.1cmを測る。11は底部破片である。平底で、復原底径7.0cmを測る。胎土には砂粒を含み、磨滅した器表面は、淡褐色を呈す。全体に撫調整が行われているものとみえる。12は底部破片である。平底であり、復原底径7.0cmを測る。胎土には、粗砂粒を多量に含んで、橙色を呈す。内外面とも、器表の剥落が著しい。外面に刷毛目調整、内面に撫調整を行なう。内面には、放射状に工具の圧痕が残る。

6は蓋である。床面直上の出土である。頂部が、深い半球状のくぼみをもつ平面を成し、厚い。頂部下で指押しによるくびれを形成したのち、外反し、下縁端部は外方に面をとる。この部分の内外面に、暗褐色のしみ状の変化がみられる。胎土には砂粒を多量に含んで、外面淡褐色、内面黄褐色を呈す。撫調整の行なわれている、とみえる内外面とも、器表面の荒れが著しい。頂部内面に、工具圧痕がみられる。下縁径19.8cm、上面径6.6cm、高さ11.3cmを測る。

7-9は鉢である。7は、ほぼ完形である。床直上で出土した。やや上げ底気味の底部から、体部が内湾気味に開き、口縁部は、軽く外方に屈曲する。口縁の屈曲部外面に、わずかに、縱方向の刷毛目調整痕が残され、これの後に研磨の行なわれたことが、わかる。胎土には、砂粒を多量に含み、外面黄褐色、内面暗褐色を呈す。外面に、岡上右下がりの、内面に同右下がりの研磨を、それぞれ行なっている。口径18.4cm、底径4.5cm、高さ9.3cmを測る。9は口縁付近の小破片である。軽く内上方に屈曲し、外面に棱を成す部分である。胎土は精良で、外面暗褐色、内面淡褐色を呈す。内外面ともに研磨を施す。屈曲部での復原径15.8cmを測る。

#### SK016 (Fig. 39. PL. 23)

M 7 区に位置する。不整な長方形の土壙で、断面形は長方形となる。長さ1.9m、幅1.5m、深さ0.5mを測る。覆土は黒色土であり、その中位から底面にかけて、ローム粒を混じえて、土器片の一括投棄された面がある。これが西へ傾斜しており、東からの埋め立てを考えさせる。

SK016出土遺物 (Fig. 39. PL. 30) 1-4は、甕である。1は、破片となって一括投棄されていたものである。底部から膨らみをもって立ち上る体部と短い口縁をもつ。口縁端下縁には、刻み目が施される。胎土には砂粒を含み、内外面とも暗褐色を呈す。外面には、縦方向の刷毛

目調整が3乃至4段に分けて施される。内面は指押えの後、撫調整が施される。口径21.1cm、底径8.2cm、高さ25.6cmを測る。2は口縁部周辺の破片である。やや膨みをもって立ち上がる胸部が、丸味をもって外方に屈曲する口縁に続く。口縁下端は、撫で下げたようになって、やや肥厚する。口縁端上縁に割み目が施される。胎土に砂粒を多量に含み、外面暗褐色、内面橙色を呈す。器表の剥落が著しいが、外面には斜め方向の不定な刷毛目調整が、内面には撫調整が行なわれるものとみえる。復原口径25.7cmを測る。同一個体とみえる破片が他にある。いずれも胸上半部以上の部位のものである。3は底部破片である。胎土には砂粒を多量に含み、外面淡赤褐色、内面暗褐色を呈す。外面に撫調整、内面にも指押しの後撫調整を施す。復原底径6.8cmを測る。4は底部破片である。焼成後、底面に1孔を穿つ。慨として使用されたものであろうか。胎土には、小砂粒を多量に含む。器表は、荒れが著しい。復原底径6.6cmを測る。

5は、鉢の口縁部周辺の破片である。荒れが著しい。胎土に多量の砂粒を含む。外面黒色、内面明褐色を呈す。同一個体とみられる他の破片がある。いずれも胸上半部以上の部位のものであろう。6は、小形壺底部で、木葉压痕を残す。

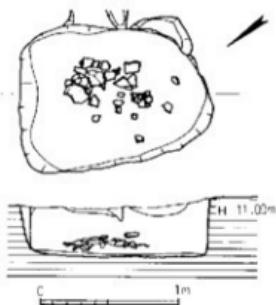


Fig. 39 SK016実測図 (1:40)

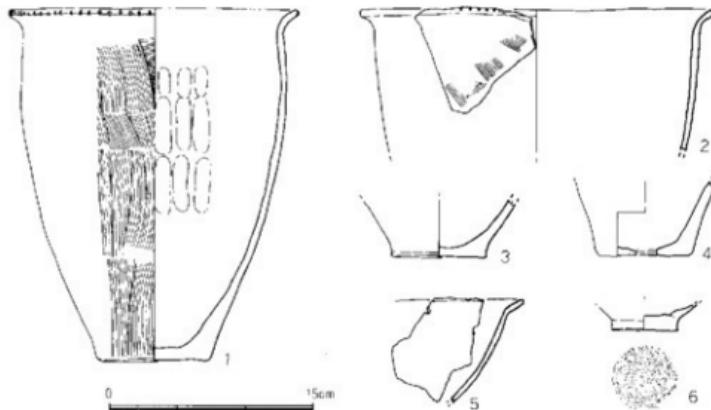


Fig. 40 SK016出土遺物実測図 (1:4)

## SK017 (Fig. 41, Pl. 23)

K10区に位置する、袋状窓穴である。平面形は、床面で最大となり、不整な隅丸長方形を呈す。長さ1.4m、幅1.1m確認面からの深さ1.1mを測る。南北方向の覆土の状況は、全体として、壁際から、中央へ向かって薄くなってゆくレンズ状の堆積を示す。これは、造構の壁に沿って流入、堆積する状況が、当初からあること、つまり、大きく開いた開口部を意味することになろうか。

遺物は、覆土中より散漫に出土した。

SK017出土遺物 Fig.42に土器を示す。1は甕胴上半部の破片である。胎土には砂粒を含み、外面黄褐色、内面暗褐色を呈する。内外面ともに撫調整が施される。復原底径11.2cmを測る。2は甕底部破片である。復原底径11.1cmを測る。

Fig.42に石器類を示す。資料总数24点のすべてが漆黒の黒曜石で、一部に

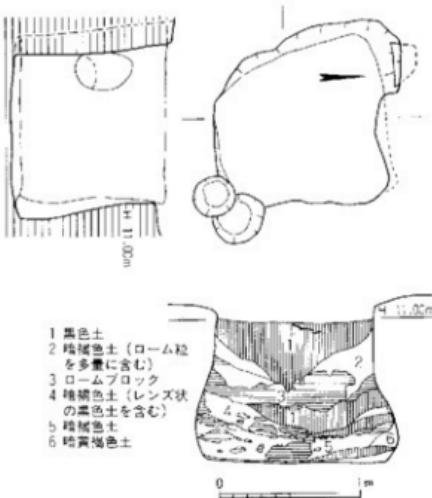


Fig. 41 SK017実測図 (1:40)



Fig. 42 SK017出土遺物実測図 (1:1)

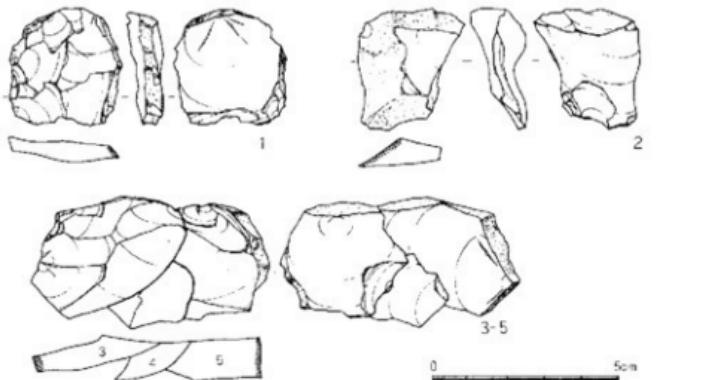


Fig. 43 SK017出土遺物実測図 (2:3)

残される原礫面の特徴から、同一原礫からのものである可能性が大きい。1・2・5は、石核とする。いずれも、剥片末端に、図上表面からの加撃で1剥離面をつくりだす。3・5は、接合資料である。3点とも、同一石核の同一剥離作業面で行なわれた。直交する2方向の加撃により剥離されたものである。いずれも原礫面を打面としている。原礫面の残存部から、石核原材の礫が、長さ6.5cmで、幅はそれ以下、3.5cm以上の、擎大のものであったことが考えられる。1は、長さ3.2cm、幅3.0cm、厚さ0.6cmを測り、以下同様にして、2は2.8cm・3.3cm・0.7cmを、3は、4.4cm・2.8cm・0.7cm、4は頭部を破碎して、2.1cm・2.1cm・0.7cm、そして5は2.7m・3.9cm・1.1cmをそれぞれ測る。

#### SK024 (Fig. 44, PL. 24)

他の共生時代遺構とは離れて、J13区に位置する袋状堅穴である。平面形は、床面付近で最大となり、不整な円形を呈す。その径は2.1mを測る。天井部は崩落しているものと思われる。現状で確認面からの深さ1.3mを測る。床面に溝状及び小穴状の落ち込みが検出された。覆土は、黒色土にロームブロックを混じえる。遺物はわずか検出された。甕細片の他に安山岩製の剥片がある。

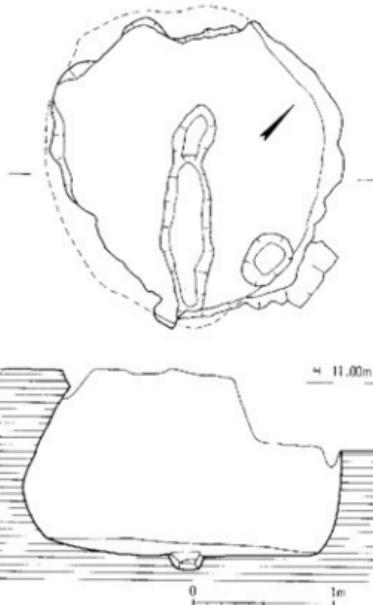


Fig. 44 SK024 実測図 (1 : 40)

## 第VI章 先土器時代の遺物とその分布

### 調査の概要

調査区 第17次調査開始後、弥生時代遺構覆土中あるいはローム面から石核、ナイフ形石器を検出し、先土器時代遺物の包含層が残る可能性を認めたため、土塁部および、北半の、比較的削平を受けていない部分に調査区を設定、発掘を行った。調査区は、既設の3m四方の区画を利用し、それのいずれかの角を含む2m四方を基準として掘り下げを行った。そして、そのうちの遺物を検出した区画を更に掘り下げるとともに、周囲へ拡張することで、遺物の分布範囲の確認を行った。遺物は出来る限り3次元の出土位置を記録することに努めた。結果、Fig. 44に示すように、発掘面積は北半部84m<sup>2</sup>、南半部105m<sup>2</sup>の計189m<sup>2</sup>となった。これによって、本調査地点内の、先土器時代遺物包含層として可能性のある部分は、八女粘土下は除外して、殆ど調査の手を及ぼしたものと考える。

層位 土塁SA001下には、旧表土とみられる黒色土及びそれ以下のロームが良く保存されているのが観察された。但し上部は、土塁盛土と思われるが、それとの境界が明らかでない。両者をまとめ、I層とする。以下の層位を、F16・17区西壁の観察に依って述べる(Fig.46)。表土下、II層は、有機物で汚染されかつ、粘土化した鳥栖ロームである。厚さ0.2mを測り、III層の暗黄褐色粘質土に漸移する。厚さ0.3mを測る。IV層はIII層よりもやや粒子の細かい暗黄褐色粘質土で、厚さ0.3mを測る。II層からこの部位まで、親指人の花崗岩クサリ硬をわずかに含む。V層は暗黄褐色粘質上で、厚さ0.3mを測る。VI層は暗赤褐色で、V層からみられる赤色粒子が顕著にみられる。これは、VII層にまで分布する。また、黄褐色粘質土塊を含んで、上面は顕著な凹凸を呈す。厚さ0.3mである。VIII層は



Fig. 45 先土器時代調査区 (1:400)

上面が顕著な波状を呈す黄褐色粘土である。この面が、深掘部の下底面で、II層上面より1.7m、標高10mをそれぞれ測る。以上のように観察される層位のうち、II・III層及びIV層上部から先土器時代遺物の出土をみた。つまり、先土器時代遺物の包含層は、鳥柄ローム層中の、クサリ礫を含んだ風化部ということになろう。

**遺物の出土状況 (Fig. 47・48)** 遺物の出土状況は、1面を成さず、先土器時代遺跡に通有な、上下に幅をもった状態を示す。それが層位的に分離できるような状況はない。このような出土状況を示す資

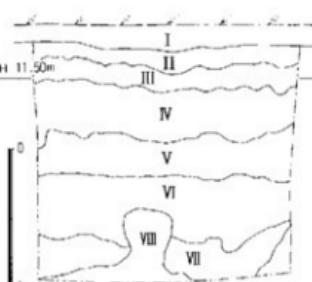


Fig. 46 土層(E16 + 17区西壁)実測図  
(1 : 40)

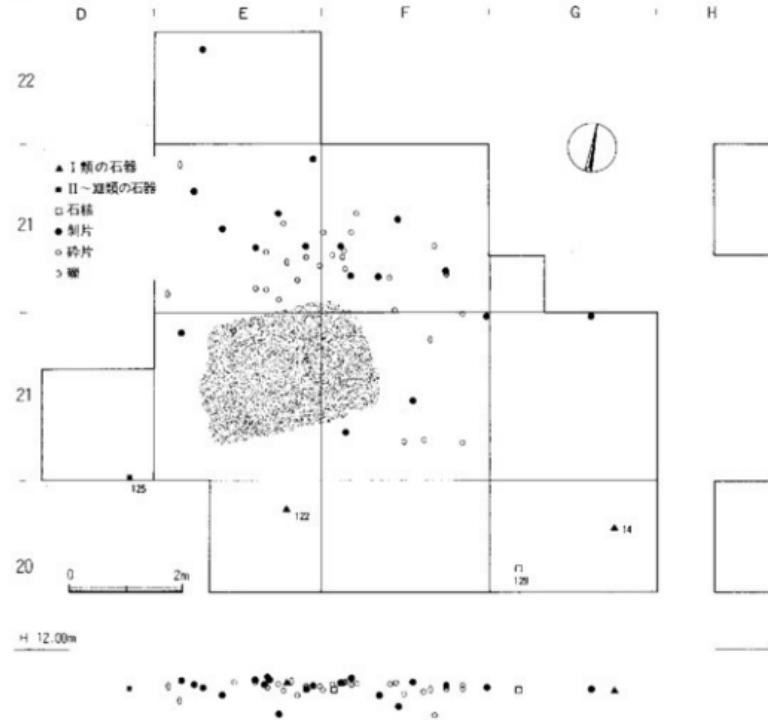


Fig. 47 遺物分布図 ブロック1(1 : 100)



Fig. 48 遺物分布図 ブロック1(1:100)

料のうち、出土位置を記録したものが、礫を含め 200余点を数える。これが E21・F21区、E14・F14・F13区をそれぞれ中心とした部分に集中、分布するようにみてとれる。ここではそのような集中、分布をブロックと呼び、前者をブロック1、後者をブロック2とする。

ブロック1は、4m程の円形状の広がりをもち、その中には明らかな石器を含んでいない。中央部に同一原石より破碎、剥離された碎片、剥片が集中して分布し、そのうちには接合するものもある。資料は、上下に 0.5m 程の幅をもって出土した。ブロック2は、径 5m 程の範囲に資料がまとまる傾向があるが、それを越えて南北へも資料の分布が広がっている。ナイフ形石器の多くと II・III類の石器の殆どが、このブロック及び周辺から出土した。資料は、上に 0.5m 程の幅をもって出土した。

### 出土遺物

本調査区で出土した先土器時代遺物は、礫等を除くと、表掲資料も加えて 175点を教え、このうちの44点を石器及び石核として挙げることができよう。ここでいう石器は以下に述べるように12の類型に分けて示せると考える。これの中には、従来明確な観察、分類へ行われてきたものと、そういったことが積極的に行なわれていないものとが混在する。いわば精粗取り混ぜたかたちの分類である。

#### I 類の石器 (Fig. 49, PL. 31)

素材の縁部を一部残して刃部とし、他を急斜な剥離で純く調整した石器をナイフ形石器とするならば、以下の資料を挙げることができる。ナイフ形石器は、調整のあり方と形状とによって更に分類できる。

1. 調整された2側辺をもつ石器 (11・35・105・205・199・106・65) 縦長の剥片を用い、素材を斜めに切り取る様な調整を2側辺に行ない、刃部と調整辺とが鋭い角度で交わる尖端部と面調整辺の交わる基部とをつくり出す。これにより、刃部の向き、素材の用い方によって更に類別を行なうことができる。

11は、尖端部を素材下位とし、かつ刃部が尖端部の方向を基準として左刃の右器である。尖端、下半部を折れにより欠失する。刃線にも剥離痕がみられるが、それには打痕・打痕裂痕が観察されず、剥離痕の幅一杯に一様にかけられた力により、押し削ったような様態をみせる。ここでは、そのような痕跡を押し削り痕と呼んでおく。

35・105は、素材上、上位右刃の石器である。35の基部は薄い平基状を成す。石器長軸が素材のそれに極く近い。105は中央尖部のみの資料である。刃部を欠失するが、側辺の調整が次第に小さくなることで刃部の位置が推定できよう。

205・199・106・65は、素材上、下位右刃の石器である。205は、尖端部・基部を欠失してい

る。199は尖端部を欠失する。基部は調整による2側辺により、尖基状を成す。106は尖端部を欠失する。基部は両側辺に対し角をもって、平基状をなす。刃縁には、浅い角度の押し割り状痕が連続する。65は、基部付近のみの資料で、右側辺に深く入る調整、左側辺にはより軽度の

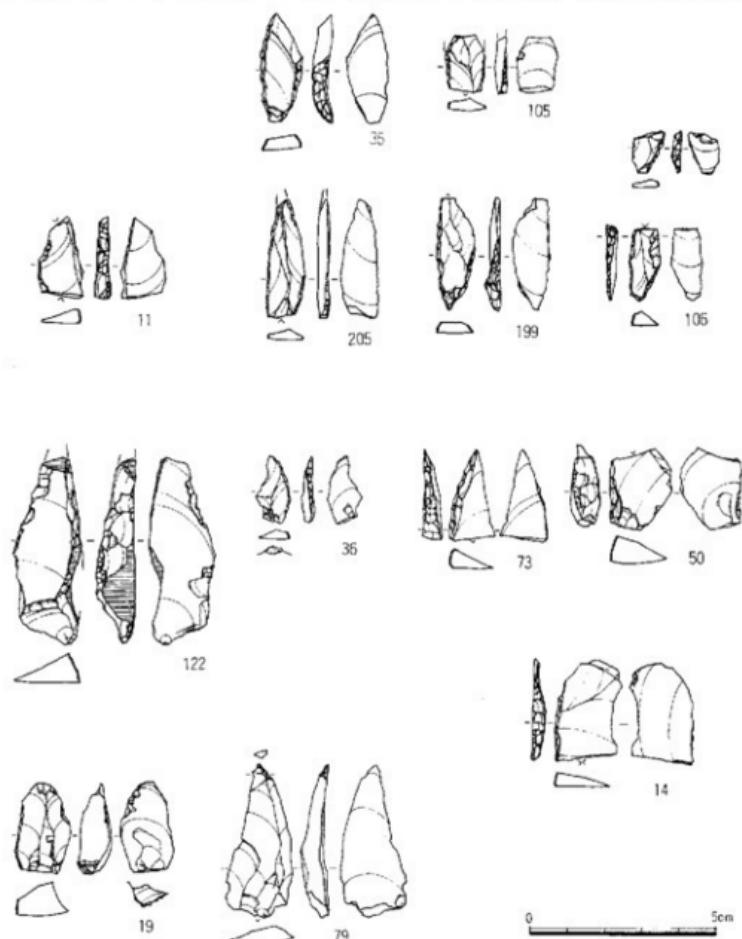


Fig. 49 I類の石器実測図 (2:3)

調整が行われる。

2. 調整による1側辺をもつ石器（122・73・50・36） 刃部と調整による1側辺とで尖端を形成するが、基部に相当する端部には、素材打面を残置し、調整された基部をもたない。この条件により、すべて素材上位の石器となる。

122、36は左刃の石器である。尖端部と右側辺を欠失する資料である。ナイフ形石器とした資料中、とびぬけて大形でかつ厚い。側辺の調整は、深い大きな剝離痕が連続する。最も厚い部分には、棱線調整剝離がみられる。刃縁の表裏に極く薄い剝離痕が断続している。36は資料中、最も小形のナイフ形石器である。調整される右側辺は、尖端から打面に至るまで、極く急な角度の調整が行われる。前者には点状の、後者には平坦打面が残置される。73、50は右刃の石器である。73は上半部の資料で、刃部下端に統一調整がみられないことから、この分類中に含める。50は、刃部が大きく湾曲し、かなり幅広の剥片を素材としたことがわかる。残置される打面は、平坦打面である。調整は比較的大きな剝離痕が連続し、わずかに鉛直状を呈す。

3. 基部調整の石器（19・79） 石器の基部と尖端部とに相当する部位のみに調整の行われる石器である。挺長の剥片を素材とすることにより、いずれも上位の石器となる。

19は極く厚く、やや短い剥片を素材とする。残置される素材打面は、平坦打面である。素材打面に接する両側辺の $\frac{1}{4}$ から $\frac{1}{2}$ 程までの部位に調整を行く。先端部には、緩い角度の剝離痕がみられ、ために半縁状を呈す。基部近くの表面稜線上に、打済状の痕跡が、基部から $\frac{1}{2}$ 程の位置にまでみられる。79は基部を欠失しており、疑問が残るが、素材先端部に急斜な調整が行われることで、本分類中に含める。右辺中央部の上位に裏からの、下位表からの微剝離痕がそれぞれ断続する。

4. 尖端部をもたない石器（14） 刃部と調整辺とが尖端を形成しない。幅広で末端部が半縁状となる素材剥片の側辺を、断ち切るような調整と、それに直交するような調整とが行われる。前者は裏からの、後者は表からのそれぞれ急斜な剝離である。

## II類の石器 3・108+104-112・307・303・306・109・47・66・100・61・93 (Fig. 50, PL. 30)

3は岡上、上、下辺が折れ面である。調整部は、両側辺中央部にあり、いずれも押し割り状痕が連続する。108+104+112は、3片に折れ、分離して同一調査区（F14区）内から出土した。右側辺表面に調整が行われ、中央部で緩く湾入する。また、湾入部に対応する左側辺裏面に、緩い角度の剝離痕が連続する。307の素材打面は破碎され、右側辺中央部表面に押し割り状痕が連続する。302は上辺が折れ面である。右側辺は単剝離により一面を形成し、その上部と左側辺上半部に比較的角度の大きな剝離痕が連続する。後者が湾入部となる。303は、両側辺中央部表面に剝離痕が連続する。左辺のそれは波状にうねり、右辺のそれは2つの湾入部を形成する。

以上示したのは、いわば湾入度大のものであり、以下に示すのは、それ的小のものである。



Fig. 50 II類の石器実測図 (2 : 3)

109は、右辺中央部表面に急斜な剝離痕により、幅が狭く深い湾入部を成す。47は上・下端が折れ面となる資料である。左辺上端部・右辺中央部表面に押し割り状痕が連続、狭く浅い湾入部を形成している。66は下端が折れ面である。平行する両側辺の、ともに中央部表面に押し割り状痕が連続し、湾入部を形成する。100は、上辺を欠失、下辺は折れ面となっている。左辺中央部に連続する剝離痕により湾入部を形成する。対する右辺上には、表裏面に断続する小剝離痕が観察される。61は、下辺が折れ面となる。右側辺中央部に急角度の剝離痕が連続し、やや鋸歯状を呈す。93は、右側辺全体に連続する剝離痕が観察され、その上半部は、波状に連続する湾入部となっている。

### III類の石器 23・305・110 (Fig. 51, PL. 31)

素材縁部に沿う、小規模な連続する剝離痕の観察される石器である。素材である剝片の形状は、変更されない。23は、右側辺中央部に裏面からの、連続する小剝離痕が観察される。305は湾入する素材左側縁部表面に小剝離痕が連続あるいは断続する。右側辺では、裏面に同様な剝離痕が連続あるいは断続する。下半部表面の後線上には、擦漬し状の痕跡が観察される。110では、左側辺の打面に接する位置から下端近くまで、剝離痕が連続する。その縁部は微凸状を呈

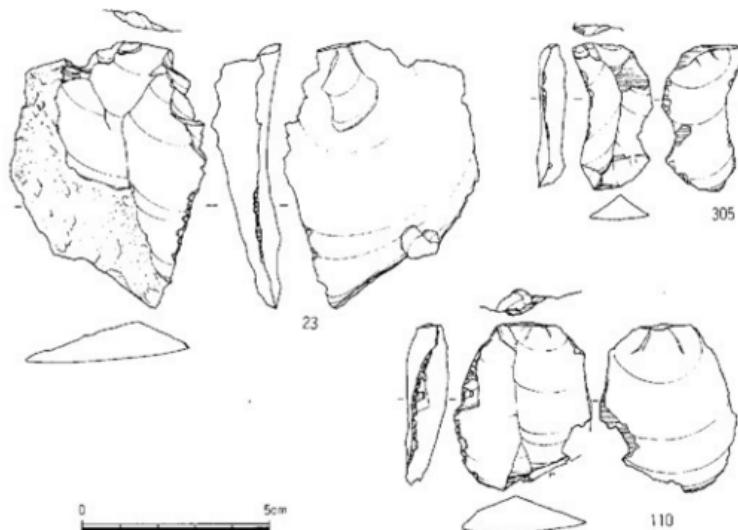


Fig. 51 III類の石器実測図 (2 : 3)

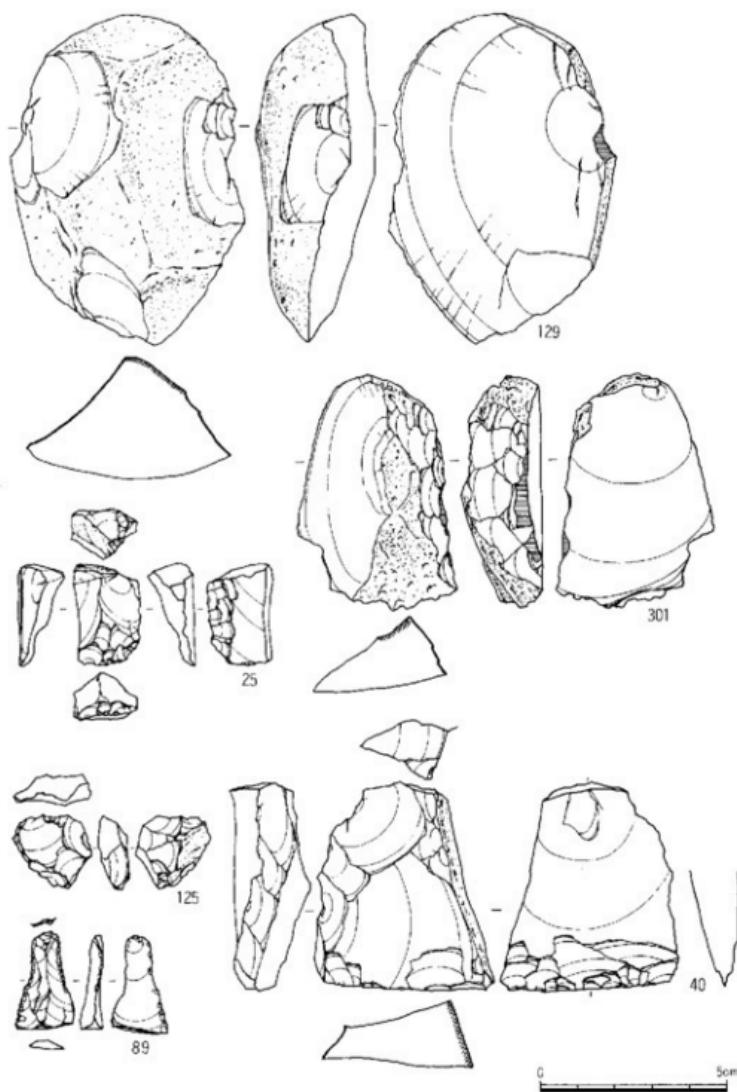


Fig. 52 IV ~ IX類の石器実測図 (2 : 3)

す。また、右側辺の打面と接するまでの上半部には、緩い角度の剥離痕が連続する。

#### IV類の石器 129 (Fig. 52, PL. 31)

原礫を分厚く折り取ったような、横長の剥片を素材とする。表面の、長軸を挟んで対応する両辺に、それぞれ単剥離面がみられる。石核とも考えられる資料ではあるが、剥片を素材として、裏面より相対する2辺の対応する位置に同様の剥離を行う点から、石器の分類中に含めることにした。

#### V類の石器 301 (Fig. 52, PL. 31)

極く厚い、原礫を縦に半裁したような剥片を素材とし、その右側辺に連続する比較的大きな剥離痕による調整を行っている。これを刃部とするならば、直刃をもつ石器ということになる。表面の半ばに原礫面を残す。

#### VI類の石器 25 (Fig. 52, PL. 31)

上辺は素材打面、左側辺は折れ面である。下辺表面には、押し割り状痕と小剥離痕とが入り交じっている。左側辺裏面には、比較的緩い角度の剥離痕が連続する。この部分の縁部は、側面観が顕著な波状を呈す。また、上辺の素材打面部にも、表面から素材剥離面より後の剥離が行われていることが観察される。

#### VII類の石器 125 (Fig. 52, PL. 31)

素材の様態を知り得ない石器である。正面観逆三角形となる。表面は、縁部に加撃点をもち中心に向かう。比較的大きな剥離面で構成されている。上辺・左辺には、更に小剥離が連続して加えられている。右辺には折れ面がある。裏面は、表面と同様な、しかし、表面に先立つ剥離面と原礫面とで構成されている。

#### VIII類の石器 89 (Fig. 52, PL. 31)

1点のみの資料である。打面に接する両側辺から、やや深くはいる剥離痕が連続し、右辺では下部まで、左辺では下端まで連続する。下辺は折れ面となっている。資料の形状は、素材の中軸について左右対称となる。

#### IX類の石器 40 (Fig. 52, PL. 31)

1点のみの資料である。素材となる台形状の剥片下辺の裏面に緩い角度の、大きな剥離痕が連続する。資料中、最も大形の部類に入る石器である。

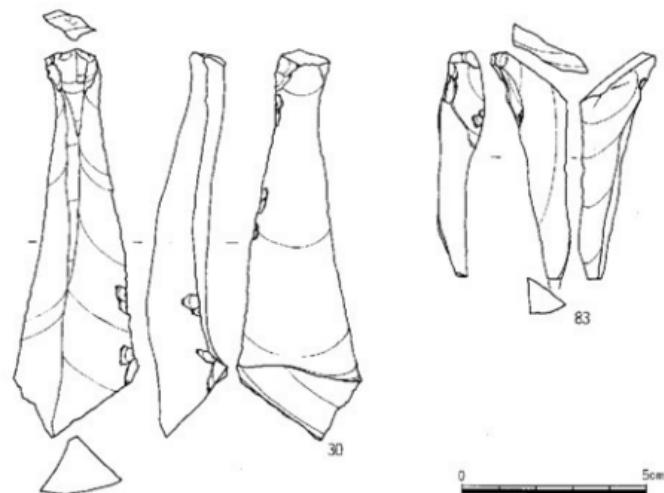


Fig. 53 X類の石器実測図 (2:3)

## X類の石器 30・83 (Fig. 53, PL. 31)

綫長の分厚い剝片の打面に接する部分の側辺に、調整を行なう石器である。30では、左側辺に表面への、右側辺に裏面への調整が、83では、左側辺表面への調整が、それぞれ観察される。

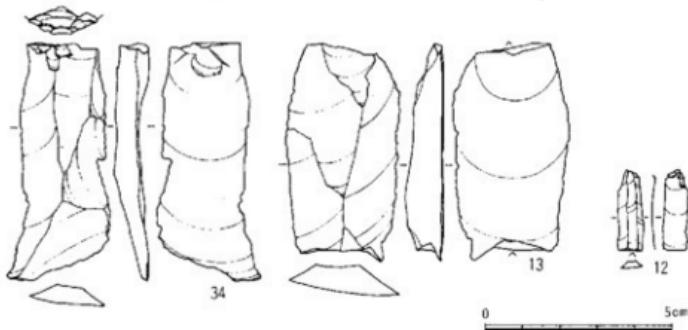


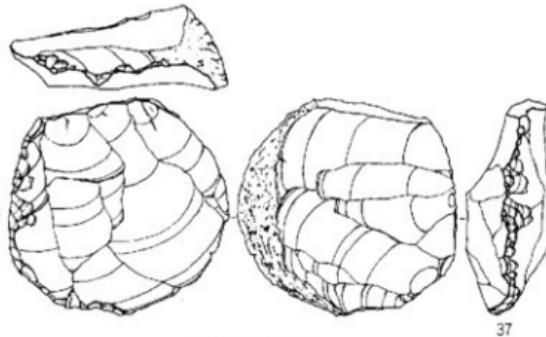
Fig. 54 XI・XII類の石器実測図 (2:3)

## XI類の石器 34・13 (Fig. 54, PL. 31)

石器素材としての剥片を考えるとき、本次調査地点出土の石器の素材とは考えられない大形の、形状が整った剥片がみられる。13の上・下刃が折れ面である他は、調整の痕跡が見当らない。いま他の剥片との差異を数値上で示し得ないが、以上のようなあり方をするとみえる資料に、それ自体石器としての性格を考え、これを「刀器」と呼ぶこともできよう。<sup>4)</sup>これは剥片状の刀器でもある。

## XII類の石器 12 (Fig. 54, PL. 31)

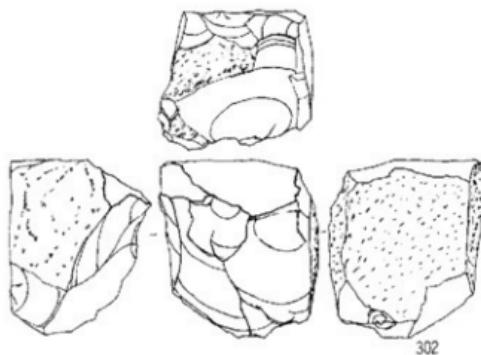
極く小形の刀器状の剥片である。細刃器とできるかも知れないが、細刃器用の石核の出土をみていない。上下端とも折れ面となっている。



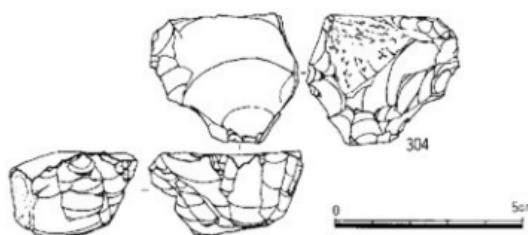
37

2. 石核 37・307・304・210 (Fig. 55, PL. 31)  
明らかに石核といえる資料は、4点出土している。304のみは、第14次調査時SK007覆土中の出土、他は第17次調査における出土である。また、210は風化著しく図示しない。

37の原材は円礫である。表面と裏面と、2面の剥片剥離作業面を残す。表面のそれは、単剥離面の周縁に、連続する剥離面による調整を行う打面を利



302



304



Fig. 55 石核実測図 (2 : 3)

用している。一方裏面のそれは、左辺から下辺に連続する小剥離による調整で打面を除去され、以後の剥片剥離は行われない。下辺に礫面を残している。

307は、SK014 覆土中の出土である。左側面、後面は原礫面である。打面は、剥片剥離作業面側からの單剥離面である。210もこれに類するものである。

304の上面には、打面再生かともみられる單剥離面が残される。これにより、剥片剥離作業面にあたる、表面・左右側面の剥離面の上端が除去される。

以上、石器及び石核について述べてきた。これらの他に、数量的に主体を占め、かつ、これら石器の素材あるいは自ら石器ともなり得る剥片及びそれと石核とのなす関係についても、いま検討する余裕をもたず、割愛する。

**付記** この機会に、付近で出土した資料を紹介しておこう。Fig. 56に周辺の先土器時代遺跡を示す。

このうち、1982年の板付B-12b地点遺跡の調査において、高畠（警察官校）台地東縁に沿い、北流する溝 SD01底部近くの砂中から、先土器時代資料が出土した（Fig. 57）。

1は、ナイフ形石器で、2側辺が調整によるものである。黒曜石製で、磨耗等は見受けられない。2は、調整による湾入部をもつ石器である。黒曜石製で、磨耗が著しい。

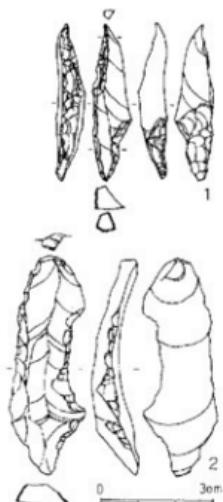


Fig. 57 板付B-12b地点出土  
遺物実測図(2:3)



Fig. 56 鷺岡・板付遺跡群における先土器時代遺物分布図 (1:25000)

▲ナイフ形石器文化 ■鉢石器文化  
数字は鷺岡遺跡群調査地点遺跡  
○は板付B-12b地点遺跡

## 注

- 1) 月見野遺跡調査団 1969 「概報 月見野遺跡群」明治大学考古学研究室
- 2) 安藤政雄 1973 「関東地方における切出形石器を伴う石器文化の様相」『越谷史学』第32号 23-65頁
- 3) 2) と同じ
- 4) 戸沢充則はか綱 1974 『砂川先土器時代道路』所沢市教育委員会
- 5) 柳沢一男編 1963『板付周辺遺跡調査報告書』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第98集 福岡市教育委員会

番号	器種	石質	層	位置(cm)		規模(cm)		番号	器種	石質	層	位置(cm)		規模(cm)								
				W-E	N-S	H	底					W-E	N-S	H	底							
1 F13	剝	黒		116	44	38	2.0	1.5	0.3				31 E15	剝	黒	II	200	122	32	1.1	2.2	0.2
2 n	剝	黒		151	6	49	1.0	1.3	0.2				32 Z1									
3 n	石II	黒		143	72	45	5.0	3.1	0.6				33 n									
4 n	剝	安		153	70	49	1.6	0.8	0.3				34 n	石III	流					6.3	2.8	0.6
5 n	剝	安		163	65	50	2.0	1.4	0.4				35 F12	石I	安	III	88	22	63	3.0	1.1	0.4
6 n	剝	黒		188	41	48	0.5	0.9	0.2				36 n	石I	安	II	292	26	38	1.7	0.9	0.3
7 n	剝	シ		169	106	3738	6.8	3.3	1.4				37 n	核	黒	III	134	270	40	5.7	6.8	1.7
8 n	剝	安		178	141	31	2.5	1.7	1.0				38 F11	礫	砂	III	71	12	66	3.4	2.1	1.2
9 n	剝	安		103	176	42	1.3	1.1	0.6				39 n	剝	安	III	24	61	43	2.3	2.4	1.1
10 n	剝	黒		226	69	49	0.4	0.7	0.1				40 G12	石IV	砂	III	86	226	46	5.6	4.8	2.0
11 n	石I	黒		248	90	44	2.2	1.2	0.4				41 F12			III	296	259	40			
12 G12	石Ⅲ	黒		94	130	42	2.2	0.7	0.2				42 n				280	239	44			
13 n	石Ⅲ	安		119	67	46	5.8	3.0	0.8				43 F12	碎	安	IV	286	174	46	2.6	1.9	1.3
14 G19	石I	黒		224	89	75	2.8	1.7	0.4				44 G13			II	43	287	49			
15 Z1				-	-	-							45 G12	砂	黒	III	4	3	49	0.4	1.0	0.1
16 n				-	-	-							46 G13	剝	黒	III	12	113	33	3.9	2.1	0.8
17 F13	剝	安		105	120	40	2.7	2.6	0.7				47 n	石II	黒	IV	31	31	47	2.4	2.3	0.3
18 G11	砂	黒		12	183	44	0.7	1.9	0.9				48 G13	礫		IV	23	25	426			
19 n	石I	黒		1	52	39	2.4	1.4	0.9				49 F13	剝	真	IV	295	252	39	3.6	2.1	1.4
20 n	剝	黒		33	36	43	1.7	0.9	0.3				50 n		安	II	142	242	36	2.2	1.6	0.7
21 n	礫	砂		86	46	66	4.1	3.2	2.1				51 n	砂	黒	IV	163	201	50	1.7	0.7	0.3
22 n	剝	安		87	119	52	1.9	1.1	0.4				52 n	剝	安	III	47	221	33	1.3	1.5	0.4
23 n	石III	黒		122	110	50	7.3	5.3	1.5				53 n	碎	黒	II	77	172	29	0.1	1.6	0.4
24 n	剝	安		182	134	48	7.4	2.3	1.2				54 n	礫		II	7	183	40	1.3	1.0	0.5
25 G10	石VI	黒	III	70	53	53	1.8	2.8	1.3				55 n	碎	砂	III	3	113	38	2.1	1.4	1.4
26 H10	剝	真	IV	10	143	98	4.6	3.2	1.4				56 n			III	41	104	34			
27 n	剝	柘	III	122	221	63	3.8	1.2	1.0				57 n	剝	黒	III	49	38	39	3.8	1.6	0.8
28 n	疊	シ	IV	154	240	78							58 n			IV	90	11	48			
29 F8	剝	黒	III	25	198	49	3.8	3.3	1.0				59 E13	剝	安	III	291	26	36	3.7	2.4	0.7
30 n	石X	安	II	151	170	29	1.7	3.4	1.8				60 n	剝	黒	III	261	107	40	1.0	1.0	3.0

注) 器種・石質の略号は以下の通りである。砂: 砂片、剝: 刃剥、核: 核石、石: 石器(数字は頭を表す)、黒: 黒曜石、玄: 玄武岩、安: 安山岩、砂: 砂岩、メ: メノウ、粘: 粘板岩、水平位置は、各3m刻み×北西隅を原点とする。高さ(H)は、標高1200cmを基準とする。

Tab. 3 先土器時代遺物計測表

番号	器種	石質	層	位置(cm)			規模(cm)			番号	器種	石質	層	位置(cm)			規模(cm)		
				W-E	N-S	H	幅	横	厚さ					W-E	N-S	H	幅	横	厚さ
61 E13	石II	黒	IV	256	93	49	1.7	0.9	0.2	101 F14	剝	黒	IV	119	185	40	1.0	1.4	0.3
62 " "	碎	黒	III	182	45	40	0.7	(0.6)	0.2	102 "	碎	玄	III	129	181	36	2.2	1.2	0.6
63 E14	剥	黒	IV	132	133	44	1.9	2.1	0.3	103 "	碎	黒	IV	137	164	42	1.9	1.6	0.6
64 "	剝	黒	IV	215	148	50	0.5	1.3	0.1	104 "	剝	黒	IV	103	156	44	1.6	2.1	0.3
65 "	石I	黒	IV	243	166	47	1.1	0.9	0.2	105 "	石I	黒	II	183	280	30	1.5	1.1	0.3
66 "	石II	黒	IV	225	188	38	4.0	3.0	0.6	106 "	石I	黒	III	166	260	43	2.0	0.9	0.3
67 "	剝	黒	IV	236	200	45	2.2	1.4	0.4	107 "	石II	黒	IV	182	237	58	1.9	1.4	0.3
68 "	剝	黒	IV	239	198	44	2.0	1.7	0.3	108 "	石II	黒	IV	225	287	45			
69 "	碎	黒	III	266	208	43	0.8	0.4	0.3	109 "	砂	黒	IV	237	202	59	0.8	1.0	0.4
70 "	剝	黒	IV	273	203	48	0.4	1.2	0.2	110 "	石III	黒	IV	168	210	39	4.6	3.8	1.0
71 "	碎	黒	IV	269	219	49	0.4	1.0	0.2	111 "	剝	黒	IV	169	203	39	2.3	1.9	0.5
72 "	剝		IV	278	224	48				112 "	碎	黒	IV	182	201	44			
73 "	石I	黒	IV	285	206	34	2.4	1.2	0.5	113 "			IV	195	176	48			
74 "	剝	黒		276	186	37	2.0	1.6	0.5	114 "	剝	黒	IV	201	159	48	0.9	0.9	0.2
75 "	碎	黒		271	180	42	0.7	0.6	0.3	115 "	剝	黒	IV	191	125	41	1.8	1.4	0.3
76 "	碎	黒		273	164	41	0.8	0.5	0.2	116 "	剝	黒	IV	200	106	42	1.3	1.3	0.3
77 "	碎	黒		297	189	47	1.3	0.6	0.1	117 "	剝	黒	IV	231	120	44	3.7	2.6	0.5
78 F14	剝		IV	7	218	38				118 "	碎	黒	IV	223	80	47	1.6	1.5	0.6
79 "	石I	黒	IV	14	212	41	4.1	1.8	0.5	119 "	剝	黒	IV	228	34	47	1.3	1.6	0.1
80 "	剝	黒	IV	18	252	54	1.6	2.2	0.3	120 "			IV	151	52	49			
81 "	剝	黒	IV	18	252	54	1.8	0.7	0.2	121 E19			III	275	18	58	4.3	2.4	0.8
82 "	剝	黒	IV	55	271	41	2.4	2.0	0.2	122 "	子	黄	III	239	53	60	5.0	1.8	1.0
83 "	石X	頁	III	41	252	35	6.4	1.8	1.8	123 "			IV	215	7	78			
84 "	碎	黒	IV	36	237	41	1.6	0.9	0.3	124 "			IV	125	7	71			
85 "	剝	黒	IV	39	225	41	1.2	1.1	0.3	125 D20	(?)	黒	IV	259	295	70	1.8	2.2	0.8
86 "	碎	黒	IV	28	219	42	1.1	0.8	0.2	126 E20	礫			17	210				
87 "	剝	黒	IV	26	207	40	1.4	1.4	0.2	127 "	剝	安		50	36	58	3.8	3.5	0.7
88 "	碎	黒	IV	47	207	40	1.3	0.9	0.2	128 "	碎	黒	III	144	34	60	1.1	0.5	0.3
89 "	石IV	黒	IV	41	200	37	2.6	1.5	0.4	129 G19	石IV	頁	III	52	157	74	8.9	6.4	3.1
90 "	剝	黒	IV	53	204	40	1.6	2.3	0.2	130 F20	剝	黒	II	44	211	58	1.0	1.4	0.2
91 "	碎	黒	IV	58	203	39	1.1	0.6	0.2	131 "	碎	黒	IV	147	230	81	0.8	2.0	0.4
92 "	剝	黒	IV	62	192	44	5.6	2.9	1.5	132 "	碎	黒	IV	184	229	76	0.9	0.6	0.4
93 "	石II	黒	IV	49	278	49	1.8	1.1	0.3	133 "	剝	黒	III	164	158	60	1.5	1.5	0.2
94 "	剝	黒	IV	61	279	49	1.0	1.8	0.5	134 "	碎	砂	III	252	233	70	0.8	1.0	0.1
95 "	碎	黒	III	83	203	33	1.4	0.6	0.3	135 "	礫	砂	III	195	49	72	2.1	2.5	1.2
96 "	剝	黒	IV	74	239	47	1.7	1.4	0.3	136 "	碎	黒	III	252	4	66	1.6	1.2	1.0
97 "	碎	黒	III	96	246	37	1.0	0.9	0.3	137 "	剝	黒	III	295	7	69	0.5	0.8	0.2
98 "	碎	黒	III	96	290	36	0.9	0.7	0.1	138 G20			III	38	199	71			
99 "	剝	黒	IV	126	203	46	3.7	2.4	0.8	139 "			IV	80	220	81			
100 "	剝	黒	IV	110	185	54	2.0	1.7	0.3	140 "	剝	黒	III	182	7	69	2.6	1.6	0.3

Tab. 4 先土器時代遺物計測表

番号	器種	石質	層	位置(cm)		規模(cm)			備考	
				W	E	N-S	H	縱		
141 F21	砂	砂	III	4	159	72	5.0	3.4	1.3	
142 "				10	186	75				
143 "	砂	砂	III	64	125	64	5.0	3.9	0.6	
144 "	砂	砂	III	54	159	64	5.1	3.0	1.6	
145 "	砂	玄	III	35	182	61	4.7	1.9	1.3	
146 "	砂	砂	III	40	190	60	6.9	2.6	1.3	
147 "	砂	砂	III	20	200	64	3.9	2.3	1.0	
148 "	砂	砂	III	38	204	62	2.0	1.9	0.7	
149 "	砂	砂	III	44	221	58	5.5	3.7	1.8	
150 "	鉢	黒	III	53	235	53	1.5	2.3	0.6	
151 "	鉢	砂	IV	101	236	82	3.1	1.1	0.4	
152 "	砂	砂	III	122	240	62	3.0	2.7	1.1	
153 "			IV	105	259	74				
154 "	鉢	黒	II	131	296	60	1.1	0.7	0.7	
155 "	鉢	砂	III	224	232	71	3.6	2.6	1.0	
156 "	鉢	黒	III	223	226	66	1.8	1.2	0.3	
157 "				222	193	72				
158 "				189	184	85				
159 "	鉢	黒		201	182	118	0.4	0.5	0.1	
160 "				230	166	121				
161 "			III	169	140	75				
162 "	鉢	黒	IV	136	185	104	2.4	4.7	0.8	
163 "			III	143	41	74				
164 "			IV	199	52	87				
165 F21	礫			27	267	68	2.2	2.1	1.5	
166 "			II	73	205	58				
167 "	鉢	砂	IV	181	259	60	4.8	3.1	1.8	
168 "	鉢	砂	III	201	260	67	4.9	4.4	4.2	
169 "	鉢	砂	III	224	278	61	6.1	4.1	3.5	
170 "	礫		III	256	264	64				
171 "	鉢	砂		259	243	84	3.7	2.8	1.0	
172 "	鉢	砂		298	217	66	6.4	3.3	2.1	
173 "			IV	263	220	96				
174 "			III	247	210	59				
175 "	礫	砂	III	240	210	56	1.8 0.5	1.5 1.3	1.0 0.8	
176 "			III	229	188	64				
177 "	礫		III	230	175	59				
178 "	鉢	砂	III	211	178	55	4.9	1.8	2.1	
179 "	鉢	黒	III	202	193	50	4.1	3.4	0.7	
180 "	鉢	砂	III	183	135	59	5.5	2.6	1.6	

番号	器種	石質	層	位置(cm)		規模(cm)			備考	
				W	E	N-S	H	縱		
181 E21	剝	砂	III	206	133	55	2.0	2.7	0.5	
182 "			IV	214	155	55				
183 "	砂		IV	233	143	74	3.4	4.0	1.7	
184 "	礫		III	250	159	65				
185 "	砂		IV	274	152	66	1.4	1.5	0.6	
186 "	剝	安	IV	273	133	67	1.9	6.5	0.6	
187 "				286	112	65				
188 "				286	103	69				
189 "				245	111	68				
190 "	剝	砂	IV	285	54	65	2.4	1.8	0.6	
191 "	剝	黒		199	11	63	1.3	1.9	0.5	
192 "	岩片	片	IV	49	37	93				
193 "	剝	黒	III	71	85	63	1.2	1.5	0.2	
194 "	剝	黒	IV	122	151	83	1.4	1.1	0.3	
195 E22	剝	黒		88	181	69	2.9	1.9	0.3	
196 E21	剝	砂		224	121	109	2.3	3.2	0.8	
197 F15			IV	11	69	54				
198 "			IV	29	127	48				
199 "	石I	黒	IV	26	146	47	3.0	1.1	0.3	
200 "	剝	黒		27	189	47	2.2	1.6	0.3	
201 "	鉢	黒		14	114	47	0.6	1.1	0.4	
202 F15	純	黒		283	245	44	1.2	1.8	0.4	
203 "	剝	黒		272	195	44	2.5	1.5	0.4	
204 "	剝	黒		236	152	35	2.1	2.6	0.4	
205 "	石I	黒		243	133	37	2.1	2.6	0.4	
206 "				293	92	36				
207 "	剝	安		283	46	37	5.4	1.9	1.1	
208 F10	砂	黒		128	185	38	1.1	1.4	0.2	
209 "	鉢	黒		15	223	45	1.5	1.9	0.4	
210 F21	礫	玄		23	205	73	6.0	6.8	4.3	
301 G11	石Ⅳ	安					6.4	4.4	1.9	
302 SK014	核	黒					5.0	4.2	3.7	
303 F14	石II	黒					2.8	3.6	0.3	
304 -	核	黒					3.7	4.0	2.2	
305 -	石Ⅲ	黒					4.1	2.1	0.6	
306 -	石II	黒					3.5	1.8	0.4	
307 -	石II	黒					3.4	2.8	0.6	

Tab. 5 先土器時代遺物計測表

## 第VII章 総括

### 1. 先土器時代について

本次調査で得られた成果を列記すれば、以下の如くなろう。

1. 遺跡の立地が、諸岡丘陵の先端部に及ぶことが明らかとなった。
2. 遺物の出土状態は、層位的重複を示していない。
3. 鳥柄ローム風化部から、地點的にまとまって遺物が出土した。
4. 遺物中に示準的な石器として、ナイフ形石器（I類の石器）をもつ石器文化である。

以上について、気づいた点を述べる。

1について、周辺における遺跡の分布に目を擇けるならば、板付台地、警察学校台地にも遺跡の立地が考えられる。（Fig. 57）このように先土器時代遺跡は、少なくとも板付、諸岡遺跡群周辺においては、極く一般的なものであったと思われる。ただ後世の開発に伴う台地部の削平が、遺物遺存の可能性を極く小さなものにしているのであろう。今後に続く調査における遺跡確認の可能性ありとしたい。

2・3について、先土器時代の遺跡を考えるとき、火山灰層を主として、風成層の厚くみられる地域には、重層遺跡が一般的であり、その無いか、堆積の薄い地域においては、重層遺跡はみられないか、数が極く少ない。重層遺跡は、周期的に移動、回帰あるいは、一時に移動、通過する人間集団の活動の痕跡であることが考えられている。とするならば、後者地域において、單一層中に出土する遺物は、いま述べたような関係が平面的関係の中に集約されてしまつた姿を示す可能性が一つには考えられよう。なおまた、既に研究の行われているように、そこには、同時に進行する人間行動が、同様同一面上に表示されているものなのもある。以上のような観点から本次調査資料を考える時、資料の同時性と、一行動様式である石器製作の行為との指標としての遺物間の接合関係を、検討する作業が完了しておらず、将来の可能性とし、いまは遺物の分布に地點的な片寄りがあり、それを、いわゆるブロックを成していることで、同時的存在を考えることができ、これを「石器文化」と呼ぶことができるかと思う。<sup>1)</sup>

4について、本次調査地点の石器文化は、ナイフ形石器の基本的形態の組み合せをもつことがわかる。いま、本次調査地点のそれと、第2・4次調査地点のそれとを対比しながら考えてみると、両者は「2側縁加工のナイフ形石器」（I類の石器）と「基部加工のナイフ形石器」（I<sub>a</sub>類の石器）とを保有するという点において共通し、前者が「部分加工斜断形のナイフ形石器」（I<sub>b</sub>類の石器）とI<sub>c</sub>類としたナイフ形石器とを保有し、後者が「部分加工先断形のナイフ形石器」及び、いわゆる台形石器（「2側縁加工台形状のナイフ形石器」）を有するという点において異なる。更に細かくみてみよう。2側縁調整のナイフ形石器は、両地点ともに右刃の石

器が過半数を占めるという傾向を共に示す一方で、前者に対し後者が比較的小形であり、往々裏面基部調整のおこなわれることがみてとれよう。(Fig. 58)。「基部加工」のナイフ形石器については、後者資料を確實なものとできれば、両者間での素材の用い方での相違は鮮明なものとなる。前者が上位の石器であるのに対し、後者は下位の石器となる。部分加工斜断形のナイフ形石器と部分加工先断形のナイフ形石器とは、共に尖端をもちながら、調整された基部をもたない石器であるが、それぞれの石器群中の位置を相互に補完し合うかのような存在であり、I<sub>1</sub>類の石器と台形石器とは、いわばそれぞれに独自なあり方を示すものといえよう。ついでながら、他の石器についてもみるならば、本次調査地点のII類・III類の石器も同様に第2・3次調査地点において認められる。また、石核についていうならば、前者出土資料37と同一のものに類するものが見られる。

以上のようなあり方をまとめると、以下の如くなろう。2遺跡間に、石器組み合せ十二個様加工のナイフ形石器、基部加工のナイフ形石器という同一性と、部分加工斜断形のナイフ形石器と、部分加工先断形のナイフ形石器及び台形石器という相似性をもつ。また二側縁加工のナイフ形石器には、2遺跡間に大きさと調整方法の差という相違性をみるとできよう。いま、諸岡遺跡という限定された空間を考えると、前者には、一般的なナイフ形石器の形態の選択的保持という点において、周期性を、後者には同一形態下における差異という点においてナイフ形石器の系統性を、それぞれ考えることができるのである。しかし、ここでその方向については、示し得ない。周辺地域における洪積層中に包含される石器群の発掘調査がまたれる。

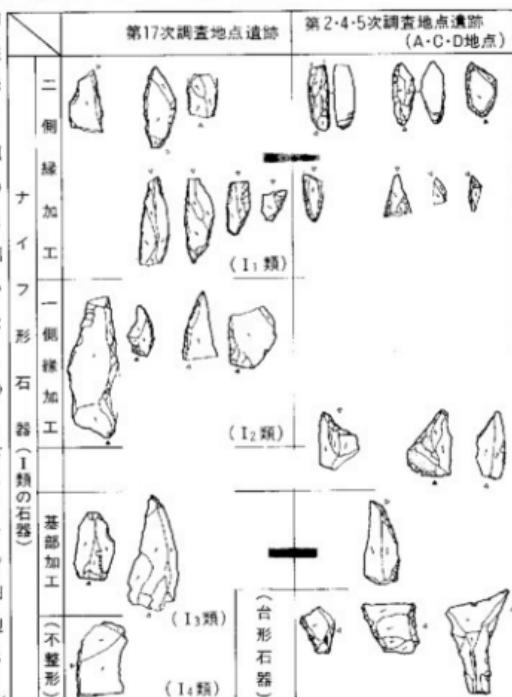


Fig. 58 諸岡遺跡群のナイフ形石器実測図 (1:2)

1) 安藤政雄 1979「石器の形態と機能」日本考古学を学ぶ(2) 有斐閣

## 2. 弥生時代

### 1) 弥生式土器

諸岡遺跡第17次調査の結果出土した弥生時代前期の土器は、初頭から後半段階に位置づけられ主体となるのは中頃である。型式名をあてはめれば板付II式前半に相当するが、本報告に限らず、現在時期比定に関する限り積極的に型式名を適用した報告例は数少い。前期中葉、後半といった時代区分による時期比定は研究者によりその表現法・内容などその意味するところが異なり統一がとれていない。ここでは福岡地方前期土器編年の確立過程を観察することで、先に記したような状況が生じてきた背景を探りあわせて若干の指摘を行いたい。

福岡平野の本格的な前期土器に関する編年研究は1951年より始まった板付遺跡の調査に求められるが<sup>1)</sup>、この結果当地方の土器を基準に編年がたてられた。この成果は板付II式の細分へと進みII式前半と後半に二大別されることにより、板付I式と併せ様式上の三期編年が確立することになる。この細分については板付遺跡の報告で図とともに示された器種毎の型式設定の際、すでに想定されていたことで、社会現象との対応を計ったものと言える。この三期編年を時代区分で表現すると初頭・中頃・後半となる。また終末という表現も認められ全体としては四期編年とも考えられる。この1966年の段階では基本的に板付報告における各器種の型式設定が終末を除き明確であったと考えられるが、北部九州という地域設定であった点に注意する必要がある。これについては後述する。<sup>2)</sup>

以上に示した森貞次郎氏の見解は小田富士雄氏により基本的に継承され、やがて板付I式→II A式→II B式→(諸岡)<sup>3)</sup>という四期編年となる。この中の終末期相当の時期は社会現象に土器編年を対応させた結果設定されたもので、その内容は明確でない。またII A・II Bとは1960年代より板付IIa・IIbとして通用してきた呼称とはほぼ一致すると思われ、森氏のII式前半・後半に連がるものと考えられる。ところが板付II式が二大別されて以降、各期における型式の内容が検証されることがなかった結果、変形土器を中心に混乱が見られ、更に調査の進展に伴う弥生時代前期の社会が明確になるに従い、土器編年が社会現象に立ち遅れるという結果となった。先に指摘した状況はまさにここに求められる。社会が土器を規定するとは言ても完全に一致するものでないことはいうまでもないが、土器を規定する以上そこになんらかの変化を抽出するためには土器自体の型式学的研究は、絶えず進行していくべきものと考える。

そこで編年研究についてであるが、原則的に器種毎の型式設定後器種間の併行関係を検討するわけだが、前期の場合は壺形土器主導の編年研究が主流でその結果変形土器の位置づけに混乱の度が強い。福岡平野の場合は板付遺跡の報告が唯一の例でその後の飛躍的な資料増加にもかかわらずほとんど手がつけられていない。第2に系統の問題がある。福岡平野の前期土器様式は三つの系統—板付系統・刻目突帯文系統・折衷系統—から構成されており、時期毎に併存の

あり方に相違が認められる。板付I式・夜臼IIb式共伴期では、刻目突帯文土器（夜臼IIb式）の存続と板付I式（板付系）の成立、それに伴う折衷系の成立により二系統、II式前半期になると板付系のみが存続・発展、他は消滅、後半期に再び刻目突帯文系（従来の亀ノ甲タイプ）が出現し、その影響で折衷系が成立することにより三系統の併存、末から中期初頭にかけ三系統とも存続し城ノ越式を成立させるという現象は、系統を重視して始めて認識できる問題である。第3に先程触れた編年研究を行う際の地域設定に関してであるが、従来より指摘されてきた問題でもありあとは実行に移すのみである。現在編年論的にみて地理的・歴史的にみて一貫した地域単位として考えられるのは平野単位で、福岡平野・早良平野・佐賀平野などである。但しいかなる属性の差異をもって地域差として認めるかについてはまだ解決しなければならない問題も多く今後詰めていく必要がある。

以上述べてきた点を考慮して私なりの編年案を示す必要があるが紙数が限られているため、結論だけ簡単に示しておく。全体として四期に大別される（Fig.59）。

I期 編年論的に板付I式の成立を指標に設定でき、夜臼IIb式は残存現象として認識できる。両系統の存続幅が一致するか否かは今後の課題である。

II期 板付系土器の単純段階で、玄界灘沿岸地域以外に板付系土器の出現が認められそれに伴い各地で折衷系が成立する。従来の板付II式前半相当

III期 刻目突帯文系、それに伴う折衷系の成立をもって設定できるが今のところ変形土器のみに認められる現象である。板付II式後半相当。福岡平野における刻目突帯文系統が全変形土器に占める割合は一割にみたず、亀ノ甲遺跡や佐賀平野における現象とは全く逆の様相を呈している。

IV期 三系統とも存続するが刻目突帯文系、折衷系の比率がⅢ期に比べ増す。従来の前期末を上限とし調期と見做しうるほどの社会現象が指摘されてはいる。編年論的には壹形土器における肩部貼り付け帯の出現、城ノ越の壹形土器の出現などが挙げられるが城ノ越式との型式学的分離にやや問題があるため、城ノ越式の再検討を含め今後の課題とし現状では下限を中期初頭と幅をもたせて捉えておく。

以上編年案に本遺跡出土上の土器を対応させるとFig.59のようになる。最後に本報告にあたり福岡市教育委員会柳沢一男・杉山富雄の両氏には多大な御配慮を賜り、下記の諸先生、諸氏には種々の御指導・御便宜を賜った。末筆ながら深甚の謝意を表したい。（敬称略 五十音順）

岡崎敬・田崎博之・西谷正・森貞次郎・山崎純男・横山浩一

## 2) 遺構

第14・17次調査で検出された弥生時代遺構は、前掲の編年表上、次のように配列されよう。いずれも前期の遺構であり、そのうち前Ⅰ期と考えられるのは土壙SK013である。同様、前Ⅱ期にSK010・015・016・017が、前Ⅲ期にSK014が、それぞれ考えられよう。

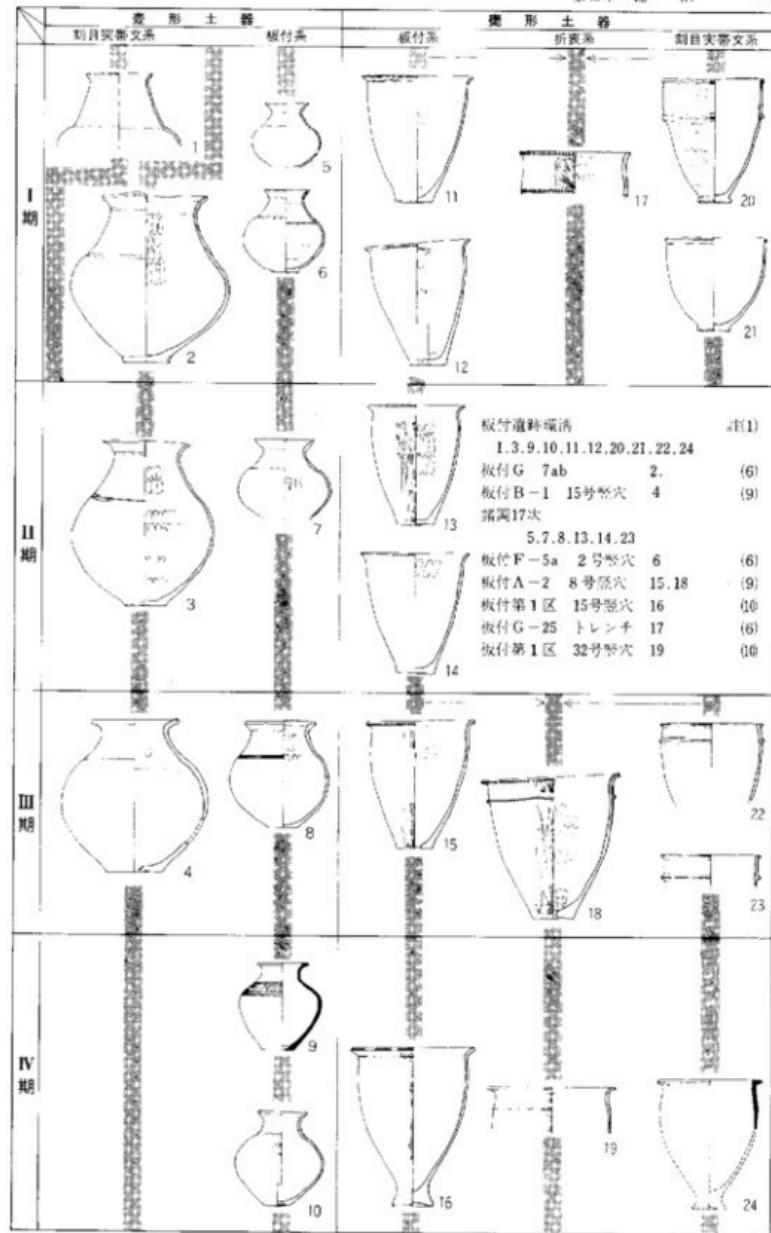


Fig. 59 福岡平野弥生時代前期土器編年図 (1 : 12)

さて、これら弥生時代遺構中、深い長方形の土壙であるSK013と浅い方形の土壙であるSK016を除く他の6基が袋状堅穴であり、それには板付日式土器を指標とする、前二期から一部前三期という、時間の幅を考えられた。時期を決定できるような遺物の出土をみていないSK011・024も、その形状・位置から、同七編の中に収まるものであろう。SK013とSK014とは重複しているが、他はそれぞれ互いに間隔をもっている。ここに、SK013と以降の袋状堅穴との不連続性を考えることができないだろうか。

いま、諸岡遺跡内での弥生時代遺構の分布を考えてみると、明らかに袋状堅穴とできる遺構は第14・17次調査地点以外では、第9次調査地点で1基検出されている。しかし、袋状堅穴は群集することが一般的であるとするならば、調査区での位置関係上、西方、つまり諸岡丘陵南端部に一群の袋状堅穴を考えられ、諸岡遺跡群の南北端にそれぞれ立地する2群を、また、第4・5次調査地点で検出された堅穴群を同様のものと考えるならば、丘陵東斜面に更に1群を考えられよう。ところで、櫛棺墓地は、遺跡群南端丘陵東・南斜面及び頂部西寄りの調査区で確認され、帶状に群を成すようにもみえる。

以上のような遺構の分布状況からするとならば、袋状堅穴群から櫛棺墓地へと性格を変えながらも利用される南端部と、前期の袋状堅穴群を最後に、利用の痕跡の残されない北端部という対照的な空間を、諸岡遺跡群内においても指摘することができよう。

- 1) 森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』 1961
- 2) 森貞次郎「弥生文化の発展と地域性—九州—」『日本の考古学』田弥生時代 1966
- 3) 小田富士雄「弥生土器一九州2—」『考古学ジャーナル』77 1972
- 4) 小田富士雄・佐藤眞「瀬戸内をめぐる九州と畿内の弥生土器編年の検討」『高地性集落群の研究・資料編』 1979
- 5) 現在のところ唐津市柏崎貝塚の報告が文献にみられる最も古い例と考えられる。九州大学考古学研究室編「北部九州(唐津市)先史集落遺跡の合同調査」『九州考古学』29・30 1966
- 6) 山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年研究ー板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合ー」『鏡山後先生古稀記念吉文化論叢』1980 この論文中に編年表による系統図が示されている。
- 7) 例えは系統のあり方を重視すれば福岡・早良平野ともほとんど差を認めないが、型式変化の方向、プロポーションの差など詳細にみれば早良平野の差は明確になる。
- 8) SK015出土No.5は鬼ノ甲タイプとされていたものの一部で、鬼ノ甲遺跡1号溝に土体的な甕である。森 埼清一郎「弥生時代前期における割目実帶文系上器について」昭和58年度九州史学会考古学部会研究発表要旨 1983
- 9) 沢原原・横山邦輝編「板付—県道505号板新設改良に伴う発掘調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第39集 1977
- 10) 後藤直・沢原臣編「板付—市営住宅建設にともなう発掘調査報告書ー」福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集 1976

### 3. 古墳時代

諸岡館址の土里下ならびに北方の高まりに検出された5基の小形墳墓の存在は、調査前に予想しえなかつたものである。館内、館周辺はすでに削平を受けているため明らかでないが、検出された遺構の分布状況からみて、この一帯に小形墳墓群が営まれたと想定される。

さて検出された遺構は、その構造から二時期に区分することができる。一つは、西辺土塁中央付近の下部に分布する組合式箱形石棺SX042、石蓋土壙墓SX044であり、SX047は方形周溝墓の可能性がある。いま一つは、北辺高まりからその南に分布し、横穴式石室墳SX046、石棺系石室SX041、土壙墓？SK026がある。

前者（I群とよぶ）のばあい出土遺物がまったくなく、直接造営年代を知る手がかりはない。後者（II群とよぶ）からは、須恵器・鉄製品が出土しており造営年代を推測しうる材料がある。

ではI群の造営年代について、遺構の構造から考えてみよう。まず箱形石棺SX042のばあい、残された掘り方から周壁が複数の小形板石もしくは転石を立てて構成していたとみられる。福岡平野周辺での箱形石棺周壁構成からすると、弥生時代には少なく古墳時代前期後半～中期前半に多い手法である。石蓋土壙墓は遅くとも弥生時代後期前半には成立し、古墳時代中期中葉頃まで小児棺あるいは副次的な埋葬施設として當まれるが、全期間を通じてほとんど構造的変化をしめさない。また方（円）形周溝墓（台状墓）は弥生時代に遡る例は検出されておらず、その下限は古墳時代中期前半から中葉頃にある。

こうした各種墓制の推移からするI群の造営年代は、古墳時代前期後半から中期中葉頃の範囲におさまる可能性がつよい。

つぎにII群をみてみよう。SK026は土壙内から須恵器高杯が出土し、SX045天井陥没坑埋土から出土した甕も共伴した可能性がつよい。須恵器は陶色製品であるか否かは別として、第一型式第3段階前後に編年的位置を求めることができる。SX041床面から出土した曲刃鎌は、長さに比して身が細く、かつ先端が著しく内側するタイプで、畿内に出土するものとは異なり、中期前半から中葉にかけて北部九州に分布する。またSX041の石室西小口部の構造は、IV章で述べたように竪穴系横口式石室の影響を受けつつも機能を果すに至っていない。SX046からは鉢のほか鹿角装刀子が出土した。石室タイプは竪穴系横口式石室に属する。竪穴系横口式石室B<sub>2</sub>型のなかでも後出的な様相をしめす。

したがってII群のなかでは、SX041→SK026→SX046という型式的変遷が想定されるが、ほぼ5世紀中葉前後から後半という短い期間の造墓といえよう。

II群のSX046を除けばいずれも小形の低墳丘墓というべき内容であり、I・II群埋葬施設の差異は年代的懸隔のもたらしたものとすれば、I群からII群へというスムーズな継続的造営関係と解することができる。

さて諸岡台地全体をみると、南部の台地上に 5 基の小円墳群が知られており、今回の調査で得られたデータを加えたばあい、台地の南・北の二ヶ所の高まりに古墳群が営まれたことが知られる。いま仮りに南部古墳群を諸岡古墳群 A 群、北部のそれを B 群としておこう。A 群 5 基のうち一基は消滅した。いずれも径 10~20m 前後的小円墳で、かつてそのうちの 2 基の石室が露出していたらしいがいまは不明である。A 群西斜面の第 3 次調査（B 区）の際、おそらく 3 号墳に伴うと予想される円筒埴輪が出土している。埴輪は無黒斑の青窯焼成、外面タテハケ 1 次調整のみで凸帯は高くしっかりとしており、5 世紀中葉～後半と推測される。A 群のすべてをこの時期に求めることはできないが、該期の古墳群形成の特徴からすれば、5 世紀後半を中心とする年代が与えられてよい。

したがって諸岡台地においては、前代からの系譜をひく小形墳墓がまず北台地に営まれ（B-I 群）、5 世紀中葉を前後する頃に石室墳が採用され（B-II 群）、ほぼ同時に A 群の形成が行われたとみることができる。とはいえ、A 群の一部には福岡平野では数少ない円筒埴輪樹立古墳がみとめられる。A 群の優位性と該期の古墳構成を考えるうえで大きな問題を提起している。那珂川流域における古墳時代の再構成を含めて今後の課題としたい。

#### 4. 中世諸岡館址について

##### 館址の年代

Ⅲ章で記述したように、各造構からの出土遺物は量的に少いうえ、良好な一括遺物に恵まれていない。鍛造當の上服をしめす土星盛土内出土遺物も、後の掘り込みが判然としなかったために新旧が入り混じったものとなってしまった。そこで館址に関連すると思われる出土土器の型式変遷を、研究の蓄積されている大宰府土器編年を対照することによって、造當から廢絶にいたる期間を辿ることにしたい。

まず土師器杯皿のはあい、それぞれ形態上 a ~ c の三種に区分される。杯 a は口径 12~13cm で、2 点を除いて糸切りの外底に板目压痕を伴わない。b・c では板目压痕例はみとめられない。皿は前段階からの通有な a、口径に比して器高の高い b、口径に比して底径が小さく、口縁部が大きく開く c に細分されるが、外底に板目压痕のある例はない。

杯 c・皿 c は、大宰府第 70 次調査で検出され「文亀元年(1501)」銘木簡を共伴した S D 1805<sup>11</sup> 出土上器に類似し、ほぼ 16 世紀を前後する年代観が与えられる。

杯 a・皿 a のはあい、法量・器形とともに大宰府 S X 1200 新に近似するが、内底の仕上げナデが簡略化し、それに伴って外底の板目压痕が消滅する土器製作上の省略化がみとめられ、S X 1200 新に後出するとみられる。S X 1200 新は、觀世音寺東邊部（第 45 次調査）において検出された池状造構で、最下層から「元<sup>12</sup>二年(1330)」の紀年銘をもつ卒塔婆<sup>(焼)</sup>が出土しており、S X 1200 出土上器の新相をしめし、ほぼ 14 世紀中葉の年代観が想定されている。

杯<sup>3)</sup>、皿<sup>4)</sup>は、14世紀後半から15世紀初頭に比定される觀音寺子院金光寺第Ⅱ期下限をしめす腐植土層出土土器に等しい。

したがって、館址出土の土器からする諸岡館址の継続年代は、おおむね14世紀後半から16世紀前半頃に求められるが、他の遺物で検証しておこう。

備前系陶器には壺（36）と擂鉢（18）がある。開墾忠彦・霞子岡氏の研究によるⅣ期に属する製品と思われる。Ⅳ期は室町時代全期にわたるとされており土器からする年代観に低歴しない。

<sup>5)</sup> 東播魚住窯産と考えられるSK027出土の須恵質の片口鉢（21）は、14世紀後半に位置づけられ、輪造當間もない頃のものである。

土星SA001盛土から出土した美濃灰釉陶小碗（7）は、15世紀末から16世紀前半頃の製品である。<sup>6)</sup>

輸入陶磁器には中国元～明の青磁・白磁・染付のほか、朝鮮高麗～李朝の白磁鉄絵・沙器、<sup>7)</sup>陶器がある。青磁・白磁には13、14世紀のものから16世紀代のものまでを含む。朝鮮系陶磁器は14～16世紀代の製品である。このなかでもっとも身代が下降するものは明染付けである。碗（53～55）は体部から口縁部が内寄ぎみに外傾するタイプで、底部を欠くため断定しえないがいわゆる「鎌頭心」タイプになる可能性がある。作りに「鎌頭心」タイプでないにしても、大橋康二氏分類のⅢ類を遡りえず、16世紀中葉まで下降する可能性がある。

このように出土上器全体を見まわしたばあい、諸岡館の成立はほぼ14世紀後半のある一点に求めることができる。廃絶期については16世紀代全般にわたる土器編年がしめされていない状況にあり、土器器皿c・皿cの下限を押さえきれないため、現段階では明染付碗の年代観を援用して16世紀中葉前後と考えておきたい。すなわち、館の造営（土星の囲繞）を14世紀後半、その廃絶を16世紀中葉頃とし、ほぼ200年弱の長さにわたる使用期間を想定したい。それは館内に設けられた掘立柱建物の建築回数と符合する年代幅である。

#### 館の規模と構造

調査において、諸岡館址は南・西辺土壁の一部と、その範囲内の館内城が残されていたにすぎず、館全体の規模、土壁の囲繞方式を知ることができないが、旧地形の復原を通じてそれらについて考えてみよう。

まず館の位置は、洪積台地端であると同時に瘤状の高まりの中央から南寄りを占めると思われ、台地東縁を小河川が北流している。調査区北部を東西に貫通する切り通しは近代の造作と思われるが、その北方は舗造當に伴う地下げ整地か行われていない。したがって館北方は自然地形の高まりを背負う形態で土壁構築を前提とする必要はない。東側は土星南西端から約70mで現河川に至る。その河川を防衛線とするならば、東邊にあえて土壁を構築する必要はないと思われるが断定しうるところではない。検出した土壁の規模と外周の溝からする館の防御的

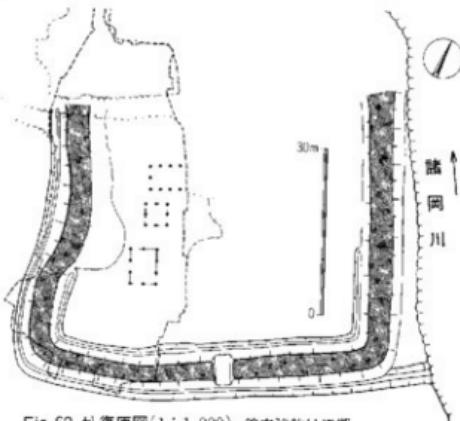
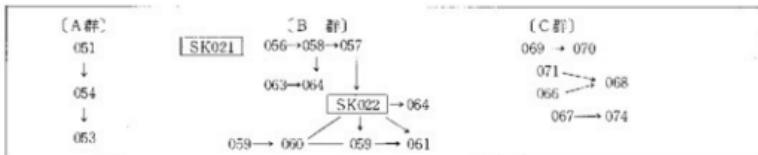


Fig. 60 地図 (1:1,000) 館内施設は初期のものと想定される。図には諸岡川と標高30mの記載がある。

検出された主な遺構は、掘立柱建物24（確実と思われるもの）のほか性格不明の土壙、貯蔵庫と思われる地下式土壙がある。

24棟の掘立柱建物は館内に無原則に配置されていない。すなわち、館内の北方に東西棟建物の一群（C群）、その南西部に南北棟建物が主体となる一群（B群）、さらにその南側に一群（A群）の三群に、ほぼ同じ位置にくり返し建替えられている。A群は4棟と少ないが、すべてが重複し4回の建替えである。B群10棟のばあいも同様で10回の建替えを想定しうる。C群では10棟のうち北西のSB065と南端のSB075のあいだに直接的な重複がない。その2棟は他の建物と併存する位置関係にあり、もっとも多い建替えを想定すれば10回だが、最少のばあいは8回の建替えである。またB群とC群の建物は隅角が一部重複し、同時に建ちえないいくつかの組み合せもあるが、そのばあい重複しない建物の併存が予想される。したがって、B・C群においては8～10回の建替えが行われたと想定されるのである。調査の過程では火災による建替え等の痕跡を見いだすことはできなかった。仮りに10回の建替えがあったとすれば、1期平均17～19年の存続期間が求められ、掘立柱建物としての平均的な耐用年数といえるであろう。第III章Tab. 2にしめした建物、土壙の重複関係を図示するとつぎのようになる。



機能は、城郭用城郭とはほど遠いのである。

旧地形と館機能を勘案すると、諸岡館は北方高台の南面を地下げ整地して館内とし、その西・南・東の三辺に土塁をめぐらしていた可能性がつよい。土塁外周の規模は南北約55m、東西約70mの矩形の平面形、また館内は南北約50m、東西約55m、面積約2700m<sup>2</sup>と想定される。

つぎに、館域内にどのような

それでは、館内における建物配置の具体的な姿はどのようにイメージされるであろうか。館域東半部がすでに削平されているが、館規模の復原からC群建物群がほぼ館の中央部から西寄より北方に位置することが明かになった。C群が東西棟建物を主体とすることは、いわばこの一群が館内の中心的建物（母屋）であった可能性がつよい。B群のはあい、一部がC群と重複する部分もあるが南北棟建物を主体としており、脇屋的な位置を占める。A群は4棟と数が少なく、従統的な配置ではないが、位置は大きく変動していない。したがって館東部の建物配置は不明としても、館中央の北寄りに母屋を、その両面する西側に脇屋を配する形態であり、母屋前面に建物はみとめられないものである。

さきにしめた建物相互の新旧関係と、建物方位、柱筋の通り、配置構成等を勘案して館内建物をつぎのように10期にしておきたい。しかし、該期の掘立柱建物がそうであるように、柱筋の通りは必ずしも正確ではない。また建物方位の振れが小さいこともある、この区分についてはなお検討の余地がある。

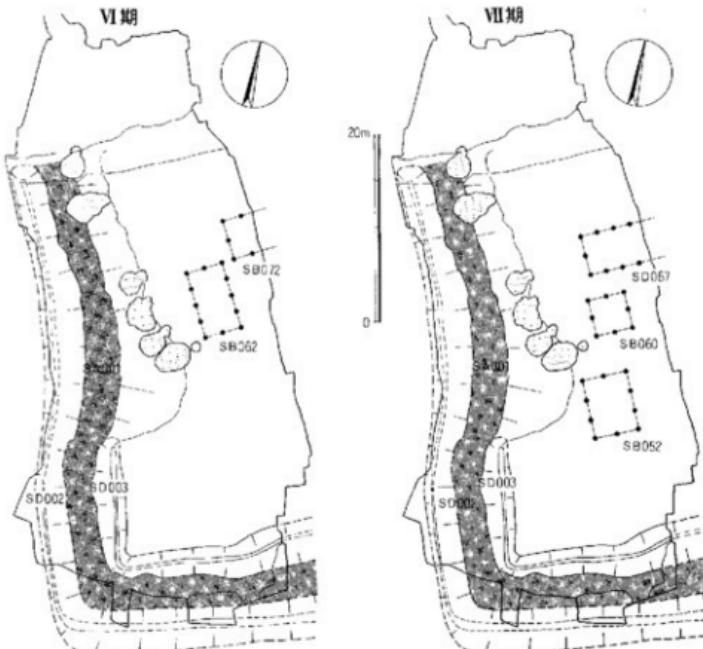


Fig. 61 館内建物配置図 (1 : 600)

	A群	B群	C群		A群	B群	C群
I期	SB051	SB059	SB070	VI期		SB062	SB072
II期		SB056	SB069	VII期	SB052	SB060	SB067
III期		SB058	SB071	VIII期		SB065	
IV期		SB057	SB066	IX期		SB064	SB068
V期		SB063	SB073	X期		SB061	SB074

このうちVIII期にC群建物がみられないのは、復原過程での見落しと思われる。なおA群のSB053・054は他に比して東に振れる建物で何期に属するか明かにしがたい。こうしてみると、館内に配置された一時期の建物は、母屋、脇屋+1棟（A群……必ずしも全期にわたる配置ではないか）、そして削平された東半部建物（1～2棟が想定される）の計4～6棟と想定される。

ちなみに、A群に建物が配置されたVII期と未配置のVI期の構成を例示するとFig.61のとおりである。推定館内面積2,700m<sup>2</sup>からみれば開放とした館内の風景を想定させるが、たとえば法然上人絵伝の源時国邸、一遍上人絵巻の筑前国武家屋敷などに見られる13～14世紀の武家屋敷の姿に通じるところがある。ただし、かかる武家屋敷のばあい、母屋は板張り四面廻の入母屋造り、廻間間に縁をめぐらし、一方には中門廊を併設している。諸岡館の母屋がそこまで整った形態とは見なしがたいが、VI期における母屋SB072と脇屋SB062では縁で結合された構造であったかもしれない。いずれにせよ館内建物の構成は、該期村落とは異なりつつも日常生活を當むにふさわしい居館的な位相をしめすといえよう。

これまで述べてきたところを要約すればつぎのとおりである。

1. 館は三方を沖積地にとりこまれた台地壠に位置し、北方のわずかな高まりを背にして南面している。館外周の東・南・西辺に、幅6～7m、高さ1～2mの土塁と幅2.5m、深さ1mほどの溝をめぐらせる。土塁規模は東西約70m、南北約55mと想定される。

2. 館は14世紀後半に造営され、16世紀中葉前後に廃絶するまで、約200年弱にわたって継続的に使用されている。

3. 館内から多数の掘立柱建物の柱穴が検出された。誤りが多いかと危惧するが、24棟を復原し、10期にわたる建物群の変遷を想定した。その一時期における館内建物は、削平されている東半部を含めても4～6棟で構成されると想定される。

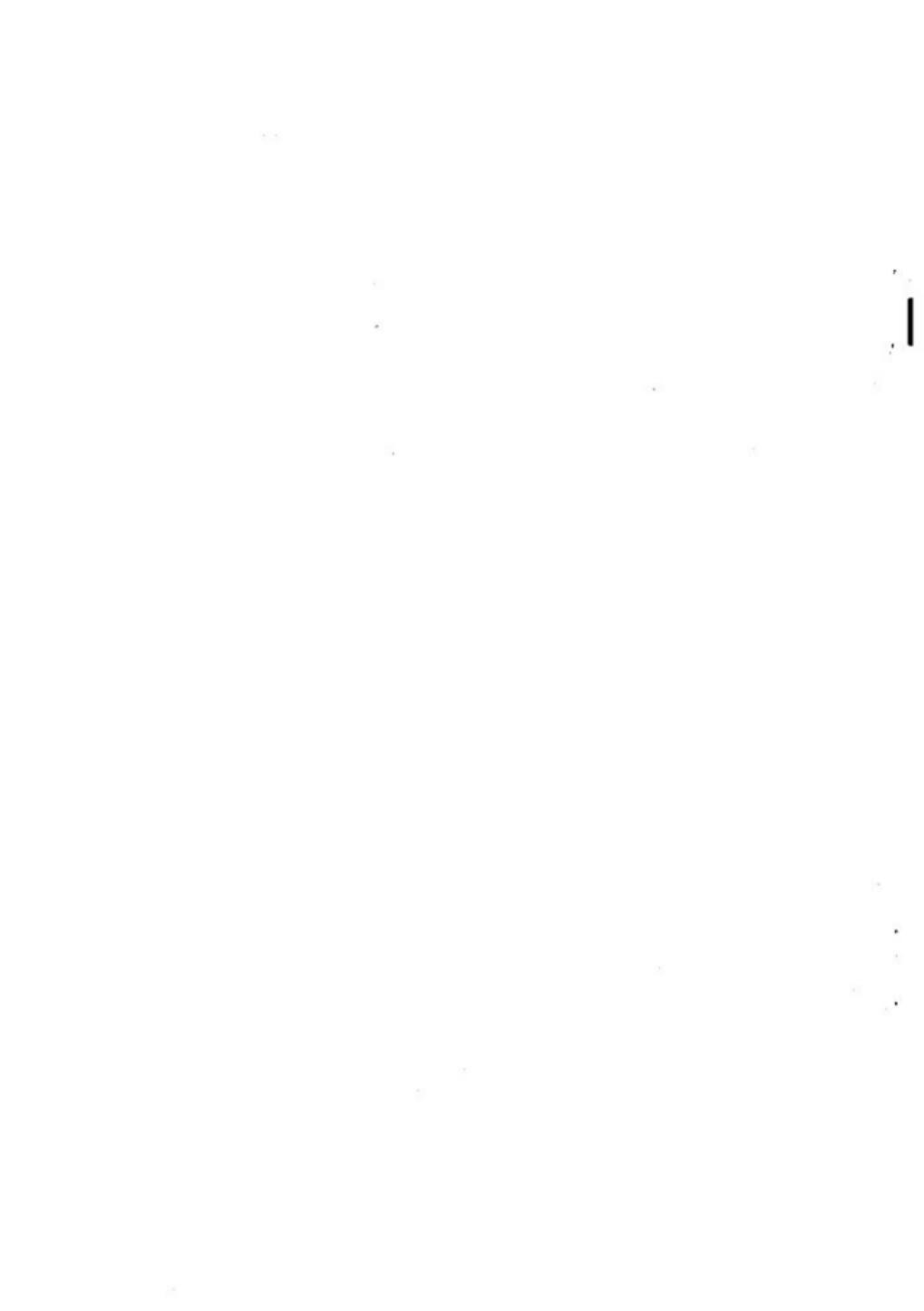
4. 出土遺物のうえでは、在地土器のほか、元～明の中国陶磁器、高麗～李朝の朝鮮陶磁などの構成比率が高い。また美濃、東播、備前などの国産陶器もあるが、貿易都市博多近郊の該期居館址では一般的の傾向である。

以上が、不充分ではあるが諸岡館址発掘調査で得られたおおまかな考古学所見である。では諸岡館址の性格、居住階層が、中世地域史のなかでどう位置づけられるのであろうか。門外漢の筆者には語るべき資格もなければ、また取り組む視点も持ちえていない。近年の開発進行に

伴って、中間村落、城館の発掘調査例は相当数蓄積されてきている。福岡周辺をみても、博多・大宰府といった都市の調査をはじめ、該期の村落、館などの調査例は少くない。だが、どこまで考古学方法による遺跡のトレースがなされてきたか、自身の反省を含めて、不充分といわざるをえない（諸図館並館内の建物復原に誤りの多いこと懲れるが、復原にあたっての私の想いは如上の点にある。乞詫正）。今後の課題としたい。

## 注

- 1) 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和56年度発掘調査概報』 1982
- 2) 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和52年度発掘調査概報』 1978
- 3) 九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和55年度発掘調査概報』 1981
- 4) 間壁忠彦・坂子「衛門焼ノト(3)」(會文考古論集第5号) 1968
- 5) 兵庫県教育委員会『魚住古窯址群』 1983
- 年代鏡に関しては、高槻市教育委員会橋本久和氏の教示による。
- 6) 年代鏡に関しては橋本久和氏の教示による。
- 7) 朝鮮陶磁器については、吉岡完佐氏の教示を得た。
- 8) 九州歴史資料館森田惣氏の教示による。
- 9) 大槻康二「15・16世紀における日本出土青花碗に関する編年試案(1)」(白水No.8) 1981



PLATE



諸岡遺跡周辺空中写真



(1) 第14・17次調査地点遠景（東から）



(2) 第14次調査地点調査前全景（西から）



(1) 第14次調査地点調査前全景（西から）



(2) 第17次調査地点調査前全景（北から）



(1) 第14次調査地点調査終了時全景（西から）



(2) 諸岡館址南半部館内全景（西から）



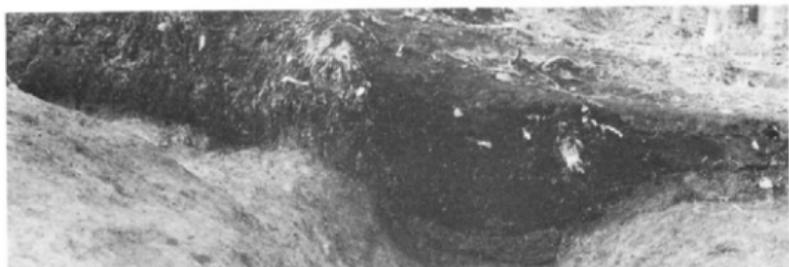
(1) 土壌SA001南邊部（西から）



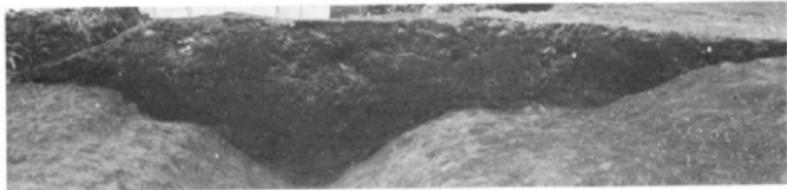
(2) 土壌SA001南邊部断面（西から）



(1) 土壌SA001西辺部（南から）



(2) 溝SD003断面（南から）



(3) 溝SD002断面（南から）



(1) 第17次調査区・土壠SA001西辺と館内（北から）



(2) 土壠SA001西辺と盛土下の道構（北から）



(1) 館内掘立柱建物群（北から）



(2) 館内掘立柱建物群（南から）



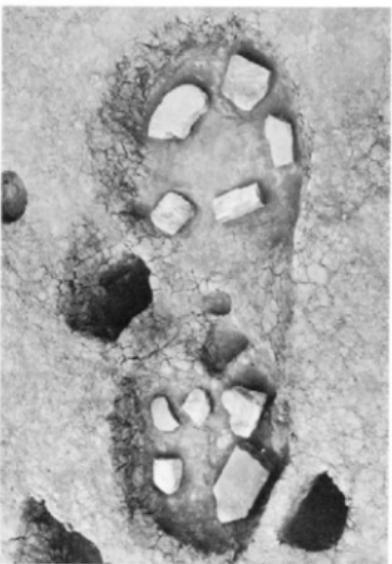
土壤 SK008 (地から)



土壤 SK021 (地から)



土壤 SK027 (地から)



土壤 SK018 (地から)



(1) 地下式土壤群（東から）



(2) 地下式土壤SK039（東から）



(1) 地下式土壤SK035（東から）



(2) 地下式土壤SK036（東から）



(1) 地下式土塙に設けられた横穴（SK036からSK038を見る）



(2) 地下式土塙 SK038（東から）



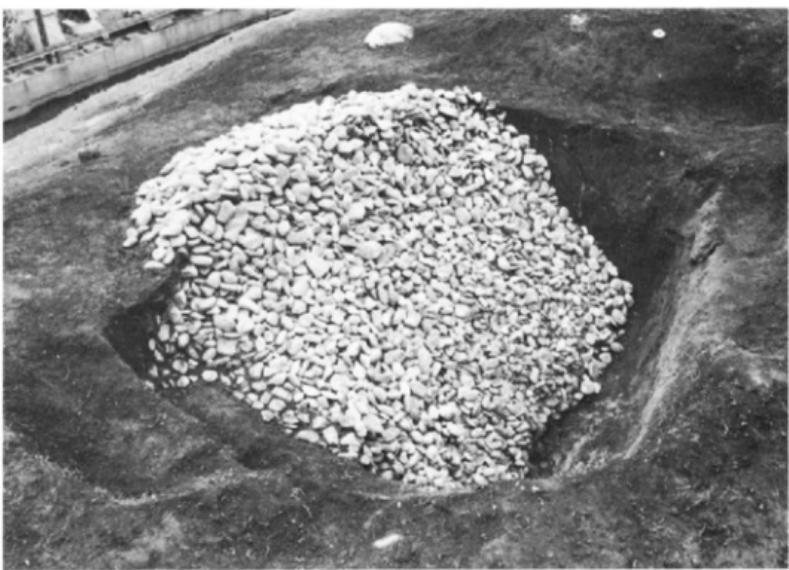
(1) 地下式土塚 SK037 (東から)



(2) 地下式土塚 SK045 (東北から)



(1) 一字一石経塚 SX040 (北から)



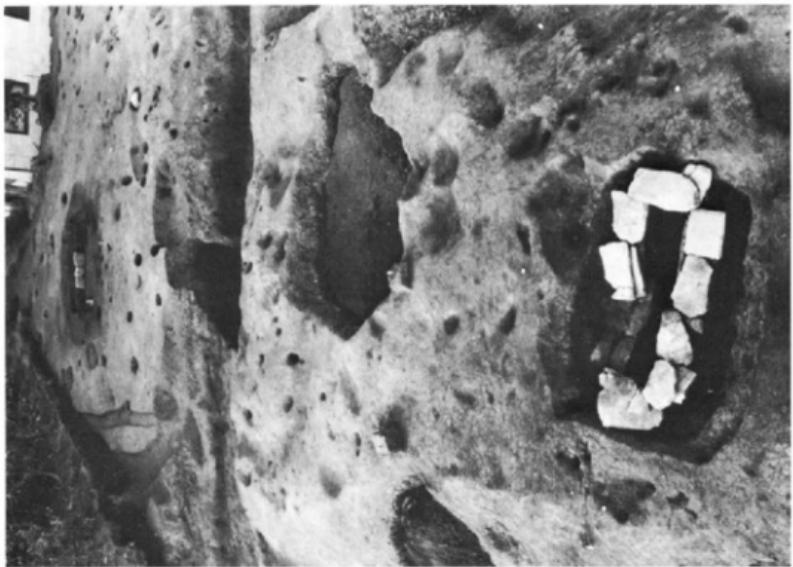
(2) SX040断面 (南から)



(1) 一字一石縄塚 SX040 土壌（北から）



(2) 土壌塚 SX043（東から）



(1) 古墳時代の道樋 (土器SAX001盛土下・北から)



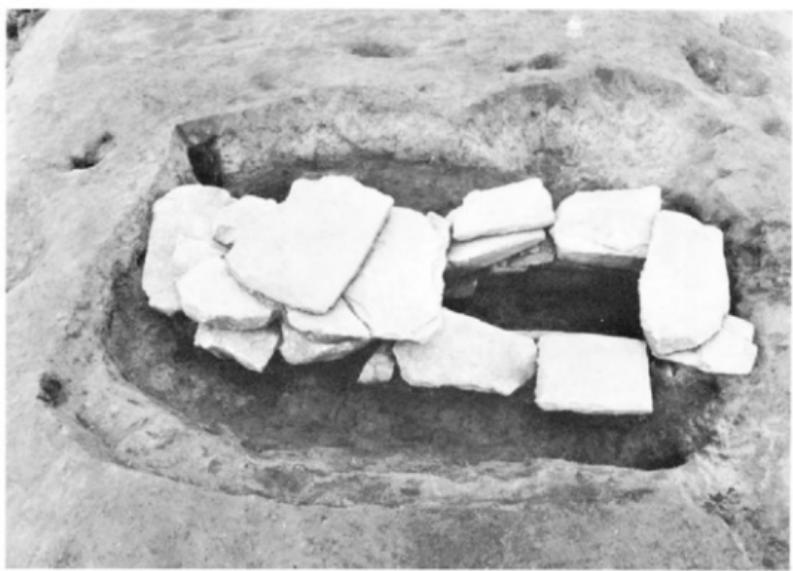
(2) 箱形石棺墓 SX042 (西から)



(1) 石蓋土塚墓 SX044 (北から)



(2) SX044 墓壙 (北から)



(3) 捻穴式石室墓 SX043 (南から)



(1) 壴穴式石室墓 SX043（蓋石除去後 北から）



(2) SX043 石室内（西から）



(3) SX043 腰石の状況（西から）



(1) 横穴式石室 墳 SX046 (西から)



(2) SX046 入口部 (西から)



(1) 弥生時代の遺構（第17次調査 北から）



(2) 弥生時代の遺構（第14次調査 西から）



(1) 袋状竖穴 SK010 (西から)



(2) 土塙 SK013 (北から)



(1) 袋状竪穴 SK014 (西から)



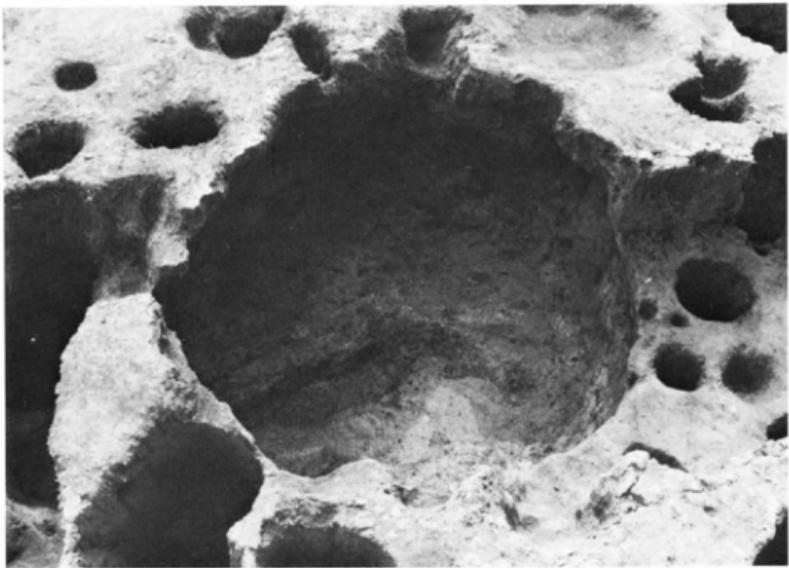
(2) 袋状竪穴 SK015 (東から)



土塊 SK016（西から）



袋状空洞 SK017（東から）



(1) 袋状竖穴 SK024 (東から)



(2) E16・17区上層 (北から)



(1) 先土器時代の調査（ブロック1 東から）



(2) 先土器時代の調査（ブロック2 南から）

SA001盛土



5



2



6



3



11



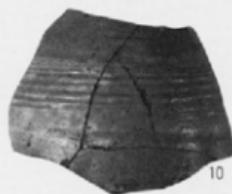
7



8



12



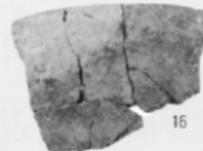
10



9



14



16



13



17

PL. 27

SK002

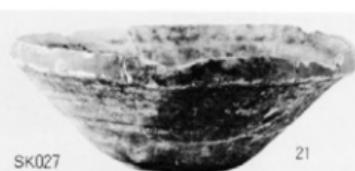


20

SK021



19



21

SK020

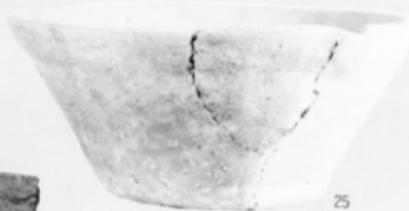


18

SK039

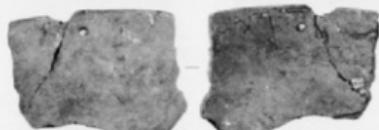


23



25

SK024



24



28



26



27



33



SK036



31



32

SK037



34

SX043



36

SB054



29

SB056



55

SB060



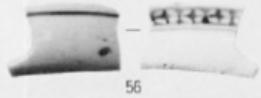
44

SB061



47

SB062



56

SB074



53

ピット・表土



37



45



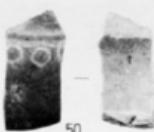
38



49



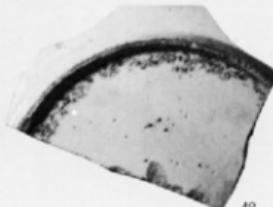
43



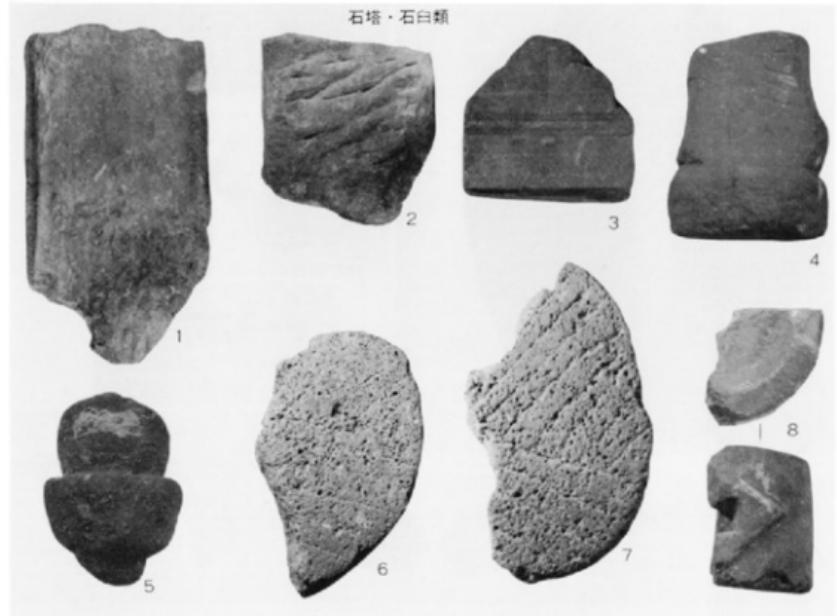
50



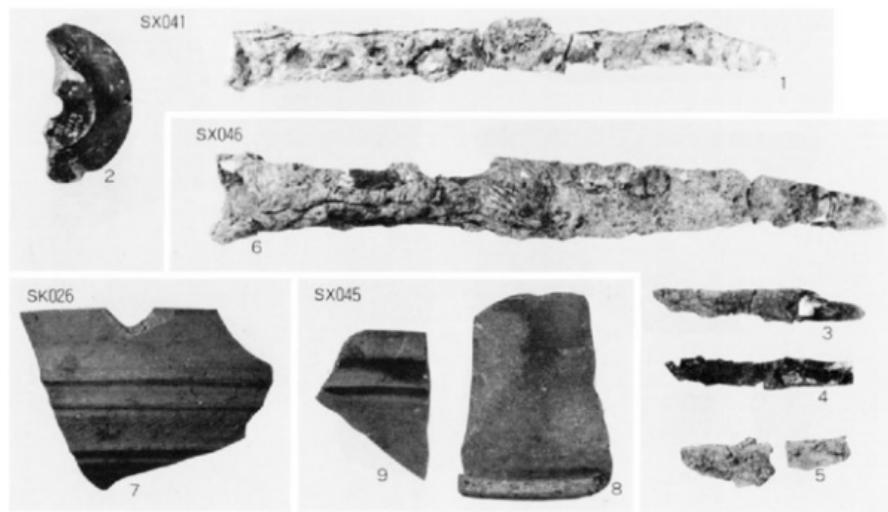
46



48



(1) 諸岡館址の遺物 IV



(2) 古墳時代の遺物



(1) 弥生時代の遺物

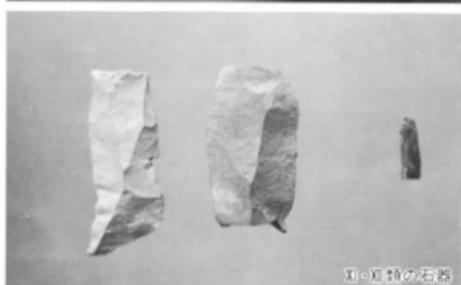
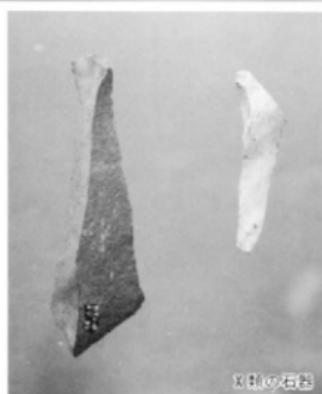


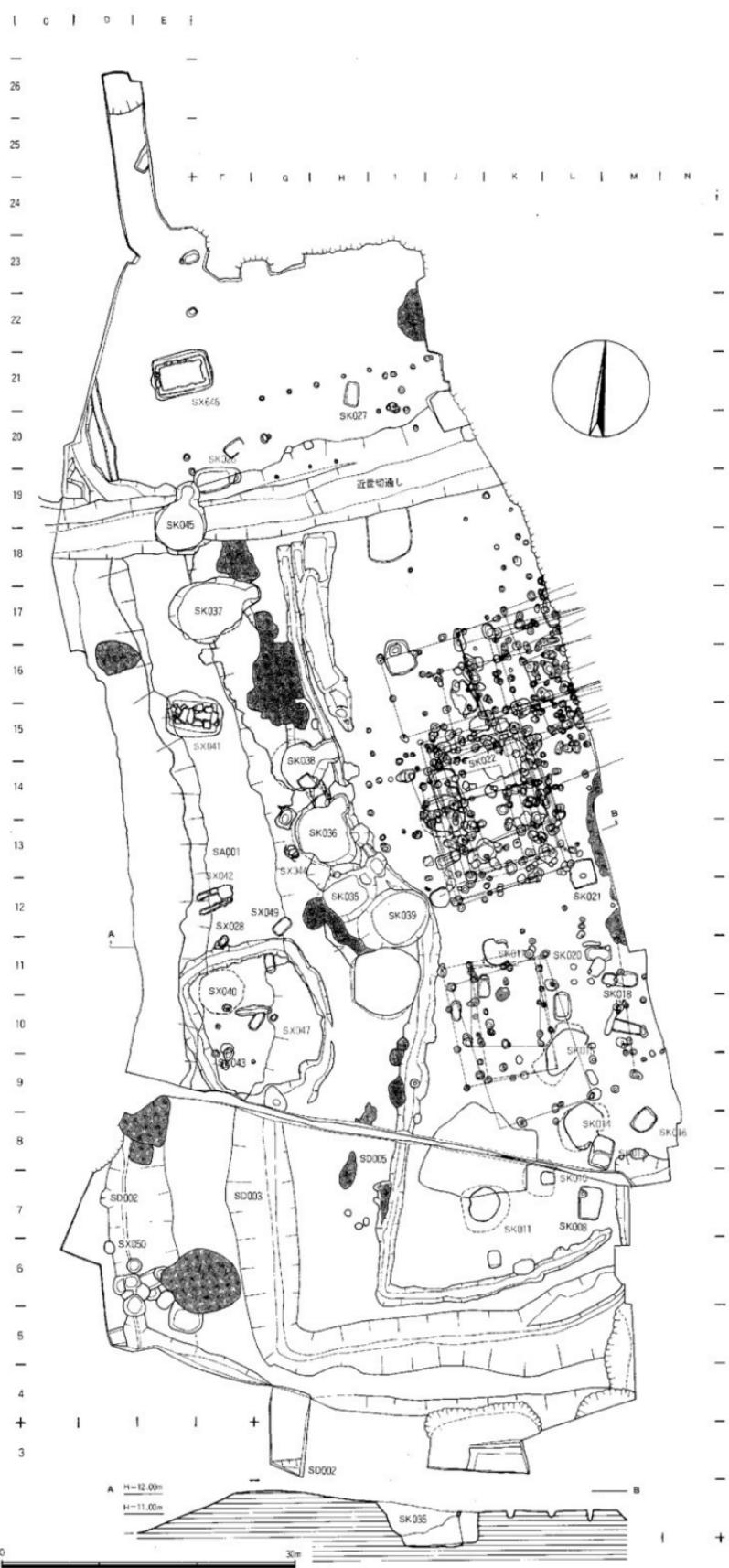
I類の石器



II類の石器

(2) 先土器時代の遺物





付図 諸岡遺跡 14-17調査柵構全体図 (1:200)  
アミは擾乱、館内建物No.はFig.6 (本文11頁) 参照されたい。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集

## 諸岡遺跡

第14・17次調査報告  
1984年3月31日

発行 福岡市教育委員会  
(福岡市中央区天神1-7-23)

印刷 秀巧社印刷株式会社